
バカとテストと召喚獣～水谷兄妹とFクラスと～

DAL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣〜水谷兄妹とFクラスと〜

【Nコード】

N9417V

【作者名】

DAL

【あらすじ】

振り分け試験で途中退室をしてしまいFクラスになってしまった《水谷 恭介》と《水谷 玲奈》彼らがFクラスに入ったことにより物語はどう変わるのでしょうか？

※原作崩壊、ご都合主義、他のアニメ、漫画、小説、ゲームの技、武器、ネタ が含まれています。これらが許せる人はどうぞ読んでみて下さい。

ただ今、原作一巻終了。※作者が受験勉強で大変な事になっており

更新頻度は1週間か2週間に一回です。

プロローグ（前書き）

一応初めての2次創作作品です暖かい目で見守ってください

プロローグ

ここは話題の試験校文月学園である。

何故有名なのかというと、この文月学園には偶然によって生まれた「試験召喚システム」がある。

そしてそのシステムを生かした「試験召喚戦争」略して「試召戦争」というものが存在する。

Side 恭介

俺は水谷恭介、みずたにきょうすけ文月学園の普通の生徒だ。

俺は今、振り分け試験を受けているのだが（恭介）「…メンドイ…」はつきり言ってメンドクサイ、別に勉強が出来ない訳では無いが嫌いだ。

しかし、負けず嫌いの俺としては一応へAクラスへに行きたい。

この文月学園は、二年から振り分け試験の結果によりA～Fクラス分けされる

成績の良い順にA＞B＞C＞D＞E＞Fと分けられ、設備もAクラスが一番良くFクラスが一番悪い。

（まあ、適当に総合3000点位とれば流石にAクラスだろう）と思いつつ、試験を受けていると。

柊「うっ…。」

ふらっ

ボタン！！

と、突然隣に座っていた生徒が倒れた。

倒れたのは、学年4位の成績の立花たちばな 柊もみじさんだ。

すぐさま近づき、（恭介）「おい！！大丈夫か！？」と声をかける
が意識を失っている。

ざわ ざわ… ざわ ざわ…

周りの生徒も気づき、ざわつき始めたが

試験監督「みなさん試験に集中しなさい、これ以上喋ればカンニング
と見なし0点とします。」

と試験監督が注意をしたが、立花に声を掛けるどころか近づこうと
もしない。

俺は携帯電話を取り出し電源を入れた、すると試験監督が

試験監督「水谷君、試験中に携帯を出したらカンニングですよ」

と注意したが立花を気遣う様子は無い、試験監督のこの行動と言動
に俺は

恭介「立花が意識を失っているんだ、すぐさま救急車を呼ぶのが適切な
判断だろ先生！！」

と反論した。すると

試験監督「どんな理由があらうと、試験中の携帯電話の使用はカンニング扱いで0点だ」

と淡々と機械の様に言った。

その瞬間俺はキレた、試験もどうでもよくなった。

恭介「0点でもなんでも勝手に付けてください、俺の成績より、立花を病院に送るために救急車を呼ぶ方が重要です。」

と淡々と答え、立花の脈と呼吸を確認し119番通報をした。

多分貧血か何かだと思うが、意識が中々戻らない

そして救急車の到着を待ったため、俺と立花の荷物を整理し、立花を背負い保健室へと向かった。

その間試験監督は呆気にとられ、俺の行動を見ていた

S i d e 玲奈

みずたにれいな

私は水谷玲奈文月学園の生徒です。

今は振り分け試験の真っ最中なのですが・・・

《0点でもなんでも勝手に付けてください、俺の成績より、立花を病院に送るために救急車を呼ぶ方が重要です》

という兄さんの声が隣の教室から聞こえました

どうやら梶ちゃんが倒れてしまった様ですが大丈夫でしょうか・・・

大方倒れた梶ちゃんに対して声も殆どかけず、周りの生徒を静かにさせることを優先した事にキレたのでしょうか。

しかし0点扱いですか流石に頭にきますね、体調管理も実力の内と言う実力主義の文月学園の方針も最もですが、多分梶ちゃんが倒れた理由は前に言っていた「体質」でしょう、確か学園側には話してあると言っていました・・・多分0点扱いになるでしょう。

梶ちゃんや兄さんが居ないならAクラスに行っても意味が無いですね、なら・・・

ガタッ

玲奈「先生、頭が痛いので保健室に行きます」

私も0点扱いになってFクラスに行きますか勉強何てどんな環境でも出来ますし、ちなみに私は総合5000点位とれますよ。

試験監督「み、水谷さん、途中対質は0点扱いですよ!？」

と監督の先生が驚いていますが

玲奈「別に、良いですよ。」

とだけ言い荷物をまとめて保健室に向かいます。

すると前に栳ちゃんを背負った兄さんが歩いてました。

S i d e 恭介

玲奈「兄さん、栳ちゃんは大丈夫ですか!？」

保険室に向かう途中、後ろから妹の玲奈に話しかけられた・・・っておい!!

恭介「玲奈!？お前、振り分け試験は!？」

玲奈「兄さんが栳ちゃんのことを背負って廊下を歩いているのが見えたので、抜け出してきました。」

なるほど、大方さっきの騒ぎを聞いていたのだろう、試験教室隣りだったはずだし・・・つか抜け出したって

恭介「お前先生に許可は取ったのか？」

玲奈「一応、取り・・・取った事になるんでしょうか？」

と首をかしげながら考えだす、どうやら頭痛を装って退室許可を取ろうとしたみたいだが、監督の先生に一度止められたらしい

まあ学年主席が途中退室で0点になるのがいたたまれなかったのだろう、その先生こっちの試験監督だったら良かったのに・・・

恭介「お前これじゃあFクラス確定だぞ、良いのか？」

玲奈「別にどのクラスでも同じですから別に良いです。」

確かに玲奈は授業を殆ど聞いてない、実は昔両親がふざけ半分で俺と玲奈に「12歳までにどっちが多く知識を覚えるか」という賭けを始め、俺達兄妹に英才教育を始めたそのため俺と玲奈は、一部を除いて高校終了過程までの知識がある。

実はこの賭けが原因で家族崩壊の危機が起きたのだが今は割愛しておこう。

しかし玲奈のことだ

恭介「んで、本音は？」

玲奈「兄さんや椀ちゃんが居ないならAクラスに行ってもつまらないのと、兄さん達が試験を受けていたクラスの監督の先生クソ先生の教員生活じんせを終わらせるために、学園長に直訴するからです。」

恭介「前半は凄く分かるが後半は個人的には凄く嬉しいが止めてくれ、そして落ち着け目が怖い。」

とまあ普段は大人しく、優等生みたいな玲奈だが楽しい行事や、友達や家族のピンチとなると並外れた行動力を発揮する。

そして怒るとマジで怖いっていうか現在進行形で怒っていらっしやる、顔は笑顔だが目が据わっている。

玲奈「仕方ありません、諦めます。では椋ちゃんを保健室に届けて帰りますか。」

恭介「そうだな、立花には悪いがさっさと帰らないと西村さんに呼び出されそうだしな。」

そして、俺達二人は立花を保健室に届け帰宅することにした。

プロローグ（後書き）

前半部分が少しグチャグチャですが、許して下さい
そして私に文才を下さい
感想待ってます。

第一問（前書き）

どうも作者です、何かと玲奈が空気の二話目です。
ではどうぞ。

第一問

Side 恭介

俺が文月学園に入学して二度目の春が訪れた。

桜が咲き誇り新入生が心を躍らせているこの季節に俺はというと。

恭介「遅刻だあああああああああ！！！」

玲奈「兄さん頑張ってください！！！」

玲奈を背負い、絶賛爆走中であつた。

玲奈「全く、兄さんが始業式の前日に徹夜でゲームなんてするからですよ。」

恭介「しょうがないだろ！！だいたい、お前も起こしてくれなかったじゃないか！！！」

玲奈「それが、3回も起こしに行っても起きない相手を遅刻覚悟で待っていた人に対する仕打ちデスカ！？」

恭介「マジすいません！！自分調子乗ってました！！！」

玲奈「分かってるなら、頑張って走って下さい後10分でHRですよ！！！」

クソ、某暴食亡霊の八部咲きに6時間も粘らなければ11時には寝

れたのに、結局夜明けとともに寝ちまったぜ。

おかげで起きたのは8時20分

学園までは15分掛かる

そしてHR開始が8時30分

わざわざ待つて居た玲奈^{いもつと}を背負って全力疾走

そして口論しながら爆走中↑今ここ

恭介「大丈夫、もう学園は目の前だあああああ！！」

全力で走ったおかげで、10分で学園に着いた。すると

西村「ギリギリとは珍しいな、水谷兄妹」

玄関の前でドスのきいた蛇ヴォイスに呼び止められる。声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪で軍人の様な肉体を持ちバ
ンダナや眼帯が似合いそうな男が立っていた。

恭介「あ、西村さんおはようっす。」

玲奈「兄さん：おはようございます、いつもすみません西村先生。」

西村「なあに気にしとらん、何時ものことだからな。」

俺は軽く頭を下げ、玲奈は苦笑をしながらお辞儀をした。相手は生活指導の鬼と呼ばれる西村教諭だが。

恭介「別にいいだろ玲奈、西村さんも気にしてないんだし。」

玲奈「別に先生に『さん』付けすることをダメと言っているわけではなく、ため口をしている事に問題があるって言っているんですよ。」

西村「だから気にしとらんと言っただろう水谷妹、これに関しては水谷兄に何度言っても「これだけは譲らない」と聞かんからな、それに理由を聞く限り悪い気がしないしな。」

と笑って返す。

ちなみに俺が西村先生をため口やさん付け呼ぶのは信頼している先生だからだ、基本信頼していない先生には必要以上に敬語で会話をする。

ちなみに西村さんは『鉄人』と生徒の間で呼ばれている、由来は趣味がトライアスロンだからだ。一度そのことを愚痴ってきた事があり、「生徒に親しまれている証だよ」と言ったが、「それも一理あるが馬鹿にされている感じがある」と苦笑していた。

俺的には、『蛇』^{スネーク}と呼ばれないのが不思議で堪らない。

西村「それより水谷兄妹、振り分け試験の結果だが…」

と言って封筒を俺と玲奈に手渡す。

西村「頭痛で途中退室とは、残念だったな水谷妹。」

『水谷 玲奈……Fクラス』

『水谷 恭介……Fクラス』

玲奈「仕方ありませんよ、体調管理も実力の内ですから。」

と玲奈は西村さんに笑顔で答えていた。

西村「それと水谷兄、済まなかった。」

と西村さんはいきなり頭を下げた。

恭介「に、西村さんどうしたんだよ、いきなり頭なんか下げて!!」

俺が西村さんの予期せぬ行動に戸惑っていると

西村「いや、お前の振り分け試験での行動が教職員の会議で話題になってな、あれはどう考えても試験監督の対応が間違っていたのにお前と立花は0点扱いになってしまったからな、殆どの先生がお前と立花の再試験に賛成だったんだが…学園長とその試験監督が賛成しなかったんだ、学園長は『行動は正しかったかもしれないが、これはルールさね。』と態度を曲げなかった。」

と苦虫を潰したような顔をしていた。

恭介「…西村さん抗議してくれてありがとうございます。」

…まあ再試験があった所で玲奈が途中退室してたから、受けなかったんだけどね。」

一度真剣に頭を下げお礼を言った後すぐに、悪戯な笑みを浮かべ言

った。その様子に玲奈は苦笑を西村さんは呆れて溜息を吐いた後直ぐに真剣な顔し。

西村「お前の取った行動は学園側に全く正しいと判断されなかった、だが俺はお前の取った行動は正しく、誇りの持てることだと思う！
！　　：そろそろHRだ、遅刻するなよ。」

と西村さんは答え門の外を向いた。

恭介「：はいッ！！」

俺は短く返事し敬礼した、そして玲奈と共にFクラスへ向かった。

こうして俺の最低で最高のクラス生活が幕を開けた。

第一問（後書き）

どうも作者です。

まだ全然進んでないorz

まあノリと勢いと現実逃避（受験からの）で始めたことなので仕方ないんですけどね。（汗

なのでいつか更新が滞るかもしれませんが、長くても来年（2012年）の3月にはきちんと週一位のペースで投稿します。どうか長い目で見ていて下さい、よろしくお願いします。

あと、感想、批判とう甘んじて受け付けております。

第二話（前書き）

第一問

問題（化学）

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希・水谷玲奈の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんと水谷さんは引っかけかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……ティファール』

教師のコメント

先生も愛用していますが、合金では無い為不正解です。

水谷恭介の答え

『問題点……？ 加熱すると、 $2\text{Mg} + \text{O}_2 \parallel 2\text{MgO}$ が起こり激しく燃焼し使い物にならなくなる

？ 上記の反応中に激しい光を発するため目がバルスする。』

『合金の例……ステンレス銅、ジュラルミン』

教師のコメント

正解ですが、？の答えは要らないような気がします。

第二話

Side 恭介

Fクラスの教室に向かう途中Aクラスを通りがかった。Aクラスの設備は俺と玲奈の想像以上で教室の大きさは通常の5倍か6倍程もあり、ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートに加え、ドリンクバーや菓子まで用意されていた。

恭介「流石にやり過ぎだろ、つかどこのホテルだよおい。」

玲奈「そうですね流石にこれは豪華すぎます……しかもあのノートパソコン、兄さんが今年の正月に1万円足らずに諦めた最新型のM〇Cじゃないですか？」

恭介「うわ本当だ、あれ一台30万はするやつだぞ!？」

俺と玲奈も本当はこの設備で1年間勉強する筈だったのか……クソ惜しい事をしたぜ。

そんなことを思いながらFクラスに向かっていると

明久「あれ？恭介、こんなとこで何やってるの？」

と後ろから声を架けられた。

振り向くとそこには俺の中学からの親友、吉井明久が頭に疑問を浮かべながら話しかけてきた。

恭介「よお明久、2週間ぶりだな。」

玲奈「おはようございます、そしてお久しぶりです明久君、私も居ますよ。」

明久「えっ、ああ、おはよう玲奈…じゃなくて二人ともAクラスはあっちだよ!？」

どうやら俺と玲奈がAクラスに入らず廊下を進んだことに疑問があるらしい。まあ、俺はともかく玲奈が入らないことには普通驚くよな…

恭介「玲奈の事はともかく、俺の振り分け試験での行動はお前に言っただろう?」

玲奈「私もこの前、買い物中に会った時に話したはずですよ?」

明久「ああ、そう言えばそうだったね、うっかり忘れてたよ…二人とも0点扱いなんだっけ」

恭介「そう言うお前も0点扱いなんだろう?」

明久「そうだよ、そのせいでさっき鉄人に色々言われたよ…でも珍しく褒められちゃった。」

恭介「折角四ヶ月間お前の学力を上げるために頑張って教えてやったのに、途中退室で0点なんて俺に対する嫌がらせか?」

明久「ちよっと!?!恭介には事情を話したでしょう。」

玲奈「そういえば明久君は何で途中退室したのですか？」

明久「そういえば、あの時玲奈には言わなかったっけ？」

と言ひ明久は途中退室の理由を話し出した。

理由は俺と同じで途中で倒れた生徒を保健室に運んだ為らしい、だが誰かは言わなかった。

玲奈「そうですか…相変わらず後先を考えませんね、吉井君も兄さんも本当にお人好しですね。」

明久「そう言われると返す言葉もないよ…。」

恭介「何言ってるんだ明久!! むしろ胸を張って堂々と誇ろうじゃねえか!!」

玲奈「はあ…全く兄さんは…」

明久「あはははは…」

さて話している間に、Fクラス前に到着したが…

恭介「何だ、この廃屋は……………」

明久「恭介、僕たちの教室は何処だろうね？」

玲奈「兄さん、これでも一応教室みたいですよ？明久君は現実を受け止めましょう、これが私達の教室みたいです。」

目の前には小さく小汚い廃屋もとい、Fクラスがあった。見るからにボロボロで、『Fクラス』と書かれたプレートは半分取れていた。

玲奈「とりあえず二人ともそろそろHRが始まります、何はともあれ教室に入りましょう。」

放心状態の俺達を余所に、玲奈は教室のドアを開けた。すると、

玲奈「失礼します、すいません少し遅れ…（雄二）」「早く座れ、このウジ虫野郎」…グズン…」

いきなり玲奈が罵倒された。何処のどいつか知らないが…

雄二「み、水谷妹！！スマンお前だとは（恭介）」「いい度胸だな、坂本雄二。小便はすませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋のシミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK？」水谷兄！！これは違…ギャーーーーーー！！」

とりあえず廊下に連れ出し、肉体言語でO★H A★N A★S Iを開始した。

そして戻った時には俺の自己紹介の番になっていた。

Side 玲奈

玲奈「失礼します、すいません少し遅れ…（雄二）」「早く座れ、このウジ虫野郎」…グズン…」

クラスに入って早々罵倒されました、さっきまで平然を装い兄さん達にフォローをしていましたがもう限界です。

雄二「み、水谷妹！！スマンお前だとは（恭介）」「いい度胸だな、坂本雄二。小便はすませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋のシミでガタガタふるえて命ごいをする心の 準備はOK？」み、水谷兄！
！これは違…ギャーーーーーーー！！」

どうやら、私を罵倒したのは坂本君みたいです。きっと誰か他の人が入ってくると思って罵倒したみたいですが、ちゃんと相手を確認してほしいです。えっ罵倒することについてはスルーですよ、坂本君は言っても聞きませんから。

明久「雄二も馬鹿だなあ、恭介の前で玲奈を馬鹿にするなんて。」

明久君も苦笑しながら空いている席に着きます。どうやら現実を受け入れたようです。

兄さんが坂本君を廊下に引きずり出すのと同時に

秀吉「玲奈よ、大丈夫かのう？」

と、独特な言葉使いと小柄な体格。肩にかかる程度の長さの髪をゆったりと縛ったいでたちの男子生徒、木下秀吉君が心配そうに話かけてくれました。

玲奈「ひっ秀吉君!! 大丈夫ですよ、心配してくれてありがとうございます。」(ニコッ)

と笑顔で返します、何時も秀吉君と話すときは緊張するんですよ
：何故でしょう？

秀吉「／う、うむ／大丈夫なら良いのじゃ、それより何故おぬ
し等3人がFクラスに居るのじゃ??」

秀吉君が顔を赤らめながら、私達がFクラスに居る理由を聞いてき
ました。何故顔を赤らめるのでしょうか？

明久「それについては僕が話すよ、秀吉(二人とも何で気づかない
んだろう)。」

と明久君が秀吉君に理由を話し始めました。明久君の言葉に含みが
あった気がしますが何でしょう?? 明久君が丁度説明を終えると同
時に

福原「失礼しますよ、それと席についてもらえますか? HRを始め
ますので」

担任の先生が入ってきてHRを始めた。

坂本君と兄さんがO★H A★N A★S Iをしているまま。

第二話（後書き）

やっと教室まで行けました、作者です

実はまだ、メインヒロインが出せてなかったりしますorz

まだまだ序盤ですが頑張っていきたいと思います

感想、批判、間違いの指摘、もろもろよろしくお願いします。

第三問（前書き）

第二問

問題（国語）

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- （１）得意な事でも失敗してしまう事
- （２）悪い事があったうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希・立花椋の答え

『（１）弘法も筆の誤り』

『（２）泣きっ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、（２）なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

須川亮の答え

『（２）泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか

土屋康太の答え

『（１）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね

水谷玲奈の答え

『(2) 両親最大の喧嘩を近所のおばさんに言いふらされる(背びれ尾ひれを付けて)』

先生のコメント

ご愁傷様です。

水谷恭介の答え

『(1) 河童も実験大失敗』

先生のコメント

あなたの中の河童のイメージが理解できません

水谷恭介のコメント(欄外)

「河童の科学力は世界一イイイイイイイイ!!」

先生のコメント

そうですか。

第三問

Side 玲奈

兄さんが坂本君にO★H A★N A★S Iをしている間に、担任の先生がやってきました。そして、教室内にいる生徒が全員着席するのを確認するとゆっくりと口を開き、H Rを始めました。

福原「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしく願います。」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、止めました。どうやらチョークすらともに支給されて無いみたいです。

福原「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください。」

五十人位の生徒が所狭しと座っている教室には机と椅子が有りません。あるのは畳と卓袱台と座布団です。最低クラスの設備の噂は去年から聞いていましたが、流石にこれは酷いです。生徒を舐めているのでしょうか？

モブA「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー。」

と、クラスの誰かが先生に設備の不備を申し出ました。

福原「あー、はい。我慢してください。」

モブB「先生、俺の卓袱台の脚が折れています。」

福原「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください。」

モブC「センス、窓が割れていて風が寒いんですけど。」

福原「わかりました、ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう。」

福原「それと皆さん、必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください。」

教室の隅には蜘蛛の巣が我が物顔で形成されています、壁はひび割れや落書きのない場所を探す方が困難な状況です。そして、どこからというわけでもなく教室全体からかび臭い独特の空気が漂っています、古い畳の一部が腐っているのでしょうか。前言撤回です、この学園は生徒を舐めています。

福原「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね廊下側の人からお願いします。」

福原先生の支持を受けて、廊下側の一番前、私の隣に座っていた秀吉君が立ち上がり自己紹介を始めました。

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

自己紹介を始めた秀吉君を見て誰かが《美少女だ…》と呟いていましたが、秀吉君は男子ですよ？双子のお姉さんに瓜二つと聞きますが、私には秀吉君は男子にしか見えません。

秀吉「一と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい、…………ちなみにわしは、『男』じゃからな。」

…秀吉君、強く生きてください。

康太「……………土屋康太。」

こんどは、小柄でおとなしそうな生徒です。しかも名前だけです、流石に短すぎじゃないですか？

それにしても男子しかいませんね、学力最低クラスだとやっぱり女子はいませんか…

美波「一です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きは苦手です。」

と少し考えていると、こんどは女の子の自己紹介です。

美波「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味はー」

声を聴く限り結構活発そうな人ですね、できれば数少ない女子同士仲良くできれば良いのですが…。

美波「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

前言撤回です。活発でわなく、かなりヴァイオレンスな女子ですね。

美波「はろはろー」

明久「…あう。し、島田さん」

美波「吉井、今年もよろしくね。」

島田さんは明久君に笑顔で手を振っていますが、とうの明久君は笑顔を引き攣らせています。知り合い同士みたいですが大丈夫でしょうか？まあ、兄さんがいますからその辺りはなんとかなるでしょう。

そんなことを考えていると明久君の番になりました、どんな自己紹介をするのでしょうか？

明久「ニコホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね♪」

Fクラス男子ほぼ全員『ダアアアアアリイイイイン!!』

うう、気持ち悪いです。明久君も明久君で酷いジョークですが、Fクラスのノリの良さと野太い大合唱に、不快感と嫌悪感しか感じません。明久君も複雑な顔をして驚いています。

明久「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します。」

明久君は勉強が出来る様になっても、こういうところは変わりませ
んね。だから小学生に『馬鹿なお兄ちゃん』って呼ばれるんですよ。

どんどん自己紹介が進み、私の一つ前に差し掛かった時。

恭介「すいませーん、坂本このバカと話し合い（肉体言語）していたので遅れました。」

と兄さんが返り血を浴び、坂本君を引きずりながら教室に入ってきました。そして坂本君を開いている一番後ろの窓側の席に：

恭介「オラァ！！」

ポイツ

ドカン！！

雄二「グフウ！！」

投げ捨てました。どうやら死んではないみたいですね、気絶はしてませんが。

福原「水谷君ですか、ちょうどいいです自己紹介してください。」

福原先生が兄さんに自己紹介するように言いました。

S i d e 恭介

恭介「すいませーん、坂本このバカと話し合い（肉体言語）していたので遅れました。」

俺が坂本にO★H A★N A★S Iをし終え教室に入ると自己紹介をしていた、全員一斉にこちらを見るがほとんどの生徒が何事もなかったように視線を前に戻す、俺が言うのもなんだが今年のクラスメ

ートは思いのほかタフだな、こっちは返り血浴びているのに顔色一つ変えないぞ、担任らしき先生も含めて…まあ、とりあえず。

恭介「オラァ!!」

ポイツ

ドカン!!

雄二「グフウ!!」

とりあえず坂本を教室の一番後ろの窓際の席に放り投げた。え、そこまでするか、当たり前だろクラスメートは投げ捨てるものだ。

さて、玲奈と明久以外に誰が居るか…おっ、土屋に島田、秀吉も居るじゃないか!! これは早急に明久とH R K ^{プラン}計画の話し合いが必要だな!! 島田は俺を見て気まずそうに目をそらしている、流石に去年やり過ぎたな…今年は少しぐらい協力してやるか…。

福原「水谷君ですか、ちょうどいいです自己紹介してください。」

と、担任の先生に言われた。じゃあ軽く自己紹介と行きますか!!

恭介「水谷恭介だ、そこに座っている玲奈とは双子の兄妹だ『ガタッ!!』困みに、俺と玲奈、明久、秀吉に害を与えようとすればさつき投げ捨てた、坂本より酷い状態にするから覚悟しろよ『チッ!!』それじゃ一年間よろしく。」

俺と玲奈が兄妹と言った瞬間、秀吉と明久、気絶している雄二、土屋以外の男子全員から尋常じゃない殺気を感じたので軽く脅しとい

た。前言撤回こいつらはタフなんじゃねえ、嫉妬で狂ってるだけだ！！まあ、襲ってきたらO★H A★N A★S I スペシャルverをお見舞するから良いんだけどね。ちなみに坂本にやったのはまだ全然軽い方だけどな。男子全員が座ると同時に玲奈が苦笑しながら、立ち上がり自己紹介を始めた。

玲奈「全く兄さんは（ボソツ）：水谷玲奈です。さっき兄さんが言いましたが、恭介とは兄妹です。一年間よろしくお願いします。（ニコツ）」

玲奈が笑顔で自己紹介を終えた途端。

Fクラスほぼ全員『福眼じゃー！！！！！』

とクラスの男子が騒ぎ出した。

モブD『玲奈ちゃん可愛いよ』（グハア！！）』

モブE『水谷さん俺だ！！結婚S i（グヘエ！！）』

モブF『ハアハア、玲奈タン、ハアハ（ヒデブウ！）』

恭介「お前ら言った傍からいい度胸だ。よろしい、ならば戦争だ！！」

強烈なラブコールをし出す、男子を殴り飛ばし残りの男子に威嚇をした

Fほぼ全員『サーセン！！俺達チョーシ乗ってました！！』

玲奈「兄さんやり過ぎ…」

と男子たちはジャンピング土下座をし、玲奈はこのやり取りに呆れ苦笑していた。

その後はしばらく、名前を言うだけの単調な動作が続き終盤に差し掛かった所で不意に教室のドアが開き。

瑞樹「あの、遅れて、すいま、せん……」

椛「す、すみましえん、お、遅れました!!」

一人は息を切らせながら、もう一人はガチガチに緊張しながら、二人の女子生徒が入ってきた。

Fクラス全員『えっ?』

そして、誰からと言う訳でもなく驚きの声上がる。そりやそうだ。普通はビックリするだろう。

そんな中、福原先生だけ平然として。

福原「丁度良かったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん、立花さんをお願いします。」

瑞樹「は、はい! あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

椛「たちばなみじた、立花椛です。い、一年間、よ、よろしくおにえ!!…お願いします!!」

学年3位と4位の彼女達が目の前であいさつしていた。

第三問（後書き）

どうも作者です。

やっとヒロインを出せました、だけどこの後どうするかほとんど決めてないんですよ（汗

とりあえず今日はここまでです。

感想、批判、誤字、脱字指摘、などなど受け付けております。

これからよろしくお願いします。

第四問

Side 玲奈

驚きました。椛ちゃんの事は勿論知っていましたが、まさか瑞希ちゃんまでFクラスに来ると思いますませんでした。

モブG「はいっ！質問です！」

クラスメートの1人が2人に対して質問をしました。クラスに入って早々質問を受けたことに2人とも驚いています。

瑞樹、椛「あ、は、はいっ。なんですか？」

モブG「なんでここにいますか？」

モブH「そういえば、水谷さんもなんでここにいますか？」

クラスメートの質問に、もう1人のクラスメートが私に対しても質問します。聞きようによっては失礼な質問ですが、私達は去年1年間のテストで毎回学年上位一桁に入っていたので普通、Fクラスにいることはありません。

瑞樹「そ、その…」

椛「え、えっと…」

二人は緊張した面持ちで身体を固くしたまま、私は自然な面持ちで口を開きました。

瑞樹「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

柊「わ、私は貧血で倒れちゃいました……」

玲奈「私は頭痛で退室しました。」

試験途中での退室は0点扱いとなります。ですから私達3人は0点扱いで結果としてFクラスに振り分けられてしまったのです。

そんな私たちの言い訳を聞き、クラスの中でもちらほらと言いつの聲が上がります。

モブ『そう言えば、俺も熱の問題が出たせいでFクラスに』

モブ『ああ。化学だろ？アレは難しかったな。』

モブ『俺は弟事故にあったと聞いて実力を出し切れなくて』

モブ『黙れ一人っ子』

モブ『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

モブ『今年一番の大嘘をありがとう』

……どうやらこのクラスは私の想像以上に馬鹿な人が多いですね。

瑞樹、柊「で、ではっ、一年間よろしくお願いします」

そんな中、逃げるように瑞希ちゃんは明久君の隣に柊ちゃんは私の

後ろで兄さんの隣に座りました。

柊「うう、緊張したよ……あ、玲奈ちゃん今年もよろしくね。」

玲奈「よろしくお願いします、柊ちゃん。それより大丈夫でしたか??」

私と柊ちゃん、瑞希ちゃんは去年同じクラスでした。いつも三人でいることが多かったのですがこの学園で一番仲の良い二人です。私は後ろに座った柊ちゃんに振り分け試験の時の事を聞き始めました。

柊「うん、大丈夫だよ。いきなり意識が途絶えて、起きた時に保健室に居たのはビックリしたけどね。」

玲奈「倒れたのは例の『体質』ですか？」

柊「うん、そうなんだけどやっぱり普通の定期テストじゃないから考慮されなかったみたい。何人かの先生が学園長に掛け合ってくれたみたいけど『振り分け試験での例外は認めない』の一点張りだったみたい。……ちよつと悔しいかな。」

玲奈「そうでしたか……。」

柊ちゃんは昔から貧血を起こしやすい体質のようで、去年の定期テストでも一度貧血で倒れています。その時は事前に学園側に体質の事を話していたので再試験になりましたが、今回はダメでしたか……『振り分け試験での例外は認められない』ですか……

玲奈「それより、柊ちゃんは保健室に連れて行ってくれた人にお礼を言いましたか？」

栞「それが、保健室にいた先生に聞いても誰だか教えてくれなかったんだよね『匿名希望だそうです。』って、だから謝りたくても謝れないんだよね。」

：だから、あの時兄さんは養護教諭の先生と何やら長々と話していたんですか：帰り際の兄さんの顔が真っ赤だったのと、先生がニヤニヤと兄さんを見ていたんですね納得です。

玲奈「ボソッ」：栞ちゃん、栞ちゃんを保健室まで運んだのは、そこにいる私の兄さんですよ。」

栞「ボソッ」え、玲奈ちゃんのお兄ちゃんって……きよ、恭介君！？」

玲奈「ええ、ですから今がお礼を言うチャンスですよ（それと、兄さんにアタックする、チャンスですよ）ボソッ」

栞「うつ、うん／／／／お礼言ってくるよ／／／／」

と言って栞ちゃんは明久君、瑞希ちゃん、坂本君と何やら話している兄さんのもとへ行きました。

実は栞ちゃんは、一年の時に教科書を私に借りに来た兄さんを見た後、しつこく兄さんの事を聞いてくるようになったので逆に問い詰めてみると、一目惚れをしたみたいです。兄さんも栞ちゃんの事を意識しているみたいですが栞ちゃんは奥手ですし、兄さんは自分に対する好意『だけ』には鈍感ですからね……うまくいけばいいのですが……。

S i d e 恭介

二人が自己紹介を終え席に座る。おっ、姫路が明久の隣に座ったみたいだな姫路は気づいて無いみたいだが…：そういえば明久は姫路の事が好きって前に言ってたな、まあ問い詰めて吐かせただけど。おっ明久が姫路に話しかけようとしてる。奥手な明久にしては成長したな。

明久「あのさ、姫―」

雄二「姫路」

瑞樹「は、はいっ。何ですか？えーっと……」

っておい、坂本なに明久の邪魔をしてんだよ、このKY…いやあいっ今明久に向かって『してやったり』って顔をしてやがる、確信犯だなこの野郎。つか、いつの間に起きやがった。

雄二「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」

瑞樹「あ、姫路です。よろしく願います。」

恭介「坂本、今わざと明久に被せて姫路に話しかけただろ。」

雄二「知らんな、偶々じゃないか？それよりさっきはよくもヤツてくれたな、死ぬかと思ったぞ！？」

恭介「玲奈をウジ虫呼ばわりするからだろ、自業自得だ！！」

明久「二人とも落ち着いて、それより姫路さん体調はもう大丈夫？」

瑞樹「よ、吉井君！？」

姫路が明久を見て驚いて顔を赤くしている、どうやら脈ありっぽいな良かったじゃねえか明久…ってなんでお前はそこでショックを受けたような顔をする！！

雄二「姫路。明久がブサイクですまん」

恭介「おい坂本、明久は去年の新聞部のランキングで150位にいたぞ、それだとこの学園の200人以上がブサイクになるぞ…それにお前も同立だったぞ」

因みに学園の全女子が全男子を1位〜400位まで格付けし結果を集計するという企画だった。俺は、明久より少し上の130位ぐらいだった。って、今舌打ちしやがったあの野郎。

瑞樹「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ……」

雄二「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

ほう、中学の時は何度か明久に気がある奴がいるって噂を聞いた事があるが、この学園では初めて聞くな。

明久「え？それは誰―」

瑞樹「そ、それって誰ですかっ!？」

明久の声を遮るほどの大きな声で姫路が坂本に食付いた、さっきのホオローと言いいこれは完全に明久のことが好きだな…よかったじゃないか明久…って案の定、気付いて無いよこの鈍感は…

雄二「確か、久保――利光だったかな」

久保利光 ↓ ♂（性別／オス）

ってアイツかよ同性愛者って噂は聞いた事があるが、よりにもよってターゲットは明久かよ…早急に始末する必要がアルナ…

明久「……………」

雄二「おい明久。声を殺してめざまざと泣くな。」

そりゃだれだって泣くだろう、同性に恋愛対象に見られれば…

雄二「半分冗談だ。安心しろ。」

明久「え？残り半分は？」

雄二「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

瑞樹「あ、はい。もうすっかり平気です。」

明久「ねえ雄二残りの半分は!？」

恭介「落ち着け明久、半分は友達としての好意だろう（多分）ボソッ」

とりあえず真偽を確かめる前に、明久を落ち着かせる。

福原「はいはい。その人達、静かにしてくださいね。」

流石に、うるさかったのだろう。先生が教卓を叩いて注意してきた。

明久「あ、すいませー」

バキィッ バラバラバラ……

突如教卓がゴミ屑と化した、軽く叩いただけで壊れるとは…

福原「えく……替えを用意してきます。少し待っていてください。」

気まずそうに告げると、先生は足早に教室を出る。

瑞樹「あ、あはは……」

隣りで姫路が苦笑いをしていた。そして明久が真剣は顔で何かを考え

明久「…雄二、恭介、ちょっといい。」

雄二・恭介「「ん？なんだ？」」

明久「ここじゃ話にくいから、廊下で。」

雄二「別にかまわんが」

恭介「…真面目な話みたいだな」

俺は明久が真面目な相談をしようとしている事に気づき。

恭介「じゃあ廊下に――」

椀「き、恭介君!!」

出ようとしたとき、立花に話しかけられた。

第四問（後書き）

どうも作者です。

なかなか試験召喚戦争に入れませんorz
めげずに頑張っていきたいと思います!!

感想、誤字、脱字、間違い指摘、批判など絶賛受付中です!!
これからよろしく願います。

第五問（前書き）

問題（英語）

以下の英文を訳しなさい

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

水谷玲奈の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。二人ともきちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか

吉井明久の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

一瞬、カンニングを疑った先生を許してください。

水谷恭介の答え

『これは本棚、祖母が定期的に使っていた』

教師のコメント

一応正解ですがきちんと文にして下さい、あと「had used regularly」で「愛用していた」と訳します、覚えておきましょう。

第五問

Side 恭介

柊「きよ、恭介君!!」

明久達と話をするために廊下に出ようとすると、立花が俺に話しかけてきた。

恭介「ん?なんだ、立花?」

柊「え、えつと、あ、あの……」

明久「どうしたの恭介?早く来て:やっぱりいいや。後で説明するから、立花さんの話を『ゆっくり』聞いてあげて。」

恭介「あ、ああ、わかった。」

と言い明久と坂本は廊下に出て行った。妙にニヤニヤしながら……

恭介「んで、何の用だ、立花?ちょっと立て込んでるから手短に頼むぞ。」

立花には悪いが今は話している暇はない。俺の予想が正しければ、明久がやろうとしていることはこのクラス:いや、この学年全体が関わってくることだ。

柊「は、はい。あ、あの振り分け試験の時、保健室まで運んでくれ

てありがとうございました!!」

…えっ、何で知ってるんだ!! わざわざ保健室にいた先生には俺が運んだ話を話さない用に言ったのに!!

恭介「な、なんの事だ!? 俺はなにも」

柊「玲奈ちゃんに教えてもらいました!! そのせいで、恭介君が0点扱いに……………」

ってお前か玲奈!! クソ、玲奈が立花と仲がいい事をすっかり忘れてたぜ。せっかく立花が俺に気を使わないようにしたのに…しかもあんにやろう、こつちを見てニヤニヤしてやる。

恭介「ま、まあ気にするな、困った時はお互い様だろ、だからこの話は終わりだ!!」

柊「だ、ダメです!! せめて何か、お礼をさせて下さい!!」

ナンテコッタ、こんなに立花が律儀な性格だとは思わなかった…しかも一歩も引きそうにない…

恭介「いや別にいいか（モブ全員）『もう我慢できーん!!』な、なんだ!？」

柊「ふえ!？」

どうか立花に納得してもらおうとしたとき、一斉にクラスの男子が立ち上がり雄叫びを上げた。

モブ『俺の目の前でイチヤイチヤしやがって!!』

モブ『そうだ、モテない俺達への当てつけか!!』

モブ『なぜ水谷兄ばかり…許せん!!』

モブ『ガンホー! ガンホー!』

モブ『そうだ、理不尽だ!!』

なにが理不尽だ…理不尽なのはそっちだ!!

恭介「なんで、立花と話しているだけで目の敵にされなきゃいけないんだよ!! しかも今の会話のどこをどう解釈したら『イチヤイチヤしてる』に結びつくんだよ!! 立花も何か言ってやれ!!」

椀「(ボソツ) わ、私ときよ、恭介君がイ、イ、イ、イチヤイチヤ!!」

ボンツ!!

俺が立花に助けを求めると、いきなり頭から煙を出し顔を赤くした。

恭介「って、おい!! どうしてこのタイミングで顔を赤くする!!」

モブまとめ役『諸君。ここはどこだ?』

モブ共『『最後の審判を下す法廷だ!』』

モブまとめ役『異端者には?』

モブ共『』『死の鉄槌を!』『』

まとめ役『男とは?』

モブ共『』『愛を捨て、哀に生きるもの!』『』

まとめ役『宜しい。これより――二一F異端審問会を開催する!』

クラスメートの男子の殆どが『本当にこのクラス、今日が一学期始業式か!?』と思わせるくらいの団結力を見せる。：正直もう、こいつ等メンドクサイ：

まとめ役『被告人、水谷恭介。判決は有罪。刑は《屋上から紐無しバンジー》だ。無論、異議、反論、言い訳、その他もろもろは認めない。』

モブ共『異議なし!!』

恭介「テメー等、いい加減に（玲奈）「誰を屋上から突き落とすのですか?」ってヤバッ!!」

そろそろ俺の我慢の限界に達しようとした時、玲奈の言葉と共に教室の空気が凍った。

玲奈「ねえ皆さん、誰を屋上から突キオトスノデスカ?」

モブ『誰って…ヒィ!!』

モブ『そんなの…うわぁ!!』

モブ『決まって…ひゃあっ!!』

ヤバイ、マジでヤバイ!! 玲奈が本気で怒ってらっしゃる。いつもの柔らかい表情ではなく、満面の笑みだ…そして目が笑ってない!! こうなったら俺でも止められない。ここは…

恭介「立花、姫路、島田、秀吉、ついでに土屋!! 急いで廊下に出ろ!!」

ターゲットになってない生徒を連れて廊下に避難だ!! は、止めないの? 言っただろ、俺じゃあ止められないし、止める!! 俺が死ぬだ!!

美波「ええ!! 分かったわ。」

秀吉「りよ、了解じゃ!!」

康太「……異議なし。」

瑞樹「は、はい分かりました。」

椀「ふ、ふえゝ、れ、玲奈ちゃん、お、落ち着いて!!」

立花がなんとか、玲奈を止めようとしてるが…

恭介「立花、良いから来い!! 死ぬぞ!!」

無理やり手を引っ張り廊下に連れ出しドアを閉めた。

雄二「お、やっと来たか…って何で他の奴もいるんだ??」

明久「恭介、なんで姫路さんたちも連れて来たの!?!」

先に話を始めていた明久と坂本が俺以外のやつが来たことに、疑問を揚げる。

恭介「スマン、明久、坂本…玲奈がマジ切れした…」

雄二「はっ? お前なに言っつて(明久)」「き、恭介、そ、それ本当!?!」ど、どうした明久そんなに震えて!?!」

坂本は訳が分からないという顔をしたが、明久はまるでこの世の終わりの様な顔をして俺に聞き返してきた。そうだね、明久は一回体験してるんだよね。

恭介「残念ながら本当だ、明久。坂本、今から最低10分間は教室に入らない方が良いぞ。」

俺が明久に残酷な事実を告げると、明久は更に顔を青くし教室とは逆にある廊下の隅で頭を抱えながら「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ…」と呟いき始めた。坂本はますます訳が分からないという顔をした。

雄二「本当に明久はどうしたんだ!?!そんなにヤバいのか水谷妹が切れると!?!」

ああ、無知とはなんて残酷なんだろう…まあ明久がここまでのトラウマになった理由は『本気のマジ切れ』が原因だけどね、今回ののはまだ全然軽い方かな…。

恭介「…成程、姫路の為にAクラスに『試召戦争』をねえ…」

雄二「もつとも、本人は姫路も為って事は否定してたがな。」

ハッキリ言って予想どおりの提案だった。お人好しの明久の事だから姫路や玲奈、立花の為に設備をどうにかしようと思ったんだろう、そして一番手っ取り早いのがAクラスに『試召戦争』を仕掛けて勝利し、クラスの設備を入れ替える事だ。

恭介「それにしても、お前は良く賛成したな。」

雄二「まあ明久が言われなくても、俺自身Aクラス相手に試召戦争をやろうと思ってたところだからな」

恭介「へえ、お前も設備目当てか？」

雄二「いや俺はただ、世の中学力だけが全てじゃないって、証明を試してみたくてな」

恭介「なるほど（意外だな）、まあ明久の頼みだし俺も本気を出すから戦力に数えていいぞ。」

雄二「ほう、じゃあきっちり働いてもらうから、そのつもりで頼むぞ。」

恭介「了解、お、教室が静かになったな、もう入って大丈夫そうだな。」

雄二と話している間に、玲奈の怒りが収まったようだ。

雄二「そうみたいだな…おっと、先生が戻ってきた。全員教室に入るぞ。」

先生も戻ってきたので教室に入ると、なぜかクラスメート全員が背筋を伸ばし正座で座っていた…そして、その原因を作ったであろう当の本人は…

玲奈「お帰りなさい、皆さん。」

と何事もなかったかの様に俺達に挨拶をした。

恭介「…玲奈やり過ぎだ。」

玲奈「兄さんを殺そうとしたんですから、この位当然です。むしろ軽い方です。」

…もう何も言うまい。結論は玲奈が切れたら誰も止められないだ。

そして先生も入ってきて。

福原「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします。」

壊れた教卓を替えて、気を取り直してHRが再開される。

そして特に何も起こらず、また淡々とした自己紹介の時間が流れる。

福原「坂本君、クラス代表の君が自己紹介最後の一人ですよ。」

雄二「了解」

先生に呼ばれて雄二が席を立つ。

そして真面目な様子で、教卓に立ち自己紹介を始めた。

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。」

玲奈から受けた恐怖が抜けてきたのか、注目する生徒は少ない。まあ最低クラスのFクラス代表じゃ、そんなに威厳が出ないしな。

雄二「さて、皆に一つ聞きたい」

そんなFクラス代表の雄二が、ゆっくりと、全員の目を見るように告げる。

間の取り方が上手いせいにか、全員雄二に注目する。

そして雄二は教室の各所を見渡す。そしてつられてクラスメート全員が後を追う。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓上台。

雄二「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」

一呼吸おいて、静かに告げる。

雄二「――不満はないか？」

クラス全員『大ありじゃあっ!!』

二年F組生徒の魂の叫び。

雄二「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。」

モブ『そうだそうだ!』

モブ『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ!改善を要求する!』

モブ『そもそもAクラスだって同じ学費だろ?あまりに差が大きすぎる!』

クラスメートの全員が不満の声を上げる。その反応を見て不敵に笑い我らの代表は

雄二「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは代表としての提案だがFクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う。」

戦争の引き金を引いた。

第五問（後書き）

ビックボスと言ってくれさん、感想ありがとうございます。
どうも作者です。

今回は内容が少しgdgdになってしまったorz

そして玲奈ブチ切れ（笑）え、まだ本気で怒ってませんよ。

例えるならば…某核ゲーの某demon medium R の7
Pですね『まだ』機嫌の良い玲奈です。

そんな訳でこれからもよろしくお願いします。

感想、誤字、脱字、間違い指摘、批判等、絶賛受付中です。

第六問（前書き）

実は今、投稿作業中にPVとユニークの見方をやっと発見しました。（今頃かよー！）で8／23、16時、時点でPV3,063アクセス、ユニーク513人……い、意外と多い（汗）

実はもっと、少ないと思ってました。

ぶっちゃけPV1000 ユニーク100行けばいいかなーって思ってた。

なのですごくうれしいです！！

ではバカテスとからどうぞ！！

問題（生物）

地球上から恐竜が絶滅した理由を書きなさい

姫路瑞樹、立花椋の答え

『地球に隕石が落ちてその粉塵のせいで氷河期になり、植物が育たなくなり生態系が壊れた為。』

先生のコメント

正解です。有力説の一つですね。

土屋康太の答え

『発情期が来なくなった為』

先生のコメント

不正解です。土屋君らしい考え方ですね。

吉井明久の答え

『原因不明』

水谷玲奈の答え

「理由は分かっていない」

先生のコメント

吉井君はともかく、玲奈さんはどうしたんですか？

苦手だからといって投げやりはよくないですよ。残念ながら不正解に…

水谷恭介の答え

『「隕石衝突説」「水河期説」「飢餓説」など諸説あるが、どれもすべて「仮定」の領域に過ぎず実際に証明はされていないので正確には原因不明で理由は分かっていない。』

先生コメント

すいません、吉井君、水谷さん。先生が間違っていました。
三人とも正解です。

第六問

Side 恭介

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えない。

モブ「勝てるわけがない。」

モブ「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ。」

モブ「姫路さんがいたら何もいらない。」

モブ「立花さんがいれば設備なんてどうでも良い。」

モブ「水谷さん、ハアハア。」

三名を除き至る所から否定的な声上がる。

それもそうだ、文月学園のテストは制限時間内の問題数無制限。その為、学力次第では、どこまでも点数を取ることができ、成績が優秀な者と低いものとの差がはつきりと出る。その為、Aクラスの生徒の一人当たりの点数は大雑把に見てFクラスの生徒一人の3倍程もある。その戦力の差は歴然だ。

後、最後の三人はドサクサに紛れて何言ってやがる、話が終わったらO★HAN★A：うん、必要ないみたいだな。俺は何も見えないぞ、玲奈がドス黒いオーラを纏いながら笑ってるところなんてみて

ないぞ〜。

雄二「そんなことはない、必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる。」

それにも拘らず、雄二はそう宣言した。そんな雄二の発言に対しクラス内で否定的な意見が響き渡る。

雄二「根拠ならあるさ、このクラスには試召戦争で勝つ事のできる要素が揃っている。」

確かに俺、玲奈、立花、姫路、そしてこの四人には劣るが明久が戦力になるが、それでもAクラスには勝てないだろう。

雄二「それを今から証明してやる」

そう言い、不敵な笑みを浮かべる。

雄二「おい、康太。畳に顔をつけて姫路と立花のスカートを除いてないで前に来い」

康太「……！！（ブンブン）」

瑞樹「は、はわっ！！」

柊「ふ、ふえっ！！」

必死になって顔と手を左右に振る否定のポーズを取る土屋。…こい

つにもお仕置きが必…いや必要ないな、さつきより更に黒いオーラを纏った玲奈が土屋を笑顔で見ている。

雄二「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツツリーニ

康太「……!!」（ぶんぶん）」

土屋康太という名前はそこまで有名じゃない。しかし、ムツツリーニという名前は別だ。その名は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以て挙げられる。

モブ『ムツツリーにだと……?』

モブ『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……?』

モブ『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』

モブ『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ…』

畳の跡を手で押さえている姿が果てしなく哀れだ。たとえどういった状況であろうとも、自分の下心は隠し続ける。異名はある意味伊達じゃないな。

しかし本当に凄いのは校内に張り巡らせている情報網の広さだ。以前俺が西村さんから依頼を受け、校内に仕掛けてある監視カメラや盗聴器を探し出す手伝いをしたことがあるが、結局見つけたのはすべてダミーだった。西村さんは諦めかけていたが、俺の知り合いの協力により犯人を特定、それが当時はノーマークだった土屋だ。その後土屋は学園長に呼び出され処分を受けることになるはずだった

が、処分はなにも受けなかったそうだ。土屋に聞いてみたところ学園長が取引を持ち出してきたそうだ。内容は学園のトイレ内と更衣室内以外のカメラと録音機材の設置を黙認するかわりにその映像と音声をこちらの防犯用に役立てたいとの事らしい。交渉は成立し土屋はお咎めなしで彼の経営するムツリ商会なるものが事実上学園側に黙認されることになった。実際、俺も何度か土屋の情報にお世話になっている。

雄二「姫路、水谷玲奈、立花のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

瑞樹「えっ？わ、私ですかっ？」

柊「ふえ！？わ、私！？」

玲奈「よろしくお願いします。」

雄二「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

確かに、戦局を展開する上でこの三人が中心となるだろう。

モブ『そうだ俺達には、この三人がいるんだった。』

モブ『彼女達なら、Aクラスに引けをとらない。』

モブ（変態）『ああ。彼女たちがいれば何もいらな―（玲奈）「まだ、お仕置きが足りませんか？」イ、イエス、ママ！！冗談が過ぎました。』

さっきから熱烈にラブコールしていた奴の一人が玲奈に威嚇される

…もうこの教室の人間は誰も玲奈に逆らえないな…。

雄二「木下秀吉だっている。」

秀吉は学力ではあまり名前は聞かないが、他の事で有名だ。去年は演劇部期待の新人と呼ばれていたたり、双子の姉の事だったり。俺は、秀吉程演技の才能が上手いやつは一人しかいないと思っている。…もう、そいつはいないけどな…

モブ『おお……！』

モブ『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

雄二「当然俺も全力を尽くす」

モブ『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

モブ『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

モブ『それじゃあ、振り分け試験の時は三人と同じく体調不良だったのか』

モブ『実力はAクラスレベルが四人もいるってことだよな！』

いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気はクラスの士気を確実に上げていた。

意外と代表が型にハマってるな雄二は。

雄二「それに、吉井明久、水谷恭介だっている。」

……シン――

そして一気に士気が下がった。

ちよっ!! 今ここで、俺達の名前言う必要があったか!?!? さては…
明久「ちよっと雄二! どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ! 全くそんな必要はないよね!」

恭介「お前、俺たちの名前をオチとして使ったな!?! (玲奈) 「…それ本当、サカモトくん」っおわあ!!」

俺のこの扱いに玲奈が大層ご立腹の様だ。

雄二「は、話は最後まで聞け!! 水谷妹!!」

雄二は誤解だと否定している。それを見て玲奈は落ち着いたようだが『もし、くだらない理由だったら…わかりますね??』とでも言うような視線を浴びせている。

モブ『誰だよ、吉井明久って』

モブ『聞いたことないぞ』

モブ『水谷玲奈の兄らしいが…頭良いのか??』

モブ『噂なんて聞いたことないぞ!!』

まあ、俺は去年は事実上目立たない様に学園生活(ただ、面倒で定

期テストの開始10分で解けるとこまで解いて寝てたんだが）を送ってたからな…

雄二「そうか。知らないなら教えてやる。まずは水谷恭介、こいつの通り名は《代理教師^{サブティーチャー}》だ！！」

モブ『何だと！！こいつがあのだ！！』

モブ『一部を除いた教師に絶大な信頼を誇るって噂の…』

モブ『あの、鉄人ですら一目を置く存在と言われる…』

恭介「えっ俺ってそんな風に呼ばれてたの！？初耳なんだけど！！」

まさか自分がそんな通り名で呼ばれているとは…ただちょっとした事があって明久と先生達から雑用をよく頼まれるだけだと思ったんだが…。

雄二「そして吉井明久、こいつの肩書は《観察処分者》だ」

明久を最後に回した理由はこれか、こいつ俺じゃあ玲奈に睨まれるからって明久をオチにしたな…

モブ『…それって、馬鹿の代名詞じゃなかったっけ？』

クラスの誰かがそんな事を言った。

明久「ち、違うよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

雄二「そうだ。バカの代名詞だ」

明久「肯定するな、バカ雄二！恭介もなんとか言ってよ！」

恭介「…スマン明久、流石に事実是否定できない。」

明久「恭介にも見放された！？」

違うぞ明久、お前をバカだとは言っていない。ただ、《観察処分者》がバカの代名詞って事を否定できないんだ。〈観察処分者〉学園生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分だからな：

瑞樹「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路は知らないらしく雄二に尋ねる。

雄二「具体的には教師の雑用係だな。力仕事などの類の雑用を、特例として物に触れられるようになった召喚獣でこなすといった具合だ」

雄二がそう解説する。召喚獣は本来は召喚獣以外の物に触れる事ができない。最も学園の床には特殊な処理が施されて、立つことはできらしい。

しかし、明久の召喚獣は、雄二の言うとおり、物に触れられる特別仕様のようだ。最も物理干涉能力のある召喚獣は召喚獣の負担の何割かは召喚獣の召喚者にフィードバックされるが。

モブ『おいおい。〈観察処分者〉ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいって事だろ？』

モブ『だよな、それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことだよな』

確かにそうだ、だが…

恭介「観察処分者は雑用をこなすから、繊細な召喚獣のコントロールができる。まだ、操作慣れしていない生徒の攻撃なんて当たらないだろう。それにその理屈だと俺も使い物にならないぜ？」

俺は雄二の話を聞いて忘れていたことを思い出す。

雄二「はあ、どうしてだ？ 恭介は観察処分者じゃないだろう？」

恭介「いやそれなんだが…」

俺は、頭を掻きながら『どう説明するか…』と悩んだがありのままの事実を伝えることにした。

恭介「俺の召喚獣は観察処分者とはほぼ同じ条件になってるんだ、原因は不明らしい技術者達曰く『バグ』だそうだ。ほぼ同じってのは痛覚以外の感覚が100%リンクしてるんだよ。だから俺は召喚獣が受ける痛み以外が100%フィードバックするんだ、もっとも痛みも何割かフィードバックするけどな」

そう、俺の召喚獣はバグで観察処分者とはほぼ同じ条件になっている。学園側が直そうとしたが原因不明で治らないらしい。

恭介「だが気にするな、俺も明久も足手まといにはならない。」

モブ『でも、いくら攻撃が当たらなくても上位クラスの奴らに囲ま

れたら…』

誰かがそんなことを言う、そういえばこいつらは俺と明久の成績を知らないのか…

恭介「お前らには悪いが、俺はAクラス並みの明久にはCクラス上位からBクラス平均くらいの成績が取れる。」

Fクラス全員『な、何いゝ!!』

雄二「お、おい明久どういうことだ!! 恭介はともかく、お前は去年そこまで成績が良くなかっただろう!？」

美波「そ、そうよ。吉井は調子が良くてもEクラス位しか無かったじゃない!？」

康太の「……………明久がそんなに成績がいい分けない!!」

俺の発言にFクラス全員が驚く、特に雄二、島田、土屋は予想外だったみたいだ。

明久「まあ普通疑うよね。実は去年の12月くらいから恭介と玲奈に勉強を教えて貰ってたんだ。」

そう、去年の12月いきなり明久が「お願い恭介、玲奈!! 僕に勉強を教えて」と頼みこんできた、勿論明久の頼みだ賛成するつもりだったが、一応理由を聞いたところ「…このままだと、僕の人生が社会的に終わっちゃうんだ…」と虚ろな目で呟いたので俺と玲奈でみっちり知識を叩きこんだ。あの時の勉強中の明久の気迫は尋常じゃなかった、本当に人生の危機だったのだろう。

雄二「はあ、あんなに勉強を嫌がっていたお前がか!？」

雄二があり得ないと事実を認めようとしなが。

明久「∴雄二、僕には拒否権というものが無いんだよ∴?」

雄二「∴明久なんか済まなかった∴」

明久が雄二の肩を叩いて顔を向けさせる。明久の顔は何かを悟ったような顔をし目は虚ろだった。

恭介「まあ、と言う訳で俺と明久は実質Aクラスにタメ張れるくらいに強い。」

雄二「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずDクラスを征服してみようと思う」

俺の言葉に続くように、雄二が宣言する。

雄二「皆、この待遇は大いに不満だろう?」

モブ共『『『当然だ!』『』』

雄二「ならば、総員武器をとれ!出陣の準備だ!」

モブ共『『『おおーっ!』『』』

雄二「俺らに必要なのは卓袱台ではない!俺らに必要なのは・・・」

モブ共 『 『 Aクラスのスステムデスクだ! 』 』

瑞樹・椀 「お、おー……」

こうしてFクラスの下剋上の火蓋が切って落とされた。

第六問（後書き）

どうも作者です。

あと少し、あと少しでDクラス戦に入れるぞー！！

今回は伏線多目に入れました！！……全部回収できるかな（汗

そして自分の予想以上に玲奈が黒くなってきた（あれ??

最初は、物静かで少々ブラコン気味で怒ると怖い程度にするつもりが…第五問、第六問を見ると「これって、ヤンデレじゃない（汗」

気にしていても仕方がないこれからがんばるぞー！！

感想、批判、誤字、脱字、指摘等 絶賛受付中です！！

これからよろしく願います。

第七問（前書き）

問題（古文）

「いまは昔、竹取の翁といふ者ありけり。」の冒頭から始まる物語の名称とヒロインの正式名称を答えなさい

姫路瑞樹・水谷玲奈の答え

物語『竹取物語』

ヒロイン『なよ竹のかぐや姫』

先生のコメント

正解です、簡単でしたね。

土屋康太の答え

物語『求婚物語』

ヒロイン『絶世の美女』

先生のコメント

不正解です。とても酷い答えですが、内容があっている事が腹立たしいです。

立花椋の答え

物語『かぐや姫』

ヒロイン『かぐや姫』

先生のコメント

不正解です。両方とも正式名称ではなく俗称です。

水谷恭介の答え

物語『ぐーやが五人の貴族と帝を誑かし、貴族の一人の娘に恨まれてザマアな物語』

ヒロイン『ぐーやもとい、蓬萊ニート』

先生のコメント

：不正解です。水谷君はかぐや姫に何か恨みでもあるのでしょうか？

水谷恭介コメント（欄外）

「金閣寺でどれだけ苦労したと…」

先生コメント

よくわかりませんが、ものすごく禍々しい何かを感じました。

第七問

Side 恭介

雄二「それじゃあ、明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

と雄二が明久にDクラスへの使者を任命した。大役ならば自分で行けばいいだろうに：

明久「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

雄二「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。だまされたと思って行ってみろ。」

明久「本当に？」

雄二「もちろんだー（恭介）「坂本雄二、ダウト。（藤○ボイス）「っち！」」

なにを根拠にいつてやがる。どうせ下位勢力からの使者はボコボコにされるから、明久を陥れようとしたんだろう。しかも俺のダウト宣言に舌打ちしやがった。

恭介「雄二、お前が宣戦布告すればいいだろ。流石にクラス代表には手を出さないだろうから。」

雄二「っち……わかった。俺が行く。（うまく明久を使って楽しよ

うとしたのに！」

明久「雄二！！貴様僕を騙そうとしたな！！」

恭介「いや明久、お前もお前で誰でも分かるような嘘に引っかかりそうになるなよ！？」

全く、雄二は雄二ですぐ明久を陥れようとするし、明久は明久で騙されやすいし…

雄二「じゃあ、行くから何人か付いて来てくれ。勿論、姫路、立花、水谷兄妹以外でな。」

成程、俺達四人は隠し玉かな、もしかしたらDクラス戦は出番ないかもしれないな。

そして、雄二が五人位を引き連れDクラスへと向かった。

・ ・ ・ ・ ・

雄二「戻ったぞ、今からミーティングを行うから明久、秀吉、ムツツリーニ、水谷兄妹、姫路、島田、立花、来てくれ。」

雄二が宣戦布告から戻ってきた。どうやらこれから主戦力達でのミ

ーティングを行うみたいだ。

恭介「それより、一緒に宣戦布告に行った奴らはどうした。」

戻ってきたのは雄二、一人だったので疑問に思い聞くと。

雄二「ああ、やっぱり代表が行っても下位クラスからの勢力だからな、Dクラス代表がいる前では何もなかったんだが、教室を出た後に四〜五人いて襲いかかってきたから全員、盾にした。」

恭介「盾にとって…お前な…」

自らのクラスメートをさも当然の様に犠牲にして、悪びれる様子もない。まあ、この位の性格じゃないとクラス代表は務まらないか。

ミーティングに行くために、雄二の後に、姫路、玲奈、立花、秀吉と続いて教室を出る。

康太「……………（スサスサ）」

まだ畳の後を気にしているのか、頬をさすりながら土屋も続く。

恭介「土屋、畳の跡ならもうないぞ。」

明久「そうだよムツツリーニ。覗きの跡なら消えてるよ?」

康太「……………!!（ブンブン）」

明久「いや、今更否定されても、ムツツリーニがHなのは知ってるから。」

恭介「ああ、本当に今更だな。」

ムツツリーニ「……………!!（ブンブン）」

明久「ここまでバレてるのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思う。」

恭介「一種の才能（笑）だな。」

ムツツリーニ「……………!!（ブンブン）」

恭介・明久「——何色だった?」

ムツツリーニ「両方、みずいろ。」

即答か、しかも何の色についてかは聞いてないのに。

明久「やっぱりムツツリーニは色々な意味で凄いよ。」

恭介「ある意味、勇者（爆笑）だな。」

ムツツリーニ「……………!!（ブンブン）」

そやって、土屋をのんびりイジッていると、

美波「ほら吉井、水谷。アンタ達も来るの。」

島田が明久の腕を引っ張りながら、俺達を急かす。やっぱりこいつも明久の事が好きなんだな…意外とモテるよな、明久。

恭介「了解。」

明久「あー、はいはい。」

美波「吉井！返事は一回！」

明久「へーい。」

美波「……一度、D a s B r e c h e n——ええと、日本語だと……」

島田が言いよどむ。

D a s B r e c h e n ってなんだ？ドイツ語か？

康太「……………調教」

近くから土屋の声が聞こえる。それに調教って…

美波「そう。調教の必要がありそうね。」

恭介「いや調教って、馬じゃないんだから…」

明久「そうだよ、せめて教育とか指導って言ってくれない？」

美波「じゃ、中間をとってZ u c h t i g u n g——」

康太「……………それはわからない。」

美波「確か、日本語だと折檻だったかな？」

明久「それ悪化してるよね」

美波「そう？」

恭介「ああ、一気に暴力のレベルが加速したな。」

そして、明久のストレスがマッハだな。どうして島田は余計な日本語ばかり覚えるんだろう？照れ隠しなんだろうけど、その手のアピールじゃ明久は振り向かないぞ？むしろ好感度が急落下する。

明久「というかムツツリーニ。どうして『調教』なんてドイツ語を知ってるの？」

恭介「ああ、俺もビックリしたぞ土屋。」

康太「……………一般教養」

なんつう一般教養だ。まあ俺のじいちゃんの教訓も酷いけどな…去年のお盆に会いに行った時は近所の悪ガキ集団に「いいかお前ら、この世の常識に囚われたらいけないんだ！！常識は投げ捨てるものだ！！」って熱弁してたからな。あれで武術の達人だからな。でもあの後、近所のおばさんに通報されてたっけ…うん忘れよう俺にはそんなじいちゃんはいない、いるのは優しいばあちゃんだけだ。

明久「相変わらずムツツリーニは性に関する知識**エロ**知識**エロ**だけずば抜けてるね。」

恭介「お前の知識は神の領域だよ。」

神「……………！！（ブンブン）」

そんな会話をしながら校内を歩いていると、先頭の雄二が屋上に通じる扉を開けて太陽の下にでた。

どうやら屋上でミーティングをするらしい。

恭介「それで雄二、戦争は何時からだ？」

全員がそろった事を確認して俺は雄二に聞いた。

雄二「今日の午後からだ。」

美波「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

雄二「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物食べろよ？」

恭介「そうだな最低限、炭水化物とタンパク質は取れよ。」

明久「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど。」

瑞樹「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

姫路が驚いてたように明久を見る。きっと規則正しい姫路には理解できないのだろう。

明久「いや。一応食べてるよ」

雄二「……………あれは食べていると言えるのか？」

恭介「……あれが食事に入るわけないだろ…」

玲奈「兄さんの言う通りですね。あれは断食に近いです。」

椀「ええ!! そんなに酷いの玲奈ちゃん!？」

と明久の食事の現状を知っている俺たちは口をそろえて言い、玲奈の言った事に立花は驚いた。俺も同じ意見だぜ、玲奈。

明久「三人とも、何が言いたいのさ。」

雄二・玲奈・恭介「「いや（いえ）、お前の主食って（明久君の主食は）——水と塩だろう?（でしょう?）」」「」

俺と玲奈は呆れながら、雄二は哀れむような声で言い放った。

明久「失礼な、きちんと砂糖だって食べているさ!」

瑞樹「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……」

秀吉「舐める、が表現としては正解じゃろうな。」

椀「明久君。それじゃ、体調崩しちゃうよ?」

皆、明久を優しい目で見ている。だが本人はそれがとても居心地が悪いようだ。

雄二「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな。」

恭介「そうだな、面白そうなゲームを見つけると後先考えずに買うお前が悪い。」

明久「し、仕送りが少ないんだよ!」

玲奈「明久君、月いくら貰ってますか?」

明久「家賃を除いて十万円」

椀「それって十分暮らしていける額だよね?」

立花の言う通りだ、生活費を除いても三〇四万は残るだろう普通…

瑞樹「…あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか?」

明久「あ?」

姫路が明久に弁当を作ってくると言い出した。おお、積極的なアピールだな。そして明久、パニックになって発音がおかしくなってるぞ?

明久「本当にいいの? ぼく、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ!」

瑞樹「はい。明日のお昼からで良ければ。」

雄二「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ?」

明久「うん!」

雄二のからかいの言葉にも素直に喜ぶなんてよっぽど嬉しいんだな
明久は…

美波「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作って
くるなんて。」

玲奈「島田さん。そんな言い方はないんじゃないですか。」

椀「そうだよ美波ちゃん。その言い方はひどいよ。」

美波「ううっ！！だ、だってー！！」

島田の棘のある言い方に玲奈と立花が眉を顰める。まあ島田にした
ら面白くないよな、
好きな相手が他の異性に弁当を作って貰うなんて。

瑞樹「あ、いえ！その、皆さんにも……」

雄二「俺達にも？いいのか？」

瑞樹「はい。嫌じゃなかったら。」

どうやら全員に作るようになったな。明久は自分だけじゃなくなっ
て残念がってるがな。

秀吉「それは楽しみじやのう。」

康太「……………（コクコク）」

恭介「よろしく頼む。」

美波「……お手並み拝見ね」

だがこれだと姫路一人が九人分も作らなくてはいけない、流石に無理があるだろう…

玲奈「瑞希ちゃん、一人で九人分は大変ですから私も手伝いますね。」

椀「瑞希ちゃん、私も手伝うよ」

瑞樹「あ、ありがとうございます。玲奈ちゃん、椀ちゃん。」

どうやら、玲奈と立花が手伝うようだ。玲奈は料理が上手いから楽しみだ、立花は料理上手いのか??

玲奈「椀ちゃん、おかずは私と瑞希ちゃんで作りますのでデザートお願いできますか? (兄さんは、ああ見えて甘党ですからアピールするチャンスです。)」

椀「わかったよ、玲奈ちゃん!! (ありがとうございます!)」

玲奈と姫路がおかず、立花がデザートを作ることになった。玲奈が何か立花に行ってたが…いったいなんだ??

瑞樹「では皆さん。期待していて下さいね。」

玲奈「楽しみにしててくださいね。」

柊「頑張るよ」

明久「姫路さんって優しいね。」

瑞樹「そ、そんな：／／／／」

秀吉「うむ、玲奈も優しいのう。」

玲奈「えっ、いえ、そんなこと：／／／／」

恭介「ああ、立花も優しいな。」

柊「ふ、ふえ！！：／／／／」

明久「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き――
――」

おっ勢いに乗って告白か、明久やるじゃないか。秀吉も言おうか言うまいか、悩んでるな。

雄二「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ。」

明久「――にしたいと思ってました。」

恭介「……お前最低のKYだな雄二。」

こいつ明久の告白を邪魔しやがった！！

秀吉「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃ

ぞ。」

雄二「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になることがあるな。」

明久「だって……お弁当が……」

恭介「だからって、その切り返しはないだろう……」

弁当のために自分をそこまで貶めるか？ほら、女子四人は若干引いてるぞ。姫路は何か小声で言ってるし、島田は小さくガッツポーズして何か言ってるが……

瑞樹「（ボソツ）よ、吉井君が望むなら……」

美波「（ボソツ）よかった、もし吉井が、あのまま告白してたら……」

うん、何も聞かなかった事にしよう。特に姫路の方は……な？

恭介「それよりも、立花は俺達を基本名前で呼ぶよな。」

雄二「そういえばそうだな。」

とりあえず話題を変えて、明久を助けようと自分が疑問に思ってたことを聞く。

椀「ふえっ!!へ、変ですか!？」

立花はいきなり自分に話を振られて少しパニックになっている。

恭介「変ではないが、珍しくてな。」

秀吉「そうじゃのう、同性どうしならともかく異性に対しても誰でも名前で呼ぶのは珍しいのう。」

立花は基本、男子には名前に君付け、女子には名前にちゃん付けで呼んでいる。

椀「え、えっと…私のただのこだわりなんです…苗字より名前で呼んだり、呼ばれたりする方が好きなんで…名前は自分だけのもの、名字は家族のものだから。」

…珍しい考え方だな、それにしても意外だ、立花にこんなこだわりがあるなんて。

椀「だから、できれば私の事も名前で呼んでほしいです。勿論、嫌なら無理に名前で呼ばなくていいです。」

雄二「じゃあ、名前で呼ばせてもらおう、椀。」

秀吉「そうじゃのう。わしも椀と呼ぼう。」

康太「……………俺も椀と呼ぶ。」

明久「僕も名前で呼ぶよ。椀さん。」

恭介「じゃあ、俺も椀と呼ぶか。」

椀「あ、ありがとうございます／＼／＼（やった！！恭介君に名前で呼ばれた／＼／＼）」

柊は顔を赤くしながらも喜んでいた。流石に男子に名前と呼ばれる
と恥ずかしいのかな？

雄二「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう。」

ここで俺たちはやっとミーティングを始めた。

第七問（後書き）

どうも作者です。

次回からDクラス戦突入：のはずでしたが「あれ、まだ半分しか書いてないのにもう、4千字を超えてるぞ!？」

私は基本4千字を目安に投稿しているんで今回は泣く泣く諦めました。

だから次に進めないorz

今回のバカテストは恭介の部分を書きたいが為に急遽考えたネタです。

なので微妙に間違いがあるかもしれません。

あと、東○の輝○好きの人ごめんなさい。私は、彼女には永夜、文花含めていい思い出がないんです。

では今回はこの辺で。

感想、批判、誤字、脱字、指摘等、絶賛受付中です。

これから応援よろしくお願いします。

第八問（前書き）

今回は第七問のあまりみたいな感じなので、短めです。

ではどうぞ。

第八問

Side 恭介

秀吉「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？ 段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

姫路「そういえば、確かにそうですね。」

雄二「まあな。当然考えがあつてのことだ。」

雄二が鷹揚にうなづく。

恭介「どんな考えだ？」

雄二「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな。」

明久「え？ でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

明久の言うとおり成績でクラス分けされているので、普通ならFクラスよりEクラスの方が強い。だが：

恭介「まあ確かに、Eクラスには悪いがハッキリ言って負けるわけがないな。」

玲奈「そうですね、確かに負ける確率の方が断然低いです。」

雄二「流石は水谷兄妹だな。明久、オマエの周りにいる面子をよく見てみる。」

明久「えーっと……」

明久が雄二に言われたとおりにこの場にいるメンバーを見直す。

明久「美少女が四人、秀才が一人、馬鹿が二人とムツツリが一人……なるほど!!」

雄二「誰が美少女だと!?!」

明久「ええっ!?!雄二が美少女に反応するの!?!」

康太「……………(ポツ)」

明久「ムツツリーニまで!?!どうしよう恭介、僕だけじゃツツコミ切れない!」

恭介「落ち着け明久、どうせからかってるだけだろう。」

秀吉「まあまあ、落ち着のじゃ、代表にムツツリーニ。」

雄二「そ、そうだな。」

明久「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツツコミ入りたいんだけど。」

恭介「って、ガチ反応かよ!?!」

エエ、雄二エエ。

雄二「ま、要するにだ。」

コホン、と咳払いをして雄二が説明を再開する。無視かよ!?

雄二「姫路、椛、水谷兄妹に問題がない今、正面からやりあってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いって事だ。」

明久「?それならDクラスとは正面からぶつかるど厳しいの?勝てるような気がするけど。」

確かに、これだけの戦力があればDクラスにも普通に勝てるだろう。だが:

恭介「お前も含めて俺たち主力陣は途中退室で0点扱いだ、流石にDクラス以上の実力となると、俺達が補給試験を受けるだけの時間稼ぎが出来ない、仮に何教科か絞って回復させたところで補充しない教科を選択されたら戦死扱いになる。」

雄二「ああ、ほとんど恭介の言うとおりだ。それにDクラス戦はできれば、姫路と明久以外の三人を使いたくはない。」

椛「えっ、私は戦わなくていいんですか、雄二君!?

瑞希「どうしてですか?」

玲奈「他のクラス:特にA、B、Cクラスに対して私達《高得点者》の情報をできるだけ与えないためですかね。」

雄二「水谷妹の（玲奈）「玲奈でいいですよ。呼びずらいでしょうし。」玲奈の言うとおりだ。できれば上位クラスは油断させておいて、一気に戦局をこっちに傾けたいからな。」

恭介「なら明久、お前はDクラス戦の時は全科目をE上位くらいの点数にして戦え。」

明久「えっ、なんで？」

雄二「確かに、その方が早めに戦線に出れるだろうが…」

二人は疑問の声を上げるがこの方がいろんな意味で楽になる。

恭介「理由は二つだ、一つは点数がある程度しかなくても操作技術でカバーできるという《観察処分者》の利点だ、Dクラス相手ならEクラス上位くらいの点数をとっておけば、まず負けることはないし相手は操作技術が素人に毛が生えた様なものだ、雑用をこなして操作技術の高い明久に攻撃が当たるわけない」

もっと四〜五人に囲まれれば流石にキツイが。

雄二「なるほど…」

明久「でもそれなら、僕だけじゃなくて、恭介も点数を低くして出ればもっと楽になるよ？」

恭介「いや、俺はダメだ。生徒は騙されるかもしれないが、教師は俺がAクラスくらいの点数が取れることを知っている、去年は上位一桁には入らなかったが総合2500点以上は取ってたからな。そ

れに、雄二が言っていた通り名の事を考えると認知度は低いが高得点者と知っている生徒もいるみたいだし。」

そう、雄二が言っていた通り名の事がなければ、俺もEクラス程度の点数で参戦しただろう。

恭介「二つ目の理由は明久には悪いが、『観察処分者』の評判を使う。」

雄二「『観察処分者』の…ああ、そういうことか!!」

明久「どういうこと??」

おっと雄二はわかったようだな。

雄二「明久、『観察処分者』は何の代名詞はなんだ?」

明久「むう、そんなのバカの代名詞…なるほど!!」

雄二の問いに一瞬、嫌な顔をした明久だったが俺の考えが読めたようだ。

恭介「そうだ、そのバカの代名詞ってのがポイントなんだ。」

瑞希「えっと、それが何か関係あるんですか??」

椛「私もちょっとわからないかな?」

…まさか、姫路と椛がわからないとは思わなかった。そうか、二人とも純粹なんだな。

玲奈「瑞希ちゃん、椛ちゃん、兄さんは明久君を上位クラス代表への奇襲に使うつもりなんです。C、Bクラスくらいの成績とDクラス戦でわかってしまえば上位クラス代表への奇襲で代表の前に親衛隊に相手をされてしまいますが、相手が明久君をバカの代名詞である《觀察処分》で『良くてEクラス程度』と認めていれば召喚獣操作の練習として相手をするでしょう。しかし明久君はBクラス平均くらいの点数が取れます、相手は焦り更に《觀察処分》の利点である高い操作技術でいとも簡単に相手を倒せるでしょう。たとえばBクラスの代表レベル：いえ、Aクラス平均レベルまでは通用すると思います。」

と、玲奈は俺の考えを一字一句間違えずに姫路と椛に説明した。流石は玲奈だな、俺の考えなんてお見通しか。

恭介「その通り、だから後は雄二の策略次第だぜ。」

雄二「任せろ。今ので完全にAクラス勝利までのプロセスが決まった。」

俺が雄二にお前次第と問うが雄二はニヤリと笑って答えた。

玲奈「期待してますよ、雄二君。」

雄二「もちろんだ、お前らも俺に協力しろよ?」

根拠のない自信、だが絶対にAクラスに勝てると思わせるだけの力が雄二の言葉にはあった。

明久「うん、なんか勝てるような気がしてきた!!」

美波「いいわね。面白そうじゃない！」

秀吉「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの。」

康太「……………（グッ）」

瑞希「が、がんばりますっ」

椛「わ、私も頑張るよー！！」

雄二「ああいいか、お前ら。俺たちのクラスは——最強だ。」

こうして打倒Aクラスに向けて俺たちの気持ちは一つになった。

恭介「じゃあ、Dクラス戦の作戦の説明を頼むぜ。雄二。」

雄二「わかった。それじゃ、説明しよう。」

俺たちは、勝利の為の作戦に耳を傾けた。

第八問（後書き）

どうも作者です。

今日、自分の作品を読み直してみたら：「誰が、どのセリフを言ってるのかわかりづらい：o r z」と思いセリフの前に名前を入れることにしました。

やっと、次からDクラス戦です！！

といってもDクラス戦は短めになる予定です：うん、きっと、多分：

考えていても仕方がない！これから頑張るぞ〜！

感想、誤字、脱字、間違い指摘、批判等、絶賛受付中です。

これからよろしくお願いします。

第?問(前書き)

問題(数学)

以下の問いに答えなさい

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X \parallel 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、? ? ?
の中から選りなさい

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$? $\sin A \cos B$
? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希・立花栞の答えの答え

(1) $X \parallel \pi / 6$

(2) ?

教師のコメント

そうですね。角度を『 $^{\circ}$ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です。

水谷玲奈・吉井明久の答え

(1) $X \parallel 3.14159265358979 \dots / 6$

(2) ?

教師のコメント

正解ですが、わざわざ π を円周率に直さなくても……。

土屋康太の答え

(1) $X \parallel$ およそ 3

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

須川亮の答え

(2) およそ？

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

水谷恭介の答え

(1) $X \parallel$ およそ $\pi/6$

(2) 多分？だったはず

教師コメント

絶対にふざけてますよね。

第?問

Side 恭介

雄二「どうやら、秀吉達がDクラス連中と渡り廊下で交戦状態に入
ったみたいだな。」

恭介「ああ、うまく時間を稼げればいいんだが…」

Dクラス戦が始まり、秀吉が率いる先攻部隊が交戦状態に入った。
そのため教室内には代表の雄二と親衛部隊、振り分け試験が0点扱
いの俺、明久、玲奈、栞、姫路が補給試験を受けていた。

明久「よし!! 終わったよ、雄二。」

雄二「おい!! まだ補給試験初めて一時間だぞ!! 本当に大丈夫な
のか!?!」

明久「ほら、このぐらい点数があれば余裕でしょ。」

雄二「…総合1252点って、本当にお前勉強出来るようになった
んだな…」

恭介「まだ信じてなかったのかよ…」

雄二はいまだ明久の成績が上がったことを信じてなかったのか、開
始一時間くらいでEクラスレベルの成績を取った事に驚いている。

明久「じゃあ僕は中堅部隊に入って先攻部隊の掩護でいいのかな。」

雄二「いや、もうすぐ先攻部隊がきつくなってくるころだ。戦死してない先攻部隊を補給試験に向かわせろ。」

明久「わかった!!」

明久が中堅部隊に指示を出すために戦線に加わった。開始一時間もたてば、Fクラスの先攻部隊はボロボロだろう。むしろ、Dクラス相手に一時間も健闘した先攻部隊は頑張った方だ。今回俺は戦線には出ないのでずっと教室で補給試験をしている。R、W、現国、古典、現社、世界史、日本史を終わらせ、今は数学を受けているところだ。

雄二「R 125点、W 131点、現国 285点、古典220点、現社 310点、世界史 326点、日本史 335点…お前語学系が苦手だろ…」

俺の試験の結果を見て雄二が聞いてくる。

恭介「まあな、それに今回は世界史がキリスト教のところ、日本史は日本神話のところが中心だったから点数が良いだけだ。それに俺の得意科目は理系だ。」

本来、世界史と日本史は平均270〜280点くらいしか取れない。

雄二「なんで日本神話とキリスト教に詳しいんだ?」

恭介「ゲームと小説と漫画とアニメ。」

雄二「…お前が明久と仲がいい理由がよくわかった。」

俺の答えに雄二が何か納得したように呟く。何だよ、俺が漫画やアニメを見るのがそんなに意外か？

そんな事より俺は…

『さあ来い、この負け犬が!!』

『いつ、嫌だ！ 鬼の補修は嫌だあああ!!』

『安心しろ。「趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎」と言う、立派な模範生になるようにみっちり教育してやる!!』

『たっ助けて!! 誰か……助けてえええええ!!』

西村さんの発言に何かおかしいことがあったような気がする…西村さん、それは「教育」ではなく「洗脳」だ。しかしこうなると明久が逃げ出しかねないな…

恭介「雄二、明久に伝令を頼む。」

雄二「なんだ、何を言うんだ？」

恭介「いや、この紙を届けてくれるだけでいい。」

雄二「わかった。」

雄二が補給試験を受け終えた先攻部隊の一人にその紙を渡した。しばらくして…

明久『総員退避だ。』

美波『そうね、ウチらは精一杯努力したわ。』

明久『うん、僕らには荷が重すぎた…えっなに、横溝君？ 恭介からの伝令？ なになに……そ、総員突撃！！』

よし、効果は拔群のようだ！！

雄二「……………恭介、何をした？」

恭介「なに、ただ少し喝を入れてやっただけさ。」

ただ明久に「ここで逃げたら、姫路に嫌われるぞ？」って書いた紙を渡しただけだ。

そしてまた少し時間がたち今度は…

須川「代表、吉井が偽情報を流してほしいようです。」

雄二「どうしてだ？」

須川「どうやら相手が一気にケリを付けるために、数学の船越先生を呼んできたようです。」

雄二「…わかった。なら『ごによごによごによ…』と流せ！！」

須川「わかりました。」

恭介「ということは、こっちが押しているのか？」

雄二「そうみたいだが、人数的にはこっちの方が不利だ一気に攻められたらお終いだな。」

どうやら押しているらしいが、戦死者をかなりの量出したらしい。

恭介「んで、どんな偽情報を流すんだ。」

雄二「まあ聞いてろ、《ピンポンパンポーン》ほら。」

と何故か放送が始まった。

《船越先生、船越先生》

どうやら、須川が放送室をつかって嘘情報を流すようだ。後で西村さんに怒られても知らないぞ。

《吉井明久君が体育館裏で待っています。》

……っえ!?

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。》

恭介「雄二これはマジで洒落にならないぞ!？」

船越女史は婚期を逃し焦りに焦ってついには、単位を盾に生徒に交際を迫るようなこの学園で一、二を争う危険な先生だ!!

雄二「これもFクラス勝利の為だ、仕方がない。…明久は犠牲となったのだ。」

Dモブ『おい、聞いたか今の放送。』

Dモブ『ああ。Fクラスの連中本気で勝ちに来てるぞ。』

Dモブ『あんなに確固たる意志を持っている奴らに勝てるのか……？』

今の放送にDクラスの奴らが動揺し始めたようだ。

Fモブ『皆、吉井隊長の死を無駄にするな！』

Fモブ『絶対に勝つぞーっ！』

Fモブ『隊長、いけますよ！この勢いで押し切りましょう！』

そしてFクラスの奴らの士気がうなぎ上りだ。その前にまだ、明久は死んでないぞ。まだな…そして今の明久は…

明久『須川あああああああっ！』

怒りの雄叫びを上げていた。

悪い明久。今回俺は教室待機だから、助けることが出来ないんだ。頑張れ明久、超頑張れ。

その後もこう着状態が続いているようで今は若干こちらが不利のようだ。

恭介（やっぱり俺もEクラスレベルに成績を落として加わるかな…）

と戦線に加わるかどうか迷っていると。

ガシャアアン！

破裂音と共に窓が碎ける。

モブ『な、なんだ！？なにごとだ！？』

どうやら、誰かが窓ガラスを割ったようだ。いったい何のために：

明久『うわっ！島田さん！そんな物をどうする気だよ！』

……どう考えても明久の芝居だな、後で島田にボコられても助けないぞ。どう考えてもお前が悪い。

ブシャアアッ！

こんどはスプレーが撒かれるような音がするもしや：

モブ『う、うわっ！なんだ！？』

モブ『ぺっぺっ！こりゃ消火器の粉じゃねえか！』

モブ『前が見えない！』

明久『島田さん、キミはなんてことを！』

うわぁ…これはもう俺、知らないぞ！

モブ『Fクラスの島田め！なんて卑怯な奴なんだ！』

モブ『許せねえ！彼女にしたくない女子ランキングに載せてやるからな！』

モブ『そうだ！在学中には彼氏の出来ない状況にしてやる！』

モブ（変態）『……でも、男らしくてステキ……。お姉さま……』

……やり過ぎだ、明久。島田には明久お仕置きの許可をやるか……今回は死なない程度にお仕置きをしてもらおう。そして最後の変態女は俺が始末スル。

だが今の明久の行動で戦局はFクラスに完全に傾いたようだ。まあ……骨ぐらいは拾ってやるよ、明久……

その後、明久が化学の試験を受けに戻ってきた。

雄二「明久、よくやった。」

明久「校内放送、聞こえてた？」

雄二「ああ。バッチリな。」

……包丁と即席のブラックジャックを持って目を血走らせながら。

明久「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

恭介「落ち着け明久。放送を流したのは須川だが、指示を出したのは……」

雄二「指示を出したのは俺だ。」

明久「シャアアアッ!!」

その瞬間、明久が雄二の肝臓めがけて包丁を頭上にブラックジャックを振り下ろす。

恭介「少しは——」

ボスッ

明久「ぐっ!!」

恭介「落ち着け!!」

トンッ

明久「うっ…」

それと同時に俺は明久の鳩尾に拳を入れ、動きが一瞬止まった隙に首に手刀を入れ気絶させる。……つたく、ここで雄二を殺したら試召戦争どころじゃなくなるだろうに。

雄二「流石は、元《鬼刃^{きじん}》だな。」

恭介「……そんな廚二な名前で呼ぶな、元《悪鬼羅刹^{あくぎらせつ}》」

雄二「悪かったよ、そう怒るな。」

恭介「まったく：後で明久に謝れよ？」

本当にこいつは面倒ばかり起こすよ……西村さんが俺に「良い胃薬はないか？」と聞いてくるのも頷ける。

雄二「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるか。」

秀吉「そうじゃな。ちらほらと下校している生徒の姿も見え始めたし、頃合いじやろう。」

康太「……………（コクコク）」

雄二「よし、Dクラス代表の首を取りに行くぞ！」

F全員『おうっ！』

Fクラスの全員（俺、明久、玲奈、椀を除く）が教室から出ていくのを見計らい、明久を起こす。

恭介「おい、明久起きろ」

パンッパンッパンッ！！

明久「……ハッ！！雄二はどこだ！！」

恭介「だから落ち着けと何回言えばわかるっ！！」

ボスッ！！

明久「グフッ……き、恭介！！なんで邪魔するんだ！！」

いまだに落ち着かない明久をもう一発殴る。何故ってそりゃあ：

恭介「お前なあ…まだDクラス戦が終わってないし、仲間割れなんかしてたらAクラスに勝てなくなるだろうが。」

それに親友を殺人犯にするわけにもいかない。えっ？雄二は死んでもいいのかって？前も言っただろう。雄二は投げ捨てる（みごろし）にするものだ…

明久「でも、このままじゃ僕は船越先生に…」

恭介「大丈夫だ。迫られてもこの住所を渡せば。」

そういつて俺は近所のお兄さん（30歳♂ 趣味、ギャルゲ タイプ、年上教師 見た目、無駄にイケメン）の住所を教えた。

明久「…！！ありがとう恭介。君は本当の親友だよ。」

明久はそう言い戦線に加わるべく教室を出て行ったのと同時に。

モブ『Dクラス塚本、打ち取ったり！』

どうやら相手の攻撃の要を打ち取ったようだ。

恭介「あゝあ、やっぱり出番無しか…」

椀「仕方ないよ、私たちは隠し玉な訳だし…」

玲奈「そうです。我慢してください兄さん。」

恭介「わかってますよ。」

平賀『――ま、親衛隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど。』

そんな会話をしているとDクラス代表、平賀の声が聞こえてきた。
相手は明久か？

明久『それは無いけど。確かに今の僕には無理だろうね。だから――
――姫路さん、よろしくね。』

平賀『は？』

恭介「…決まったな。」

玲奈「…ですね。」

柊「そうだね。」

平賀の間抜けな声が聞こえた瞬間、俺たち三人は勝ちを確定した。

姫路『あ、あの……』

平賀『え？あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスはこの廊下は通らなかったと思うけど。』

姫路『いえ、そうじゃなくて……Fクラスの姫路瑞希です。えっと、
よろしく願います。』

平賀『あ、こちらこそ』

姫路『その……Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます。』

平賀『……はあ。どうも』

姫路『あの、えっと……さ、試獣^{サモン}召喚です。』

平賀『え？あ、あれ？』

姫路『ご、ごめんなさいっ。』

この瞬間、FクラスはDクラスに勝利した。

第？問（後書き）

どうも作者です。

と言うわけでDクラス戦終了です。

え、早すぎるし雑？

もともとDクラス戦はオリキャラ三人を出すつもりは無かったし、私の頭の中ではBクラス戦からが本番だし、フラグ回収始まるし…後、主人公が参加しない回だと書きずらくて仕方なかったんです。すいません。

それと、次回から投稿が不定期になります。

理由は最初の方の後書きに書いたように、私は受験生ですので勉強をしなければいけません。

え、ならこんなの書いてないで勉強しろ？

………あー、キコエナイキコエナイ

出来るだけ毎日投稿しようとは思いますが間が空くかもしれません。最低でも1週間に1度は投稿します！！

これからもよろしくお願いします。

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

オリキャラ設定（前書き）

どうも作者です。

今回はオリキャラの設定です。

そこまで詳しくは書けませんでした。 「こんな感じか」程度で見てください。

オリキャラ設定

水谷 恭介 みづたに きよすけ

誕生日 8月25日 身長 175cm 体重 60?

好きなもの 友達 椛（周囲には、ばれないように隠している）

家族 頑張ってる人 自由

嫌いなもの 卑怯な奴 友達（特に明久、玲奈、椛、秀吉）を傷つける奴、堅苦しい場所 束縛

趣味 ゲーム（特にSTG）、剣術、漫画、小説、アニメ

外見 f○t eの衛○を黒髪にした感じで釣り目。

服装 基本ブレザーを着ないで学園指定のセーターを着ている（原作ではセーターが出ていないが作者の趣味）ブレザーは嫌いらしい。

性格 めんどくさがり屋だが、お人好しで友達思い（特に玲奈、椛、明久、秀吉には優しい）勝負事になると、親譲りの負けず嫌いが発動し酷い時は周りが見えなくなるくらいに暴走する。よく怒るが本気で怒っていることは少ない、本気でキレると鉄人でも敵わない（らしい）

家族構成 父、母、玲奈（妹）の4人家族だが 両親は父の海外への転勤のため、現在玲奈と二人暮らし。父親の実家が武道の道場でそこで武道を習っていた。

得意科目、化学（500～600）数学 生物 or 物理（350～400）

苦手科目、英語（100点台前半）

その他（200～300）

召喚獣 恭介に黒い軽装鎧を着け小さくした感じ、武器は弓と双剣とナイフ（簡単に言うとなf○t eのアーチャーの黒鎧ver）

特殊技能…理由は解らないがシステムのバグで召喚獣との感覚が完全にリンクする（痛覚のフィードバックは観察処分者と同じ）その為自分の体の様に動かせるそのため《特別観察者》（研究者の間だけ）とされている物理干渉とフィードバックがある

腕輪 …「螺旋矢」100点消費で1発、螺旋状の矢を放ち着弾地点の半径1メートルを爆発させる

…「七円環」300点消費で七枚の盾を作り出す1枚につき100点分の攻撃を防げる

特殊腕輪…「無限の制剣」総合科目のフィールドで3000点以上の時使用可能、持ち点を1点だけ残しフィールド全体に固有結界を発動する

水谷 みずたに 玲奈 れいな

誕生日 8月25日 身長 157cm 体重（いい度胸ですね。）

好きなもの 友達 兄 家族 料理 秀吉（自覚なし） 動物（特に可愛い動物）

嫌いなもの 卑怯な人 人の夢をバカにする人 勉強が出来る奴が偉いと思ってる人

趣味 料理 小説 音楽鑑賞（ジャンルは問わない）

外見 長い黒髪を背中あたりに纏めた感じで少し幼さの残る顔立ち、サイズは82・53・83

性格 基本、常識人でしっかり者で誰に対しても基本敬語。誰にでも基本優しく男女から人気がある（勿論自覚なし）少々ブラコン気味。その為、恭介のことになると普段からは考えられない行動をとる。怒ると凄い色々と、怒っても敬語で話している内はまだ本気で怒っていない、本気で怒ると敬語じゃなくなる。

家族構成 父、母、恭介（兄）の4人家族だが 両親は父の海外への転勤のため、現在恭介と二人暮らし。 母親の実家が神社で巫女の手伝いを何度かしたことがある。

得意科目、現国（500～600） 古典（450～500） 英語（350～400）

苦手科目、生物 or 物理（200点台前半）

その他（平均300点）

召喚獣 玲奈を小さくした感じで、赤い軽鎧で西洋の剣（f○te

のセイバーの服装と剣※勿論エクスカリバーじゃない)

腕輪…「二閃」50点消費で相手を高速の刃で切り裂く。

たちばな
もみじ
立花 栞

誕生日 10月13日 身長159cm 体重(お、教えません！
！)

好きなもの 家族、友達、お菓子、可愛いもの、恭介、幸せ、子ども

嫌いなもの 卑怯な人、冷たい人、夢のない事を言う人、お化け(可愛ければ怖がらない)

趣味 お菓子作り 買い物 ボランテニア

外見 銀髪でショートボブの髪型で左右にリボンをつけている(銀髪な神北○毬) サイズは 86・57・85

性格 マイペースで天然、そのためトラブルに巻き込まれたり気合が空回りしてドジをやらかす事もしばしば。滅多な事では怒らない、怒っても諭すように優しく注意する。

家族構成、父、母の三人暮らし。実は恭介が住んでいるすぐ近くの家に住んでいる。

得意科目、英語(500〜600) 世界史or日本史(400〜

450) 現代文(300台前半)

苦手科目、数学(150〜200点)

その他(平均250点)

召喚獣 杖を小さくした感じに、黄色のドレスのような鎧に盾に剣
(モン○ンのレイ○シリーズ)

腕輪.. [斬撃] 50点消費して幅の広い斬撃を放つ。

第十問（前書き）

問題（物理）

以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい
『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希・水谷恭介の答え

『粒子』

教師のコメント
よく出来ました

水谷玲奈の答え

『熱』

教師のコメント
不正解です、水谷さんは物理、生物が苦手でしたね。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント
君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます

吉井明久の答え

『粒子と定義されているの』

教師のコメント

……正解です、まさか君からこの様な回答が得られるとは思いませんでした。

立花権の答え

『暖かくて綺麗で希望に溢れているの』

教師コメント

……立花さんは偶に的外れな答えを出しますね、不正解ですが先生はこの答を好ましく思います。

第十問

Side 明久

Dクラス代表 平賀源二 討死

F&Dクラス 『うおおーっ！』

その知らせを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

モブ 『凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！』

モブ 『これで畳や卓袱台ともおさらばだな！』

モブ 『ああ。アレはDクラスの連中のものになるからな。』

モブ 『坂本雄二サマサマだな！』

モブ 『やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！』

モブ 『坂本万歳！』

モブ 『姫路さん愛してます！』

代表である雄二をほめたたえる声がいたるところから聞こえてきた。最後に変なのが混ざってたけど……僕は知らないよ。最後の声を聴いた途端、Fクラスから黒いオーラが漂ってきたなんて…

さっきまで雄二がいた方を見ると、がっくりとうなだれてるDクラス
の生徒たちの奥でFクラスの皆に囲まれている姿があった。

雄二「あー、まあ。なんだ。そう手放しで褒められると、なんつか。」

頬をポリポリと掻きながら明後日の方を向いている雄二。照れてる
なんて意外だな。

モブ『坂本！握手してくれ！』

モブ『俺も！』

もう英雄扱い。この光景を見ているだけでどれだけあの教室に不満
を抱いていたかがわかる。そりゃ嫌だよね。豊の一部腐ってたし。

平賀「まさか姫路さんがFクラスにいるなんて……信じられん。」

背中から誰かの声が聞こえた。

振り向くとそこにはヨタヨタと歩み寄る平賀君の姿があった。

瑞希「あ、その、さっきはすいません……」

違う方向から姫路さんも駆け寄ってくる。

平賀「いや、謝ることない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が
悪いんだ。」

これも勝負。騙し討ちっぽかったけど、姫路さんが謝る必要は全く

ない。

平賀「ルールに則ってクラスは明け渡し（雄二）」「それについてだが平賀。」なんだ？」

平賀君がクラスの明け渡しについて何か言いかけたとき、雄二がそれを遮った。

雄二「少々話がある。スマンがFクラスまで来てくれ。」

平賀「どうしてだ？別に設備の入れ替えだけだろ。」

雄二「いや少し“交渉”がしたい。後、Fクラス内でこれから見たことは他言無用だ。」

平賀「よくわからないが俺たちは敗者だ。そちらの考えに従おう。」

そういつてFクラスの皆と平賀君はFクラスの教室に向かった。

S i d e 恭介

Fクラスの皆がDクラス代表の平賀を連れて教室に戻ってきた。

平賀「み、水谷さんに立花さん！！なんでこの二人がFクラスにいるんだ！？」

雄二「何故って、二人ともFクラスの生徒だからだ。」

恭介「……俺については驚かないのかよ。」

雄二の言っていた通り名で（俺も若干有名なのかな）と思っていたがどうやら認知度は低いようだ。

雄二「ついでに言うと、そこにいる恭介もAクラスレベルだ。」

平賀「……どうりでFクラスの奴らが妙に強気で攻めてくるわけだ。」

平賀は自分たちが無謀な戦いに挑んだかのような口調で呟いた。

平賀「で話ってなんだ？まさか設備意外にも何か要求するつもりか？」

雄二「いや、Dクラスの設備を奪うつもりは無い。」

明久「雄二、それはどういうこと？折角普通の設備が手に入ったのに。」

恭介「明久、俺達の目標はあくまでもAクラスだろう。」

玲奈「兄さんの言うとおりです。平賀君には悪いですがあくまでもDクラスは通過点に過ぎません。」

そう、俺達の目標はAクラスだ。Dクラスは試召戦争に慣れるために行った練習みたいなものだ。

明久「でもそれなら、なんで標的をAクラスにしないのさ。おかし

いじゃないか」

雄二「少しは自分で考えろ。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称を付けられるんだ。」

明久「なっ！ そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ。」

恭介「そうだぞ。明久は“中学生に”そんな呼ばれ方はされないぞ。」

玲奈「そうですよ、坂本君。明久君は小学生に『馬鹿なお兄ちゃん』って呼ばれてるんです。」

明久「……人違いです。」

雄二「まさか……本当に呼ばれているのか……？」

クラスの全員が何とも言えない視線で明久を見る。……スマン明久。まさか玲奈が雄二の冗談に悪ノリするとは思わなかった。

雄二「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない。」

平賀「それは俺達にはありがたいが……条件はなんだ？」

平賀は設備がそのままになる条件を聞く。

雄二「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるあれを動かなくしてもらいたい。それだけだ。」

雄二が指差したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機だ。

この室外機はDクラスの物じゃない。ちょっと貧しい普通の高校レベルの設備でしかないDクラスにエアコンなんてものはない。置いてあるのは、スペースの関係でここに間借りしている。

平賀「Bクラスの室外機か。」

雄二「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引ではないはずだろうか？」

悪い取引なはずがない。事故に見せかければ嚴重注意で済むだろうし、それだけでDクラスの設備とDクラス代表の尊厳が守れるのだから。

平賀「それはこっちとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

平賀の疑問も当然だろう目標はBクラスではなくAクラスだし、直接関係ないエアコンを壊すんだ。

雄二「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

平賀「……そうか。ではこちらはありがたくその提案を吞ませて貰おう。」

雄二「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていぞ。」

平賀「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願ってるよ。」

雄二「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思ってるだろ？」

平賀「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てっこない。ま、社交辞令だな。後、この三人の事は誰にも言わないから安心しろ」

俺、玲奈、椀の三人を見た後、じゃあ、と手を挙げてDクラス代表、平賀は去って行った。

雄二「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆつくりと休んでくれ！解散！」

雄二の号令で皆帰り支度を始める。

明久「雄二、恭介。僕らも帰ろうか。」

雄二「そうだな」

恭介「特に用事なんて無いしな。」

俺にとって明日は初陣だ。今日は帰ってさっさと寝よう昨日は3時間しか寝てないしハッキリ言って、今物凄く眠い。

瑞希「あ、あのっ、坂本君っ。」

雄二「ん？」

姫路が帰ろうとする坂本を呼び止めた。

雄二「お、姫路。どうした？」

瑞希「実は、坂本君に聞きたいことがあるんです。」

おっとりしたイメージとは裏腹に、胸に手を当てながら興奮気味に話す。そしてチラチラと明久を見ている。……どうやら何か明久の事で聞きたいらしいな。

恭介「じゃあ、俺は教室の外で待ってるぜ、雄二。」

雄二「おう、わかった。」

そう言い俺は教室の外に出た。明久はやはり内容が気になるみたいだ、聞こえない位置だが姫路と坂本の様子を眺めている。

玲奈「兄さん。少しいいですか？」

恭介「ん、玲奈。なんだ？」

教室を出ると同時に玲奈が話しかけてきた。

玲奈「一つ質問です。兄さんは、なぜAクラスへの試召戦争に賛成したんですか？」

恭介「？ そりゃ、明久に協力してくれって頼まれたからだよ。」

玲奈「…少し質問を変えます。なぜ、こんな早い時期に試召戦争をやることに賛成したんですか？ いつも兄さんなら、最初にクラ

スマートの成績を上げるための何らかの行動をとって、少しでも勝てる可能性を上げるはずです。今回のAクラス戦は私の考えが正しければ勝てる可能性は40〜50%です。」

そう今回のAクラスに向けた試召戦争の勝率は普通に戦えば勝てる可能性は1%も満たない。俺と玲奈が予想しているこれからの雄二のとする行動を推測して、それらが成功してもAクラスに勝てる確率は良くて五分五分だ。

恭介「……流石に俺も『あの』Fクラスの設備は嫌だからな、早めにおさらばしたいんだよ。」

ハッキリ言っただ。別に俺はFクラスの設備でも良いと思っている、畳とか結構好きだからな。だが立花があ設備で勉強しているのは納得いかない。あの後玲奈に聞いたが立花はもともと貧血を起ししやすい体質だ、それが考慮されないのはおかしい。だから立花のためにも何としても早めにAクラスの設備を手に入れたいんだ。

玲奈「……栞ちゃんのためですか？」

恭介「なんでそこで立花が出てくるんだよ？ ハッキリ言っただ明久が頼んでこなかったらAクラスに試召戦争なんて仕掛けなかったし、もし仕掛けるなら戦力的に考えても最高でもCクラスだ。」

……たまに玲奈がエスパーなんじゃないかと思うくらいに鋭い時があるな、昔もこっちが隠したいことをピンポイントで聞いてくることがあるからな。

玲奈「……そうですか、わかりました。」

雄二「恭介、終わったぞ。」

玲奈が納得したと同時に雄二と明久が教室から出てきた。……なぜ明久は少し落ち込んでるんだ？

恭介「じゃあ帰るか。玲奈も帰るぞ。」

玲奈「今日は樫ちゃん達と帰りますから、兄さんは坂本君たちと先に帰って下さい。」

恭介「了解。」

そういつて俺は明久と雄二の3人で学園を後にした。

Side 玲奈

玲奈「……樫ちゃんのためですか？」

恭介「なんでそこで立花が出てくるんだよ？ ハッキリ言って明久が頼んでこなかったらAクラスに試召戦争なんて仕掛けなかったし、もし仕掛けるなら戦力的に考えても最高でもCクラスだ。」

……嘘ですね。兄さんはポーカーフェイスなので考えを読みづらいですが嘘を付くときは決まって左耳を触ります。

玲奈「……そうですか、わかりました。」

雄二「恭介、終わったぞ。」

どうやら坂本君と姫路さんの話し合いは終わったようです。大方、明久君が試召戦争を始めようとした理由を聞いたんでしょう。

恭介「じゃあ帰るか。玲奈も帰るぞ。」

玲奈「今日は椛ちゃん達と帰りますから、兄さんは坂本君たちと先に帰って下さい。」

恭介「了解。」

そう言っただけで兄さんたちは先に帰っていききました。私は教室に残っている椛ちゃんと瑞希ちゃんのもとに向かいました。どうやらもう私達3人しかいないみたいです。

玲奈「瑞希ちゃん、坂本君はなんて言っていましたか？」

瑞希「はい、やっぱり吉井君は私のために試召戦争を始めたみたいです。」

椛「えっ!?!? これって雄二君が提案した事じゃないの!?!?」

玲奈「はい、明久君が坂本君に提案したことが始まりみたいです。」

好きな人のためならクラス…いえ、学年を巻き込んでしまうほどの行動を起こしてしまうのが明久君です。

椛「それって、脈ありって事だね…ということは瑞希ちゃんと明久君は両想い!?!?」

玲奈「そうだと思いますよ。」

瑞希「えっ／＼／＼／＼そ、そんなことないですよ。吉井君は誰にでも優しいですから、私なんかのこと…」

そういつて落ち込んでしまう瑞希ちゃん。まったく瑞希ちゃんは……
…なら……

玲奈「そんなことないですよ。明久君は絶対に瑞希ちゃんの事が好きです。」

瑞希「……どうして言い切れるんですか。」

玲奈「簡単です。兄さんが問い詰めて聞き出したからです。」

もういつそ、ばらしてしましましょう。ついでに……

玲奈「兄さんは樫ちゃんのために、この戦争に賛成したんですよ。」

「ふ、ふえ！？」

「なんで恭介君が私のために！？」」

玲奈「そんなの決まっています。兄さんは樫ちゃんのことを好きなんですよ。」

「え、ええ／＼／＼／
う、うそ／＼／」

瑞希「ということは、椋ちゃんと水谷君って両想いですよね!？」

ハッキリ言って瑞希ちゃんも樫ちゃんも奥手すぎます。兄さんと明

久君には悪いですが仕方ありません、ハッキリ言って両思いなのにお互い奥手でくっつかない男女を見るのが我慢できません。

…………あの時、もっと早く兄さんに言っておけば…………

瑞希「玲奈ちゃんどうしたんですか？」

玲奈「いえ、それよりも二人ともどうしますか。」

椛「どうするって言われても…」

瑞希「告白なんてする勇氣はありませんし…」

本当に二人とも奥手すぎて呆れてしまいます。

玲奈「ならラブレターを書くのはどうでしょう？」

椛「そ、それなら、がんばればなんとか…」

瑞希「わ、私も…でも渡せる自信はないです。」

玲奈「それなら私が二人の下駄箱に入れておきますから。」

そう言う二人とも書き始めましたが、途中で明久君が忘れた教科書を取りに来てしまったため、明日までに二人とも書いてくることになってしまいました。

…………全く、明久君はタイミングが悪すぎます。

第十問（後書き）

どうも作者です。

原作にあるラブレターのくだりはカットです。

理由は二つです

一つはこの第十問でDクラス戦を完全に終わらせるためです。

もう一つは昼食ネタを早く書きたいのと、いっこうに話が進まないからです。

え、3つじゃないかですか？ 最後のは、書いている途中に気が付いたんです。

今回も玲奈がやらかしました。

私の頭の中ではAクラス戦後のラブレター騒動で椋と恭介を、原作2巻の最後に明久と瑞樹を、ランドマーク編で玲奈と秀吉をくつつける予定です。

：美波はどうするか考え中です、できればアディアを下さい。

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからよろしく願います。

第十一問（前書き）

問題（化学）

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希・吉井明久・水谷玲奈・立花椋の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント
簡単でしたかね

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント
君は化学を舐めていませんか

近藤吉宗の答え

『B—E—N—Z—E—N』

教師のコメント
後で土屋君と一緒に職員室に来るように

水谷恭介の答え

『 C_6H_6 芳香化合物の基礎をなす無色の液体で、特有の香りを持ち揮発性で可燃性があり有毒である、さらに……融点 5.533 』

℃、沸点80.099℃、比重0.87865(20℃)』

教師のコメント

そこまで詳しく書かなくても…

すみませんが、後で土屋君たち二人を職員室まで連れて来て下さい。

第十一問

Side 恭介

明久「おはよー。恭介、玲奈」

翌朝、いつものように玲奈と学校に向かっていると明久が後ろからやってきた。

玲奈「おはようございます。」

恭介「よっ、明久。ちゃんと昨日勉強したのか？」

明久「…うん、ちゃんと勉強したよ。」

恭介「？ どうした、元気ないな。」

なぜか明久がいつもより元気がない。

明久「昨日、少し勉強し過ぎて寝不足なだけだよ。」

恭介「そうか？ ならいいんだが。」

玲奈「…………ハア。」

勉強のしすぎなんて考えられないが、当の明久が知られたくないみたいだから追及はしないでおく。んで、明久の反応を見て玲奈はため息をついてるんだ？

恭介「（玲奈、明久が元気ない理由知ってるのか？）」

玲奈「（……心当たりがありますが秘密です。）」

恭介「（……なんとなくわかったような気がする。）」

そういえば、昨日も姫路と雄二が話しているのを見て気を落としてたっけ、そして玲奈が心当たりがあるんなら姫路がらみだろう。…
…さっさと告白しちまえば良いのに。

明久と玲奈と話しているうちに学校に到着し、クラスに向かった。

明久「おはよー。」

明久が教室のドアを開ける。

相変わらずの畳と卓袱台。Dクラス設備と交換しておいてもよかったんじゃないか？ 俺と玲奈がいればある程度のBクラスの生徒は戦死させられると思うし。

雄二「おう、3人とも時間ぎりぎりだな。」

恭介「おう、雄二。偶にはゆっくり登校するのもいいもんだぜ。」

玲奈「……兄さんが今日も起きるのがギリギリだったから、家が出るのが遅くなってギリギリの時間なんですよ？」

恭介「……悪かったよ……」

そう、今日も俺が寝坊したために登校時間がギリギリになってしまった。くそう、ニートの癖にあんなにでかい天井を落としてくる『ぐーや』がいけないんだ。

雄二「それより明久。お前いいのか？」

明久「何が？」

雄二「昨日の後始末だ。」

明久の後始末……ああ、船越先生のことか！！ それならちゃんと俺の指示どおりにすれば…

明久「うん、船越先生のことなら恭介がなんとか——」

雄二「いや、そのことじゃなくて。」

え？ 他に何か明久が後始末しなくてはいけない問題が………あー、うん。あったね。

明久「一体何が言いたい——」

美波「吉井っ！」

明久「ごぶあっ！」

明久のセリフを遮るように、島田の拳が入った。うん、良いストレートだ！！

明久「し、島田さん、おはよう……」

美波「おはようじゃないわよっ！」

いつもなら止めに入るんだが今回は……

美波「アンタ、よくも昨日はウチを消火器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立て上げたわね……！」

全てにおいて明久が悪い。明久が忘れてたと顔を青くし、俺に助けてと視線を送ってくるが無視だ。

美波「おかげで彼女にしたくない女子ランキングが上がっちゃたじゃない！」

……そんな風に暴力を振らなければ、昨日の明久の嘘を誰も信じなかったような気もするんだが……

美波「——と、本来は掴みかかってるんだけど。」

お、少しは自分が暴力をふるい過ぎていたことに気づいたか？

美波「アンタにはもう十分罰が与えられているようだし、許してあげる。」

明久「うん。さっきから鼻血が止まらないんだ。」

罰？ 流石に意味がわからないんだが？

美波「いや。そうじゃなくてね、一時間目の数学のテスト…監督の

先生、船越先生だっ」

明久「それならもう対策を……って島田さんその紙もしかして……」

と明久が言いかけた時、島田が一枚の紙を持って不敵に笑った。

美波「ふうくん。それってこの紙のことかな？」

ビリッ！！

ダッ！！

島田が明久に俺があげた、独身のお兄さんの住所の紙を破った途端、明久がドアを開けてとび出して行った。

……明久、大丈夫だ。

恭介「土屋ちよっといういか？」

康太「……………どうした？」

恭介「式場と葬儀場の手配を頼む。」

お前のことを俺は忘れない。

・ ・

・ ・ ・ ・ ・

明久「うあー……づがれたー」

恭介「いろんな意味でお疲れ様だな。」

とりあえず午前中の回復テストは終了した。一時間目のテスト終了と共に船越先生に連れ去られた明久は二時間目のテスト開始一分前に戻ってきた……ゲッソリとやせ細っていたが、なぜたった10分の間にあれだけ痩せられるのだろう……。とりあえず明久の近所のお兄さん（三十九歳／独身……お兄さん？）を紹介して事なきを得たらしい。

秀吉「うむ。疲れたのう。」

いつの間にか来ていた秀吉が答える……なぜか髪の毛をポニーテールにまとめていた。そんな髪型をするから「女の子」とか「男の娘」とか言われるんだぞ。そして明久は秀吉を見て顔を赤らめるな！！

康太「…………（コクコク）」

土屋もこっちにやってきて同意した。

雄二「よし、昼飯食いに行くぞ！ 今日のはラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにするかな。」

全く疲れてない様子の雄二が勢いよく立ち上がる。つか、どんだ

け食うんだよ!!」

美波「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒にいい？」

雄二「ああ、島田か。別に構わないぞ。」

島田「それじゃ、混ぜてもらうね」

康太「……………（コクコク）」

どうやら島田も一緒に食べるらしい、明久がようなこと言って怒りださなきゃ良いけど…

美波「吉井、ないかウチの悪口考えてない？」

明久「滅相もございません。」

……………すでに嫌な予感しかしないんだが…

明久「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーター当たりを—————」

柊・瑞希「あ、あの。皆さん（みんな）…」

玲奈「皆さん待ってください。」

明久「うん？ あ、姫路さん達も一緒に学食行く？」

瑞希「あ、いえ。え、えっと……………」

柊「お、お昼なんだけど……………」

姫路と椀がもじもじしながら俺らの方を見ている。……ああ!!
そういえば!!

秀吉「おお、もしやお弁当かの？」

玲奈「正解です。秀吉君。」

瑞希「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ。」

椀「う、うん。食べてほしいです。」

おお、二人とも料理上手そうだからな……どんな料理なのかひじょうに楽しみだ!!

明久「迷惑なもんか！　ね、恭介！　雄二！」

雄二「ああ、そうだな。ありがたい。」

恭介「本当にありがとうな、姫路、椀」

瑞希「そうですか？　良かったあ」

椀「うん、本当に良かったよ」

嬉しそうに笑う姫路と椀。普通、喜ぶのはご馳走して貰える俺達の様な気がするが……

美波「む……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……」

そう言いなぜか明久を親の仇の様に睨んでいる……睨むなら明久じゃなくて姫路の様な気がするが……

秀吉「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上でも行くかのう」

玲奈「そうですね。せっかくですから良い景色で食べたいですね。」

確かにこんな教室で食べるより屋上で食べた方が何倍も美味しくなるだろう。そして秀吉はいつもよりテンション高いな……ニヤニヤ

雄二「そうか。ならお前らは先に行っててくれ。」

明久「ん？ 雄二どこか行くの？」

雄二「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな。」

美「あ、それならウチも行く！ 一人じゃ持ち切れないでしょ？」

珍しく島田が気遣いを見せる。なるほど明久に自分も優しいってアピールか？ さんざん暴力を振っているから意味が無いような気がするが……

雄二「悪いな。それじゃ頼む。」

美波「おっけー」

雄二「きちんと俺たちの分をとっておけよ。」

明久「大丈夫だってば。あまり遅いとわからないけどね。」

恭介「結構人数がいるからな。」

雄二「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行ってくる。」

そう言って二人して教室を出て飲み物を買いに行った。

明久「僕らも行こうか。」

瑞希「そうですね。」

姫路の持っていたバックは明久、椀の持っていたバックは俺、玲奈の持っていたバックは秀吉が持って屋上へと向かった。

椀はそんなに重くないな……ああ、椀はデザートを作るって言うてたっけ。

秀吉「天気良くて何よりじゃ。」

玲奈「そうですね。」

屋上の向こうは文句ない晴天。絶好の弁当日和だな。

瑞希「あ、シートもあるんですよ。」

姫路が持ってきたシートを広げれば準備万端だ。

幸い俺たち以外の生徒はいない。

椀「気持ちいい〜」

恭介「そうだな……。」

春の日差しとそよ風が心地よく、眠りを誘う。

瑞希「あの、あまり自信がないんですけど……。」

玲奈「皆さんの口に合えば良いんですが……。」

姫路は明久をチラチラ見ながら、玲奈は（無意識に）秀吉を一度見て、重箱のふたを開けた。

『おおっ!!』

みんな一斉に歓声をあげた。

すごく旨そうだ。姫路のは唐揚げやエビフライにおにぎり、玲奈のはミニオムレツやミニチキンカツにピラフと定番メニューが詰まっている。

明久「それじゃ、雄二には悪いけど、先に――――」

康太「……………（ヒョイ）」

恭介「あっ、ずるいぞ土屋。」

動きの速い土屋がエビフライをつまみとった。

そして、流れるように口に運び――――

康太「……………（パク）」

ボタン

ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

明久「……………」

秀吉「……………」

玲奈「……………」

柊「……………」

恭介「……………」

俺、秀吉、明久、柊、玲奈は顔を見合わせた。

瑞希「わわっ、土屋君!？」

姫路が慌てて、配ろうとした割り箸を取り落す。

康太「……………（ムクリ）」

ムツツリーニが起き上がった。

康太「……………（グッ）」

瑞希「あ、お口に合いましたか？ 良かったですっ。」

康太が言いたいことがわかったのか、姫路が喜ぶ。

でも土屋の足は未だガタガタ震えている……これは……

恭介「土屋、むちゃ、むぐう!?!」

土屋に本当に大丈夫か聞こうとした時、明久にいきなり口を押えられた。

瑞希「?」

恭介（いきなり何するんだよ明久!!）

明久（恭介こそ、ムツツリーニの気遣いを無駄にする気!?!）

秀吉（そうじゃ、もしかしたら偶々失敗した料理が混ざっていたのかもしれないじゃ。）

恭介（食べた途端、倒れるような失敗料理ってなんだよおいっ!!
聞いたことないぞ!!）

姫路は未だ気づいてないが、どう考えてもヤバイ。姫路は料理がダメなのかもしれない……

秀吉（ここは、ワシが様子を見るのじゃ。）

明久（そんな、危ないよ!）

恭介（そうだ、なんで土屋が倒れたのかはわかってないんだぞ!）

原因がわからない以上どの位危険な料理なのかわからない。

秀吉（大丈夫じゃ。ワシの鉄の胃袋ならジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんじゃ。）

…よく食中毒を起こさないものだ…：

雄二「おう、待たせたな！　へー、こりや旨そうじゃないか。どれどれ？」

雄二登場

明久「あつ、雄二」

止める間もなく素手で唐揚げを口に放り込み、

パク　　ボタン——ガシャガシャン、ガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

美波「さ、坂本！？　ちよつと、どうしたの！？」

遅れてきた島田が雄二に駆け寄る。

……料理に何を入れたんだ。姫路さんよお……

すると雄二が倒れたまま俺達の方を見て、目で訴えてきた。

雄二『毒を盛ったな』

明久『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ。』

恭介（お前ら、なんでアイコンタクトで会話ができるんだ！？）

明久が雄二の訴えてきたことを翻訳してくれたため何となくわかったが、未だに法則性まではわからなかったりする。

玲奈「……瑞希ちゃん、その唐揚げの材料はなんですか？」

玲奈がさらっと姫路からレシピを聞き出す。

瑞希「えっと、鶏肉と醤油、小麦粉、後お肉が柔らかくなるように『硫酸』と『塩酸』を少々……」

恭介「島田！！　今すぐ売店で有るだけの牛乳パック全部買ってこい！！！」

美波「え、ええ！！！」

とりあえず。胃の中にある王水を中和させないとこいつ等が死ぬ。

玲奈「……瑞希ちゃん」

玲奈が威圧感たっぷり姫路に問いかける。

瑞希「はっはい！！！」

玲奈「……お料理の勉強をきちんとしてみようか、『王水』なんて明久君に飲ませたら死んでしまいますよ？」

瑞希「!! ご、ごめんなさい、皆さん!!」

明久「大丈夫だよ、姫路さん。失敗は誰にでもつきものだから。」

秀吉「そうじゃぞ、今度から気を付ければいいのじゃ。」

恭介「ああ、玲奈は料理が上手いからきちんと教われれば問題なくなるぞ。」

椀「瑞希ちゃんドンマイだよ。」

姫路は自分がとんでもないことをしたと気づいて謝った。まあ、玲奈が教えるなら何とかなるだろう。

恭介「それじゃ、気を取り直して飯食うか。」

その後、雄二と土屋の治療も無事終え、玲奈の弁当と椀のデザートを食べた。

玲奈の料理は勿論旨く、大好評だった。姫路が悔しそうにしていたが玲奈が何か耳打ちすると、顔を赤くした後すぐに機嫌が良くなった。玲奈は秀吉に料理を褒められ顔を赤くしていた。

そして椀のデザートはシュークリームで此方とてもおいしかった。
(俺は大の甘党なので、とても嬉しかったりした)

第十一問（後書き）

どうも作者です。

なんとか今日中に投稿することができました。

次回からやっとBクラス戦に突入（予定）です。

……明日から9月ですね……鬱だ（ハア……

これからは確実に投稿頻度が下がります。

1週間に1話になることも多くなると思います。

こんなカメな小説ですが応援してくれればいいです

ではこの辺で。

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからもよろしく願います。

第十二問（前書き）

問題（現代国語）

『芥川龍之介の作品を答えなさい』

姫路瑞希・水谷玲奈・立花椋の答え

『羅生門』

教師のコメント

正解です。簡単でしたね。

土屋康太の答え

『肛門』

教師のコメント

偉大な文豪に謝って下さい。

吉井明久の答え

『河童』

水谷恭介の答え

『河城（訂正）河童』

教師のコメント

正解ですが、水谷君が最初なんと答えようとしたのかとても気になります。

島田美波の答え

『覇愚流魔』

教師コメント

なんとか伝えようとしているのがわかりますが漢字がとても禍々しいです。

第十二問

Side 恭介

美波「そういえば坂本、次の目標だけど。」

雄二「ん？ 試召戦争のか？」

美波「うん。」

死人が出そうだった昼食も終え、のんびりとお茶をすする。多少量は少なかったけど玲奈の料理と椀のシュークリームにみんな満足していた。

美波「相手はBクラスなの？」

雄二「ああ。そうだ。」

雄二が言ってたな。Dクラスの窓の外に設置されている、Bクラス用エアコンの室外機をDクラスに壊してもらうって。

美波「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

確かに最終目標はAクラスだ。島田はBクラスを相手にする理由がわからないのだろう。まあ、そりゃ……………

雄二「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない。」

恭介「ああ、そうだな。馬鹿正直にAクラスに戦争吹っかけてもまず相手にされないし、相手にされたところで1時間以内にここにいる9人以外の生徒が戦死し、2時間以内に雄二が戦死するな。」

玲奈「そうですね。正面から戦うなんて無謀すぎます、ハッキリ言っ
て勝率は0%です。」

雄二「なんだ。お前たちは気づいたのか。」

恭介「まあな。」

玲奈「ええ。」

雄二の戦う前からの降伏宣言に、俺と玲奈が同意した。

確かに五十人のAクラスの内、四十三人はBクラスより少々点数が高い普通の生徒だが、残りの七人とFの玲奈、姫路、椋は別格だ。正確には俺を含めた十一人だ、特にAクラス代表の霧島翔子は別格だ。去年は玲奈の次の成績で学年次席だったが実質玲奈と成績はほとんど変わらない。俺ら以外のFクラスの奴ら全員が取り囲んで勝負しても勝てる見込みは無い。例え玲奈が相手をしようとしても、親衛隊にいる残りの6人が邪魔になって霧島までたどり着かないだろう。どんな作戦を立てたところで、代表を倒せなければ意味が無い。

美波「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

確かにBクラスぐらいの設備なら皆、満足するだろうが……

雄二「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる。」

明久「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか。」

確かに雄二の言ってることは矛盾しているように思うが……

雄二「クラス単体では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ。」

明久「一騎打ちに？ どうやって？」

雄二「Bクラスを使う。」

そう、そのためのBクラス戦だ、しかし明久は全く分かっている様子がない。

恭介「明久、試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるよな。」

明久「え？ も、もちろん！」

…………絶対わかってない…………

瑞希（吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ）

明久「設備のランクを落とされるんだよ」

姫路が明久に助け船を出し、明久が正解を答えた。……ったく……

玲奈「そうです。つまりBクラスがAクラスに負けると、BクラスはCクラスの設備になります。」

雄二「では、上位クラスが負けた場合は？」

明久「悔しい」

……明久、その発想は無かった……

椀「相手クラスと設備が入れ替わっちゃうんだよ、明久君。」

明久「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけ……なるほど!!」

どうやら明久がやっと気づいたらしい。

雄二「気づいたか？ そのシステムを利用して、交渉する。」

瑞希・椀「交渉^{ですか}？」

……どうやら、この二人はわかってないらしい。やっぱり純粹（天然）なんだな、だから姫路なんかは料理をおいしくするために化学薬品を混ぜちゃうんだろうな……

雄「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう。」

明久「なるほど、そうすれば」

雄二「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな。」

美波「なるほどね。」

Bクラス戦後、直ぐに連戦で戦うなら正直ガリ勉君多いAクラスには無理がある。だが、それでも勝率は3割ぐらいだろう。

秀吉「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに――」

明久「それに？」

秀吉「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？　こちらに姫路がいるということは既に知れ渡っていることじゃろうし、玲奈や椋が霧島に勝てる保証もないのじゃ。」

玲奈「秀吉君の言うとおりですね、私が翔子ちゃんに必ず勝てるかどうかはわかりません」

そのとうり、一騎打ちに乗ってくる可能性は低いし、霧島に玲奈を当てたところで点数は互角の二人だ勝てる可能性は五分五分だ。

雄二「そのへんに関しては考えがある。心配するな。」

雄二が自信満々に答える。本当に大丈夫なのか？

雄二「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてや

る。」

明久「ふーん。ま、考えがあるならいいけど。」

明久はとりあえず雄二の言葉に納得したようだ。

雄二「で、明久」

明久「ん？」

雄二「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告して来い。」

恭介「それについてなんだが雄二。」

雄二「なんだ恭介？（っち、また邪魔する気か）」

恭介「Bクラスへの宣戦布告には俺が行く。」

雄二「は！？　なんでだ、ボコボコにされるぞ！？」

明久「……今、僕をボコボコになると分かってて、行かせようとしたよね？　雄二。」

本当なら、雄二を丸め込み他の奴に逝かせるところだが……

恭介「ちょっと、ある噂を聞いてね。それを確かめに行く。」

ちょっと確認しておかなければいけないことがある。

雄二「……………わかった。」

代表の許可も下りたので今日の放課後、Bクラスへの宣戦布告の役が決まった。

恭介「じゃ、行ってくる。」

午後のテストも無事終了し、放課後。

俺はBクラスへの宣戦布告のために軽くストレッチしている。

椛「ほ、本当に大丈夫なんですか??」

椛は昨日のDクラスへの宣戦布告で暴行があったことを知ってるためか、心配してくれた。

恭介「ん? 大丈夫だ。」

椛「で、でも……」

なぜか物凄く心配そうに俺を見てくる椛。その上目使いが可愛……ゲフンゲフン。てか、俺ってそんなに弱そうに見えるのか!?

玲奈「兄さん。やり過ぎないようにして下さいね。」

明久「恭介、やり過ぎはダメだからね。」

玲奈と明久は俺ではなく、Bクラスを心配していた。……………まあ、なに…………

恭介「大丈夫、襲われたら本気は出すけど見せるだけだ。」

雄二「…………お前の場合見せるだけでも問題だろう…………」

雄二が何か言ってるが無視してBクラスへ行くことにした。

恭介「おっと、忘れてた。」

ガサゴソ……………

俺は自分の鞆^{エナメル}をあさり、中からブレザーと…………

瑞希「水谷君の持っているのって…………」

土屋「……………木刀二本。」

短い木刀を二本、改造したブレザーの両脇に入れた。

明久「…………Bクラス大丈夫かな？」

玲奈「…………兄さんがああ言っていた以上、怪我人は出ないと思います。」

雄二「…………いや、絶対怪我人が出るぞ。」

秀吉「…………下手すると、救急車が出動するかもしれんのう。」

やはり皆、なにか言っているが無視だ。Bクラスの真面目君相手に本気なんて出すか!!

（Bクラス前）

恭介「失礼します。」

Bクラスのドアを開け中に入る。するとまだほとんどの生徒が残っているようで、一斉に俺の方をみる。

Bモブ『うちのクラスに何か用?』

恭介「ちよつとBクラス代表に会いたくてな。」

根本「俺がBクラス代表だが何か用か?」

っち。やっぱりBクラス代表は根本か。Bクラス代表 根本恭二。こいつはとにかく評判が悪く噂ではカンニング常連、目的のためなら手段を択ばないらしく、曰く『球技大会で相手チームに一服盛った』とか『喧嘩は刃物を当然装備』とか。とにかく卑怯なことで有名だ。

恭介「ああ。俺達、Fクラスはお前らBクラスに試召戦争を申し込む。まさか受けないってことは無いよな、Bクラス代表さん。」

ざわざわざわざわ………

俺の宣戦布告と同時にざわつきだすBクラス。

Bモブ『宣戦布告!? しかもFクラスだと!?』

Bモブ『格下の癖に、舐めてるのか!!』

Bモブ『Dクラスにマグレで勝ったからって、調子乗ってんじゃねえぞ!!』

根本「わかった。受けてやる、時間は？」

恭介「明日の午後からで、午前中に補給試験を受ける手続きをしちまったから今更撤回は出来ないし。それじゃ。」

そう言っさつとBクラスを去ろうとすると。

根本「まあ、待てよ」

いやらしい笑顔で根本が俺を呼び止める。

恭介「……なんだよ。」

根本「Fクラスの癖に、俺達Bクラスにケンカ売って無事に帰れると思うか？」

恭介「……宣戦布告しに来ただけだが？」

根本「……いい度胸だな。おいお前ら可愛がってやれ。」

根本がそう言うど厳つい男子生徒が三人で俺を囲む。本当にこいつらBクラスの学力あるのか？

Bモブ『悪いが唯では帰さないからな。』

Bモブ『Bクラスを舐めた罰だ。』

Bモブ『恨むなら、アンタを宣戦布告の使者にした奴を恨みな。』

それぞれ言いたいこと言って殴りかかってきた。……全く……

恭介「メンドクサイ——」

ドスッ！！　　ボグウ！！　　グキヤ！！

Bモブ『ガッ…』

Bモブ『グフッ！！』

Bモブ『ミギヤッ！！』

恭介「————アホ共だな。」

根本「なっ！！」

Bクラス『え！？』

襲ってきた3人を一撃で沈める。それが予想外だったのか根本は驚き、Bクラスの連中はなにが起こったかわからず啞然としていた。

恭介「じゃ、そういうことで。」

そう言って俺はFクラスに戻って行った。

「Fクラス」

恭介「宣戦布告してきたぞってあれ……?」

雄二「ご苦労だったな恭介。」

明久「お帰り、恭介。あ、玲奈なら姫路さん達と先に帰っちゃったよ。」

ドアを開けて無事宣戦布告してきた事をアピールしたが、残っていたのは雄二と明久だけだった。

恭介「帰っちゃったのか……（少し不味いかもな。）」

雄二「……どうした。何かあったのか?」

雄二は俺が顔をしかめた事を不思議に思ったのか疑問の声を上げた。

恭介「……Bクラス代表は根本恭二だ。」

明久「えっ!!」

雄二「何だと!?!」

二人はBクラス代表が根本だと聞き驚きの声を上げた。

雄二「……それだと対策を練る必要があるな……今日はひとまず帰

るぞ。」

恭介「ああ、このまま残っているのもまずいからな。」

Bクラス代表が根本のため、どんな卑怯な手を使ってくるかわからない。

俺達は明日までに各々対策を考えてくることにし、今日は帰宅した。

第十二問（後書き）

どうも作者です。

もう9月ですね……タイムリミットまであと5か月……全然勉強で
きてねえorz

やっと次回からBクラス戦に入ります。

本当は今回突入して終わりにしようと思ったのですがまだ細かいと
ころまで考えてなかったので急遽予定を変更しました。

あと、バカテストのネタが思いつきません（汗）できればネタを下
さいお願いします。

ではこの辺で。

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからもよろしくお願いします。

第十三問（前書き）

投稿が遅れてしまいましたorz
新学期が始まり色々忙しくやつと一話分がかけました。
今回のバカテストは休みです。
ではどうぞ。

第十三問

Side 恭介

雄二「さて皆、総合科目テストご苦労だった。」

教壇に立った雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

今日も午前中がテストで、ついさっき全科目のテストが終了し昼食を取り終えたところだ。

雄二「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、やる気は十分か？」

F全員『おおーっ！』

一向にモチベーションが下がる気配もない。ある意味Fクラス唯一の武器だな。

雄二「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は負けるわけにはいかない。」

F全員『おおーっ！』

雄二「そこで、前線部隊は姫路に指揮を取ってもらい、さらに椀と玲奈にも加わってもらう。野郎どもきっちり死んで来い！」

瑞希「が、頑張ります。」

椛「頑張るよ」

玲奈「よろしくお願いします。」

前線部隊『うおおーっ!!!!!!!!!!!!!!』

この3人が前線部隊に加わるっただけでFクラスの士気は最高潮に達していた。ほんととんだけ女子に飢えてるんだよ!!

とりあえず今回は廊下での戦闘がカギを握っている。廊下で負けてしまうとFクラスに勝ち目はない、だからFクラス五十人中四十人をいきなり投入する。そして、姫路、玲奈、椛の三人で一気に廊下を制圧する作戦だ。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響き、Bクラス戦が始まった。

雄二「よし、行ってこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

F全員『サー、イエッサー！』

敵の教室に押し込むのが目的なので、とにかく勢いが重要だ。

俺達は全力でBクラスへと向かう廊下を走った。

今回は数学を主武器として使う。理由はBクラスは比較的文系が多いのと、長谷川先生の召喚可能範囲が広いということだ。一気に勝負を決めたいときに便利な先生だ。他にもライティングの山田先生と物理の木村先生もいる。

Fモブ『いたぞ、Bクラスだ!』

Fモブ『高橋先生を連れているぞ!』

正面から十人ほどBクラスのメンバーがゆっくり歩いてきた。あくまで様子見のつもりらしい。

Fモブ『生かして帰すなーっ!』

物騒なセリフが皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス 野中長男 VS Fクラス 近藤吉宗
総合 1943点 VS 764点 』

やっぱり、圧倒的な差だな流石はBクラス。

『Bクラス 金田一裕子 VS Fクラス 武藤啓太
数学 152点 VS 69点 』

『Bクラス 里井真由子 VS Fクラス 君島博
物理 152点 VS 77点 』

圧倒的な実力差を前に第一陣がごとくやられていく。まずいなとどめを刺される前にフォローしないと戦力が一気に削がれてしまう。

恭介「明久は近藤の、島田は武藤のフォローを頼む。木村先生、召喚許可を。」

明久「了解!! 高橋先生、召喚許可をお願いします。」

美波「わかったわ!! 長谷川先生、召喚許可をお願いします。」

先生達「「承認します。」」

明久、美波、恭介「「サモン!!」」

召喚許可がされてすぐに俺達は召喚獣を召喚した。

『 Bクラス 野中長男 VS Fクラス 吉井明久
総合 1943点 VS 1892点 』

『 Bクラス 金田一裕子 VS Fクラス 島田美波
数学 152点 VS 182点 』

『 Bクラス 里井真由子 VS Fクラス 水谷恭介
物理 152点 VS 310点 』

Bクラス連中『なっ!!』

美波、明久「「えっ!!」」

デフォルメされた明久に学ランを着せて木刀を持たせた姿の召喚獣は、卓越された操作技術で相手の急所を一突きして倒し、デフォルメされた島田に軍服を着せてサーベルを持たせた姿の召喚獣は点数差を利用し楽々と相手を倒し、デフォルメされた俺に黒いアーチャーの鎧を着せて、弓と2本の剣を持たせた召喚獣は相手の急所を一撃で射止倒した。

『 Bクラス 野中長男 VS Fクラス 吉井明久
総合 0点 VS 1889点 』

『 Bクラス 金田一裕子 VS Fクラス 島田美波
数学 0点 VS 160点 』

『 Bクラス 里井真由子 VS Fクラス 水谷恭介
物理 0点 VS 301点 』

美波「吉井!! アンタその点数どういうこと!? まさかカンニング!?」

明久「違うよ!! 恭介と玲奈に勉強を教わってるって言ったでしょ!!! それより島田さんこそ数学の点数が…」

美波「ウチは日本語がわからないだけで数学は日本語が読めなくても解けるし、元々得意科目なの!!!」

……やっぱりまだ明久の学力を認めてなかったのかよ。まあ普段はあんなに間抜けな行動をしてる訳だし無理もないか……

瑞希「お、遅れ、ました……。ごめ、んな、さい……。」

柊「瑞希ちゃん、大丈夫? ほら落ち着いて深呼吸して。」

玲奈「大丈夫ですか? 瑞希ちゃん?」

瑞希「だ、大丈夫、です……」

すると息を切らせている姫路とそれに付き添っている玲奈と椀が合流した。

Bモブ 『来たぞ！ 姫路瑞希だ！』

Bモブ 『どうゆう事だ！？ 水谷玲奈と立花椀も居るぞ！？』

Bモブ 『彼女たちはAクラスじゃなかったのか！？』

Bクラスのメンバーが叫ぶ。昨日のDクラス戦の結果は学年中に知れ渡っているらしく、当然、姫路がFクラスに居ることも知れ渡ったが玲奈と椀がFクラスに居ることはまだばれていなかったみたいだな。Bクラスは玲奈と椀がいることに驚き、混乱し始めている。

恭介 「姫路、玲奈、椀、来たばかりで悪いが……」

瑞希 「は、はい。行って、きます」

椀 「うん。わかったよ」

玲奈 「了解です。」

岩下 「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます。」

瑞希 「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします。」

菊入 「律子、私も手伝う！」

後ろからさらに一人加勢する。すでに3人戦死しているのに2人が

かりとは、よっぽど警戒されてるんだな。

『サモン!!』

喚声に応えて魔方阵が展開し、敵が剣と槍を構えた2体の召喚獣を
姫路が大剣を持った召喚獣を召喚した。

恭介「おっ！　姫路は腕輪持ちか。」

瑞希「あ、はい。数学は結構解けたので……」

明久「えっと、確か腕輪って……」

姫路の召喚獣は綺麗な腕輪をしていた。

岩下「そ、それって!?!」

菊入「私達で勝てるわけじゃないじゃない!」

瑞希「じゃ、いきますね。」

姫路が手を握るとそれに合わせて召喚獣が左腕を敵に向けた。

岩下「ちょっと待ってよ!?!」

菊入「律子！　とにかく避けないと!」

大げさなぐらい横に跳ぶ二人の召喚獣。直後、姫路の腕輪が光だし
……

キュボツ！

岩下「きゃあああーっ！」

菊入「り、律子！」

左腕から光線がほとばしった瞬間、片方の召喚獣が炎に包まれた。なるほど姫路の腕輪の能力は『熱線』か……。召喚獣にはある一定以上の点数を取ると特殊能力を持った腕輪が与えられる。

『 Fクラス 姫路瑞希 VS Bクラス 岩下律子&菊入真由美
数学 412点 VS 189点 & 151点

』

瑞希「ご、ごめんなさい。これも勝負ですのっ。」

姫路の召喚獣は、バランスを崩したもう片方の召喚獣にいつきに近づき一刀両断して勝負を決めた。

Bモブ「も、もう5人も戦死者が出たぞ！」

Bモブ「なっ！！ そんな馬鹿な！？」

Bモブ「こいつ等予想以上に危険だぞ！！」

残りの5人に驚愕の表情が浮かぶ。まあBクラス並みの数学の島田にCクラス代表並の総合の明久、Aクラス並みの玲奈、姫路、椛、俺を相手にして逃げ出さない方がおかしい。

Bモブ「なら、文系科目なら！！ 高橋先生、Fクラス水谷恭介に

現代国語で勝負を……」

玲奈「Fクラス水谷玲奈が受けます。サモン!!」

Bモブ「それなら、俺が…山田先生、Fクラス水谷恭介にWで勝負を……」

椀「Fクラス立花椀が受けます。サモン!!」

得意の文系科目で勝負を挑もうとした、Bクラスの二人だったが……

『Fクラス 水谷玲奈 VS Bクラス 徳永慎太郎
現国 523点 VS 240点』

『Fクラス 立花椀 VS Bクラス 高田信彦
W 550点 VS 254点』

高田・徳永『はいっ!?!』

……残念ながら二人の得意科目だったようだ、ご愁傷様だな。

玲奈「残念ながらあなたの負けです。」

椀「私の勝ちだよ」

玲奈の召喚獣の腕輪が光ると、相手に一気に近づき高速の刃で相手を切り裂いた。

椀の召喚獣の腕輪が光ると、相手に向かって片手剣を振り斬撃を飛ばした。

高田・徳永『ぎゃあー!!』

『Fクラス 水谷玲奈 VS Bクラス 徳永慎太郎
現国 460点 VS 0点』

『Fクラス 立花椋 VS Bクラス 高田信彦
W 487点 VS 0点』

腕輪を使わなくても勝てたと思うんだが……

Bモブ「もう残り3人しかないぞ!？」

相手の指揮官は完全にパニックっている。これは勝機だな。

恭介「よし!! 一気に攻め込め!!」

玲奈「皆さんあと少しで相手は全滅です。」

椋「今がチャンスだよ」

瑞希「み、皆さん、頑張ってください!!」

姫路、指揮官なんだからもう少しそれっぽい指示を――――

Fモブ「やったるでーっ!」

Fモブ「姫路さんサイコーっ!」

Fモブ「椋さんカワユス!!」

Fモブ「玲奈さん……ハアハア……」

しなくていいや。うちのクラスは姫路の掛け声だけで動くみたいだな。そして後ろの二人は終戦後……ソンザイヲケス!!……

恭介「姫路、玲奈、椛、とりあえず下がってくれ。」

瑞希「あ、はい。」

玲奈「わかりました。」

椛「オッケーだよ。」

敵の士気が一気に削がれたので三人には一旦下がってもらおう。特殊能力は威力が大きい分消耗も激しかったりする。それに相手の前線崩壊は時間の問題だ。

恭介「さて秀吉、明久。俺達は教室に戻るぞ。」

明久「えっ?……ああ、そういえばBクラス代表は……」

秀吉「うむ。あの根本恭二だったのう。」

恭介「親衛隊がいるから簡単にはやられないだろうけど。一応な。」

とりあえず玲奈にこの場を任せて俺達は何人かを引き連れて教室に戻った。

明久「……うわ、こりゃ酷い。」

秀吉「まさかこうくるとはのう。」

恭介「……本当に卑怯だな。」

教室に戻った俺達の目に呼び込んできたのは、穴だらけの卓袱台とヘシ折られたシャーペンや細かく千切られた消しゴムだった。……器小さすぎるだろ根本、怒りを通り越して呆れるレベルだ。

明久「酷いね。これじゃ補給がままならない。」

秀吉「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな。」

雄二「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない。」

恭介「雄二、お前教室が荒らされるの気づかなかったのか？」

雄二は開戦後ずっと教室にいたはずだから、だれかが侵入すれば気づくはずだ。

雄二「協定を結びたいと申し出があってな。調印のために教室を開けていたんだ。」

秀吉「協定じゃと？」

雄二「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな。」

明久「それ、承諾したの？」

雄二「そうだ。」

恭介「なるほど、姫路、椛、玲奈を考慮して体力勝負は不利になるって考えか？」

雄二「そのとうりだ。あいつ等の教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると作戦の本番は明日になる。」

恭介「まあ、十ちゅう八っ九俺達が勝つだろうな……」

明久「？　どうしたの恭介？」

恭介「いや……なんでもない。」

どうも一筋縄で行きそうにないかもな……

秀吉「明久、恭介。とりあえずワシらは戦線に戻るぞい。向こうでも何かされているかもしれん。」

明久「ん。雄二、あとよろしく。」

雄二「おう。シャーペンや消しゴムの手配をしておこう。」

そう言い明久は秀吉の後をおって戦線に戻って行った。

恭介「……雄二。もしかしたら、主戦力が動けなくなるかもしれない。」

雄二「っ!!　　どういうことだ?」

恭介「あくまで俺の予想だ……だが一応その時のための作戦も考えておいてくれ。」

雄二「……わかった。」

俺はそう雄二に警告して戦線に戻るために教室を出た。

根本が補給を絶つただけに教室を荒らしたとは思えない。何らかの弱みを探した可能性がある。特に姫路、玲奈、椋の三人のだ。

恭介「何もなければいいんだが……」

そう思いながら戦線に戻って行った。

第十三問（後書き）

どうも作者です。

これからは投稿頻度が1週間に1話か2話になりそうです。

ハッキリ言って学校の後に3時間小説書くのはきついです。（作者は大体3〜4時間掛けて1話を書いてます。）

今回はBクラス戦前半を書きました。玲奈と椋の腕輪の消費量を少し少なくしました、理由は「そんなに強い能力じゃないかな」思ったからです。

玲奈のは近づかないと意味ないし、椋のは簡単によけられそうだし…

というわけで一回消費点数を50点前後にします。

では今回はこのへんで。

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからもよろしく願います。

第十四問（前書き）

模試↓文化祭準備↓文化祭↓模試で更新が遅れてしまいました。

すいません。

今回もバカテストは休みです。

第十四問

S i d e 恭介

恭介「戻ったぞ、戦況はどうだ？」

俺は明久、秀吉と別れて自分の部隊に戻った。

Fモブ「樫さんのおかげでなんとかこっちが優勢だ。」

樫のおかげでFクラスの方がまだ優勢みたいだ。

恭介「わかった。 樫！ 点数はまだ大丈夫か？」

樫「うーん……ちょっとまずいかも……」

相手の殆どを一人で相手してるだけあって、限界のようだ。

恭介「なら、これ持って補給試験受けてこい。」

そう言って、俺は樫にシャーペンと消しゴムを渡した。

樫「筆記用具なら教室にあるよ？」

恭介「……ちょっと教室が荒らされて筆記用具は全部だめになった。」

樫「ええ！？ う、嘘……」

恭介「悪いが本当だ。相手は勝つために手段を選ばないみたいだ、気を付けて行動した方が良いぞ。」

椛「……うん、わかった。補給試験行ってくるね。」

椛に教室の惨状を伝えるとショックだったのかいつもの明るい雰囲気が嘘のように暗くなり教室に補給試験を受けに行った。……まあ仕方ないか……

恭介「……さてと、いっちょ暴れますか。」

俺は教室を荒らされた怒りをなんとか抑えながら戦線に加わった。

恭介「木村先生、そこにいるBクラス二人に物理で勝負を挑みます。」

Bモブ「おい、あいつ昨日の生意気なFクラスの使者じゃねえか？」

Bモブ「しかも俺達二人を相手にするって？ Fクラスの癖に舐めてるのか!!」

木村先生「承認します。」

Bクラスの二人がごちゃごちゃ言ってるがどうでもいい、さっさと流れをこちらに引き寄せるだけだ。

恭介・Bモブ×2「サモン!!」

『Fクラス 水谷恭介 VS Bクラス モブ×2

物理 410点 VS 165点&157点

』

Bモブ『なにい!?!』

Bモブ『ば、馬鹿な。400点越え……だと……!?!』

恭介「メンドクサイ、一気に片づける。」

俺の召喚獣が弓を構えると腕輪が光り、螺旋状の矢を放った。

Bモブ『しかも腕輪持ちかよ!?!』

Bモブ『だが当たらなければ…』

そして相手の召喚獣が矢を避けて足元に刺さった途端。

恭介「我が矢は捻じれ狂う。」

ドゴォオン!!

爆発した。

Bモブ×2『ギャー!!!』

『 Fクラス 水谷恭介 VS Bクラス モブ×2
物理 260点 VS 0点&0点 』

やっぱり消費のデカさが難点の腕輪だなこれ。まあそんな事より

恭介「次だ!!」

Bモブ『な、なんだアイツ！？』

Bモブ『本当にFクラスなのか！？』

Bモブ『落ち着け、文系科目なら……山田先生、Fクラス水谷恭介にWで勝負を挑みます。』

山田先生『承認します。』

Bモブ×3『サモン！！』

恭介『っち！！ サモン！！』

『Fクラス 水谷恭介 VS Bクラス モブ×3』

W 137点 VS 214点&209点&223点

』

くそ！！ よりにもよって苦手科目を三人がかりで……

Bモブ『Fクラスにしては驚きの点数だが、相手が悪かったな！！』

Bモブ『これだと、三人がかりで相手している俺達が大人げない奴らに見えちゃうぜWW』

Bモブ『そうだな、俺が一人で相手してやるよっ！！』

そう言って相手の一人が俺に向かって突っ込んできた。三人がかりだと流石に無理だが、相手が一人なら……

恭介『ふっ！！』

ヒヨイ

Bモブ『なっ!?!』

バシ!!

『Fクラス 水谷恭介 VS Bクラス モブ×3

W 137点 VS 163点&209点&223点

』

攻撃が当たるわけない。点数では負けてるが、操作能力はこっちの方が上だ!!

Bモブ『おいおい、なに避けられてんだよ。』

Bモブ『しかも反撃くらってるしWW』

Bモブ『う、うるせえ!! まだ慣れてないんだよ!!』

今度こそ。と、向かってくる相手に

恭介「操作が雑なんだよ!!」

Bモブ『なにっ!!』

ドカツ!!

『Fクラス 水谷恭介 VS Bクラス モブ×3

W 110点 VS 0点&209点&223点

』

相手の召喚獣の首を的確に刎ねて戦死させる。……少し掠ったか。

Bモブ『ギャー!!』

Bモブ『なんで、負けんだよ!? こっちの方が点数上だろ?』

Bモブ『この野郎!! こうなったら二人がかりで!!』

点数で余裕で勝っている仲間がやられた事に、流石にあせったのか二人がかりで突進してくる。……そんな猪突猛進な行動じゃ。

恭介「隙だらけだ!!」

相手の突進を避け、腰に着けている投げナイフを二体の召喚獣の足めがけて投擲する。

Bモブ『くっ!!』

Bモブ『うお!!』

『Fクラス 水谷恭介 VS Bクラス モブ×2
W 110点 VS 192点&201点』

さらに相手の召喚獣が止まった瞬間に。

恭介「今だ!!」

相手の召喚獣の心臓めがけ矢を放った。

Bモブ『ギアアア!!』

Bモブ『ミギヤアアア!』

『Fクラス 水谷恭介 VS Bクラス モブ×2
W 110点 VS 0点&0点 』

とりあえず、計五人を戦死させたところで。

恭介「そろそろ四時か……」

Bクラスとの協定の停戦時間になり、一旦休戦となった。

S i d e 玲奈

Bクラスとの協定で一時休戦となったので秀吉君と共に教室へ向かっています。

玲奈「お疲れ様です。秀吉君」

秀吉「玲奈こそお疲れ様なのじゃ。開戦後ずっと戦っておったのじゃろう?」

玲奈「いえ、皆さんがサポートしてくれたおかげでそこまで疲れていません。」

秀吉「本当に大丈夫かう?」

玲奈「大丈夫です。（ニコッ）」

秀吉「う、うむ／＼ 大丈夫ならよいのじゃ／＼」

流石に十人も連続で相手をしましたから、少し疲れました。ですが私は攻撃の要の一人です、弱音を吐いている暇はありません。

そうこうしているうちにFクラスへ着きました。

玲奈「ただいま戻りました……………明久君？」

秀吉「ただいまなのじゃ……………明久はどうしてこうなっておるのじゃ？」

教室に入ると明久君がまるで集団リンチをされた後のようにボロボロになって気絶していました。

雄二「おう、二人とも戻ったか。」

美波「吉井のことは気にしないでいいわ!!」

……………どうやら島田さんの逆鱗に触れたみたいです、明久君はデリカシーが欠けてますからね…………

ガラガラ

恭介「ただいま……………」

呆れながら柵ちゃんと瑞希ちゃんのところに行こうとした時、兄さ

んが帰ってきました。そして……

恭介「……行ってくる」

修羅の形相で教室を出て行こうとしました。

秀吉「お、落ち着くのじゃ、恭介!!」

恭介「何を言っている。俺は冷静だぞ？」

秀吉「木刀を担いで殺気を放っておる奴のどこが冷静なのじゃ!？」

椀「そうだよ、恭介君。暴力はダメだよ!!」

恭介「暴力? 違うぞ、椀。俺はBクラスにO☆H A☆N A☆S I
をしに行くだけだ。」

椀「それ絶対お話し合いじゃないよね!？」

まったく兄さんは……

玲奈「兄さん落ち着いてください。」

恭介「だから俺は冷静だ（玲奈）」「まず、明久君を暴行したのはB
クラスの生徒ではありません」雄二、島田。覚悟はできてるか？」

雄二「待て、恭介!! 俺は何もやって無い!!」

美波「ウチも知らないわよ!! それにどうしてウチか坂本なのよ
!？」

恭介「明久がボロボロになるのは大体、島田の折檻か、雄二のストレス発散だろ？ 自覚が無いとは言わせないぞ。」

雄二・美波「「うっ……」」

玲奈「だから落ち着いてください兄さん。次に暴行を加えたのは多分、島田さんです。」

恭介「島田……いい加減……少し頭冷やそうか？」

美波「ちょっと玲奈！？ ウチはやって無いって（玲奈）」「素直に認めないと兄さんが本気の拷問をしますよ？」……ウチがやりました。」

恭介「……島田……お仕置きの時間だ（玲奈）」「最後に島田さんが暴行を行った原因は明久君本人のデリカシーの無さだと思っています。」……ハア……そうなのか島田？」

美波「そ、そうよ！！」「吉井が血が止まらなくなった」って聞いて保健室に向かったらBクラスの罾でウチを人質にとって吉井達の隊を倒そうとして……ウチは吉井を心配してドジ踏んだってのに吉井ったら「怪我した僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」「って言うし、拳句の果てには「偽物だ！」「って言い出すし……思い出したらまた怒りが湧いてきたわ！！」

恭介「それは確かにデリカシーの無い明久も悪いが、半分はいつも明久を折檻する島田が悪い。」

流石に明久君にも非があったため、兄さんはお仕置きすることは止

めたみたいですが島田さんにシド目を向けています。確かに島田さんの照れ隠しは度が過ぎていますからね……

明久「……ここはどこ？」

瑞希「あ、気付きましたか？」

どうやら明久君が目を覚ましたようです。

明久「心配してくれてありがとう。姫路さん（ニコッ）」

瑞希「い、いえ／＼／」

明久君にお礼を言われて瑞希ちゃんは顔を赤くして照れています……可愛いですねえ」

美波「なんで瑞希ばかり……」

恭介「普段の接し方の差だろ。」

島田さんには悪いですが兄さんの言う通りだと思います。

明久「それで試召戦争はどうなったの？」

秀吉「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる。」

明久「戦況は？」

雄二「一応計画通り教室前まで攻め込んだ。もっとも、こちらの被害も少ないがな。」

そう言って坂本君は被害を書いたメモを読みます。想定した被害よりも若干少ないですが全体を通して良い状態ではありません。

恭介「ハプニングはあったが、今のところ順調ってわけか。」

雄二「まあな。」

ですが相手の代表はあの根本恭二です。教室を荒らしたのも島田さんを人質に取るように指示を出したのも彼でしょう。絶対に何か企んでいます。

康太「……………（トントン）」

雄二「お、ムツツリーニか。何か変わったことはあったか？」

気付けば今日は情報収集で戦闘に参加しなかった土屋君が戻って来ていました。いつの間に教室に入ったのでしょうか？

雄二「ん？ Cクラスの様子がおかしいだど？」

康太「……………（コクリ）」

どうやらCクラスが試召戦争の準備を始めているらしいです。……Cクラス代表は確か……

雄二「漁夫の利を狙うとはいやらしい連中だな。」

明久「雄二どうするの？」

雄二「Cクラスと協定を結ぶか（玲奈）」「待ってください坂本君。どうした？」

玲奈「Cクラス代表を知っているんですが……根本恭二の彼女です。ですからおそらく……」

雄二「……畏って事か。」

確か協定には休戦中は試召戦争に関わる全ての行動を禁止することになっています。このままCクラスと協定を結ぼうとすれば待ち伏せている根本恭二が協定違反をたてに襲ってくるでしょう。

雄二「とりあえずCクラスに行く。明久、島田、秀吉、ムッツリーニ付いて来てくれ。恭介たちは先に帰っていていいぞ。」

そう言って坂本君たちはCクラスへと向かって行きました。

恭介「じゃあ、俺達は帰るか。」

玲奈「そうですね……椛ちゃん、瑞希ちゃんも一緒に帰りましょう。」

椛「うん。じゃあ準備するね」

瑞希「私も帰る準備をしてきます。」

玲奈「私も荷物を纏めてきます。」

恭介「そうだな。」

と、私は荷物を纏めるために自分たちの卓袱台に向かいます。すると………

玲奈「……えっ!？」

あの『お守り』が無い………朝急いでいたので家に置いて来てしまったのかもしれない。

恭介「玲奈、どうかしたか？」

玲奈「いえ、なんでもありません。」

恭介「?　ならいいけど。」

……一応、家に帰ったら探しましょう……あれを失くしてしまったら私は……

恭介「よし、帰るぞ。」

玲奈・椀・瑞希「」「はい。」「」

兄さんの掛け声と同時に私たちは学園を後にしました。

第十四問（後書き）

どうも作者です。

更新が遅れた理由は前書きにあるように行事のオンパレードのせい
です。

ですがこれから早くて2月中旬、遅くて3月中旬まで月に2話分ぐ
 らいのペースになると思います。

理由は作者の学力が非常にヤバい事になっているからです。

(特に英語と数学？Bが……／＼O／)

途中で投げる気はありません。

必ず最後まで書き切ります。

この小説がある程度まで進んだら東方の二次小説も作るつもりです。

今回はこの辺で。

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからもよろしくお願いします。

第十五問（前書き）

すいません、遅れました。

何度か書き直していたらいつの間にか3週間たっていました。

そしてggggです。

ではどうぞ。

第十五問

Side 恭介

翌日、今日は玲奈が珍しく寝坊したのか「すいません先に行ってください。」との事なので一人で登校している所に土屋、明久、秀吉の三人と合流した。そして今は昨日のCクラスの件の結果を聞いている。

恭介「やっぱり、玲奈の予想通りCクラスに根本が隠れていた訳か。」

明久「うん。協定違反をたてに奇襲するつもりだったみたいだけど……」

秀吉「雄二が長谷川先生が召喚許可を出さないようにしたのじゃ。」

康太「……おかげで無傷。」

どうやら最悪の事態は避けられたようだがこれじゃ……

恭介「こうなった以上、Cクラスも敵か……流石にBクラス戦後すぐにCクラスはキツイな。」

明久「一応、雄二は策があるって言ってたから大丈夫だと思うよ?」

どうやら策があるらしい、少し心配だが雄二が大丈夫というのなら大丈夫だろう。

そんな話をしながら教室へ入った、すると教壇の上に立っている雄二が話しかけてきた。

雄二「お、来たか……玲奈はどうした？」

恭介「珍しく寝坊したっぽい、少し遅れて来るよ。」

雄二「そうか。」

まあ、流石に二日連続で慣れない召喚獣の操作、しかも試召戦争ともなればかなりの疲労になるし、玲奈は家の家事を殆ど一人でやっているからな……。

雄二「なら、玲奈が来る前に昨日言っていた作戦を実行する。」

椛「作戦？ まだ開戦時刻前だよ？」

恭介「（いつの間に！！）おはよう椛、実はな……」

いつの間にか俺達の話聞いていた椛に昨日のCクラスの件を伝えた。そして雄二に作戦の内容を聞こうと雄二たちの方を振り返ると

恭介「それで雄二どんなS………まで何故、秀吉が女子の制服を着ているんだ！？ そしてこのカオスな状態はなんなんだ！？」

そこには女子の制服を着た秀吉とそれを激写している土屋、複雑な顔をしている明久、そして気持ち悪いくらい興奮しているクラスの殆どの男子がいた。

雄二「ああ、秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装っても

らうんだ。」

確かに秀吉と木下優子は双子で一卵性なんじゃないかと言うくらい似ているらしいが……

雄二「んじゃ、Cクラスに行くぞ。」

秀吉「うむ。」

明久「あ、僕も行くよ。」

雄二、明久と秀吉がCクラスへと向かって行った。

椀「秀吉君、大丈夫かな……」

恭介「まあ、大丈夫だろう。」

椀が少し心配そうに呟いたが俺はハッキリと大丈夫だと答えた何故なら。

恭介「秀吉の演技の才能は本物だ、アイツほどの演技力の持ち主は芸能界でも殆どいないと言われてるぐらいだからな。」

椀「ええー！？ 秀吉君ってそんなに凄いの！？」

まあ、実際に芸能事務所のお偉いさんが秀吉の演技を見た訳じゃないんだが俺と玲奈そして何より『アイツ』が太鼓判を押した人物だ、芸能界でも普通に通じるだろう。

恭介「まあな、何しろあのあ（秀吉）『静かにしなさい、この薄汚

い豚ども!!』……………ハイ？」

秀吉くゝん、なゝんて事言っちゃってんのかなゝ!? て言うか木下優子はそんなこと言う女なのか!? それとこのFクラスとCクラスって結構離れてるよね!? ならどうして……

康太「……………（ポカーン）」

OK把握した、お前の盗聴器だな土屋。

椛「だ、大丈夫なんだよね？」

恭介「だ、大丈夫だろう……………多分……………きっと……………うん。」

ガラガラガラ

玲奈「すいません遅れました……………どうしたんですか兄さんに椛ちゃん？」

瑞希「すいません遅れました……………どうしたんですか椛ちゃんに恭介君、顔が引きつってますよ?」

俺と椛が乾いた笑いを浮かべていた所に玲奈が姫路と一緒に登校してきた。

恭介「……………姫路に玲奈、世の中には知らない方が良い事もあるんだ……………なあ、椛」

椛「うん……………私もできれば知りたくなかったよ……………」

玲奈・瑞希「?？」

二人は訳が解らないという顔をしているが言わない方が良さだろう。

恭介「それより玲奈大丈夫か？ 目の下に隈が出来てるぞ？」

朝はあまり見えなかったが改めて玲奈の顔を見ると目の下に大きな隈が出来ていた。

玲奈「!!、大丈夫です。」

恭介「？ 無理はするなよ。」

俺がそう言うと同時に雄二達と先生が入ってきてHRとなった。

Side 玲奈

瑞希「玲奈ちゃん、ちょっといいですか。」

柊「玲奈ちゃん……グズッ」

丁度HR終了後、瑞希ちゃんが何か思いつめたように、柊ちゃんは半分泣きながらやって来ました。（勿論その時兄さんが柊ちゃんを心配そうにチラチラ見ながらそわそわしていたのは言うまでもありません。）

玲奈「二人ともどうしたんですか？ 柊ちゃんは少し落ち着いて深呼吸しましょう。」

とりあえず椀ちゃんを落ち着かせて話を聞きます。

瑞希「じ、実は……」

椀「これ……」

二人は私に1枚の手紙を見せましたそこに書いてあったのは……

玲奈「え!？」

『 姫路瑞希・立花 椀・水谷玲奈

お前ら三人の大事なものは預かった。返してほしければ今日の試召戦争に参加するな。

もし参加すれば立花と姫路の大事なものは学校中にばら撒く、立花の大事なものは粉々に壊す。

根本恭二』

玲奈「そ、そんな!？」

確かにあのお守りは昨日から見つかりません。この手紙が嘘の脅迫で無いなら私は……!!

玲奈「……確か椀ちゃんも瑞希ちゃんもラブレターを書いてましたよね。もしかして……」

瑞希「はい。そのラブレターを昨日失くしてしまって……」

椛「わ、私も失くしちゃったの……どうしよう玲奈ちゃん!？」

玲奈「……………相手の出方を待つしかありません。」

流石に兄さん達に余計な心配を掛けるわけにはいきません。唯でさえ危ない橋を渡るような試召戦争なのだから少しでも問題が生じればFクラスは負けてしまいます。

玲奈「……………椛ちゃんと瑞希ちゃんは極力参加しないようにしてください。」

瑞希「でもそれじゃあ試召戦争が!!」

玲奈「大丈夫です。私が瑞希ちゃんと椛ちゃんの分も働きます。」

椛「で、でもそれじゃあ玲奈ちゃんの大事なものが!!」

玲奈「……………私の部分は嘘の脅しですよ、私は何も取られていません。」

これが今、私が出来る最善の選択ですかね、瑞希ちゃんと椛ちゃんの大事なものは一目で解るような物ですが私のお守りは一目では解りません、私への脅迫はまだハッタリの可能性があります。

玲奈「とりあえず二人は戦争に極力参加しないことです。わかりましたね。」

瑞希「……はい。」

椛「……うん、わかった。」

S i d e 恭介

秀吉「ドアと壁をうまく使うんじゃない！ 戦線を拡大させるでないぞ！！」

秀吉の指示が飛ぶ。

あの後午前九時よりBクラス戦が開始され、俺達は昨日中断されたBクラス前という位置から進軍を開始した。

雄二曰く、『教室に敵を閉じ込めろ』とのこと。

なにを狙っているのかは丸わかりなのだがここで問題が生じた、明らかに姫路、椛、玲奈の三人の様子がおかしい。

なぜか姫路と椛が指示をする部隊まで玲奈が指示を出しており、姫路と椛は戦線に参加せず、ずっとソワソワしている。また体調が悪くなったのか？

Fモブ「左側出入口、押し戻されています！！」

Fモブ「古典の戦力が足りない！！ 援軍を頼む！！」

押し戻されているのは左側、古典の竹中先生のフィールド……文系

のBクラス相手に苦手科目はキツイな

恭介「柊、姫路、左側の掩護を！！」

柊・瑞希「「え！？ あ、あの…（玲奈）」私が行きます。試獣召喚！！」

泣きそうになっている二人に替わり玲奈が掩護に向かう。このままじゃ午後の作戦に支障が出る！！

明久「姫路さんに柊さん、どうかしたの」

恭介「ああ、二人とも体調でも悪いのか？」

明らかに様子がおかしい二人に声をかける。原因が解らない事には解決もできないからな。

瑞希「そ、その、なんでもないんですっ」

柊「だ、だ、大丈夫だよっ」

ブルブルと首を横に振る二人。だがあまりに大きな動きで何かあるのが見え見えだ。

明久「そうは見えないよ。何かあったなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし。」

恭介「そうだ。本当に何か困っているなら相談に乗るし、場合によっては雄二に話してクラス全体で解決するぞ？」

このFクラスなら絶対にこの二人のトラブルを我先にと解決したがるだろう。

柊・瑞希「ほ、本当になんでもないんです!!」

そうは言うが二人とも泣きそうな顔をしている。絶対に何かある。

Fモブ「右側の出入り口、教科が現国に変更されました!!」

恭介「数学教師はどうした!!」

Fモブ「Bクラス内に拉致された模様!」

ヤバイ、右側も文系科目に切り替えられた!!これじゃ俺は戦力にならない。

柊・瑞希「「わ、私が行きますっ!!」」

そう言って姫路と柊が戦線に加わろうと駆け出した。でも

玲奈・柊・瑞希「「あ……」」

急に二人と反対側で戦っていた玲奈はその動きを止めてうつむいてしまった。

なんだ。何かを見て急に動きが止まったみたいだが――――。

三人の視線を追ってみる。

その先には腕を組んでこちらを見下す卑怯者――――根本の姿があっ

た。

根本がどうかしたのか？

少し見づらいが目を凝らして見てみると――――

恭介・明久「「っ!!」」

そこには二つの封筒と一つのお守りを手にしている根本の姿があった。

二つの封筒は状況から考えて椀と姫路の物だろう、そしてあのお守りは――――

恭介「あの屑野郎っ!!」

玲奈と俺と『アイツ』の思い出のお守りだった。

明久「……………なるほどね。そういうことか。」

明久も気づいたらしく納得したという顔をした。昨日Fクラスを荒らした時に主力3人を無効化する算段が立っていたというわけか。だから一見俺達に有利な協定なんか持ち出してきたんだろう。

恭介「姫路、椀、玲奈」

椀・瑞希「は、はい……………」

玲奈「……………っ!!」

ポツリ

恭介「玲奈の体調が悪いみたいだから保健室に連れて行ってやってくれ。それとお前たちも具合が悪そうだから戦線から外れて玲奈の看病をしてくれ。」

椀・瑞希「……はい。」

玲奈「……ごめんなさい。」

謝るな、玲奈お前は頑張った。

恭介「じゃ、俺は用があるから行くな。……明久付いて来い。」

明久「うん。姫路さん、ちゃんと保健室で休んでてね。」

玲奈・瑞希・椀「「あ……………!!」」

3人は何か言いかけたが気にせず駆け出した。大事な用が出来たからな。

明久「面白いことしてくれるじゃないか、根本君。」

恭介「ああ、本当に面白いよ、愉快に素敵にキマツチマツタヨ!!」

明久の言葉について内に秘めていた殺意が沸き立つ。おっと自重自重、まあ殺ることは一つだ。

明久（あーあ、恭介完全に切れちゃってるよ。完全に死んだね根本君。）

あの野郎、ブ・チ・コ・ロ・シ確定だ!!

第十五問（後書き）

どうも作者です。

2週間と言っておきながら真に申し訳ございません。

少し調子が悪くさらに2度も書いていたデータが消えるという不幸。

次回は日曜日までに上げます。

そしてBクラス戦ラストです。根本が好きな方、先に謝っておきます、スイマセンでした。

では今回はこの辺で

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからもよろしく願います。

第十六問（前書き）

今回は期限どうりに……げ、月曜日になっている……だと……！！
（完成時間2011/10/17《月曜》0..02）

スイマセン遅れましたー！！

予想以上に長くなり最後はg d g d

ではどうぞー！！

第十六問

Side 恭介

恭介・明久「雄二!!」

雄二「うん? どうしたお前ら。脱走……では無いな。」

教室に飛び込むと、雄二が俺達と敵戦力を分析したノートを見ながらこれからの作戦を立てていた。

明久「話があるんだ。」

雄二「とりあえず聞こうか。」

いつもなら明久をからかい出す雄二だが俺と明久の真剣な様子を見て真剣な顔でこちらを向いた。

明久「根本君の着ている制服が欲しいんだ。」

雄二「……お前に何があったんだ?」

恭介「正確には根本の制服のポケットに入っている手紙2通とお守り1つが目当てだ。」

明久が変態にならないように一応フォローをする。

雄二「……なるほど。で、それだけか?」

恭介「それと姫路、玲奈、椛の三人を今回の戦線から外して欲しい。」

雄二「理由は？」

明久「理由は言えない。」

いずれ伝わってしまうだろうが、戦線が混乱しない様にするために教える訳にはいかない。

雄二「どうしても外しないとダメなのか？」

恭介「ああ、どうしてもだ。」

ハッキリ言って俺達の言っていることは自殺行為に等しい。

主戦力である3人を外すという事は戦力の8割が削がれるという事、この状態でBクラスに挑むのは、拳一つでイージス艦に戦いを挑むようなものだ。

明久・恭介「頼む、雄二!!」

俺と明久は雄二に深く頭を下げた。

身勝手な話だと思う。俺達の頼みは雄二に何のメリットも生まないしリスクは非常に大きい。普通ならこんな頼み受けないし俺もわざわざ頼まない。

雄二「……条件がある。」

明久「条件？」

恭介「……なんだ？」

雄二「主戦力の3人が担うはずだった役割をお前たちがやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させろ。」

だが、雄二は受けてくれた。流石代表、器がデカいな。

明久「もちろんやってみせる！！ 絶対に成功させるさ！！」

恭介「もちろんやるさ。………で何をすればいいんだ？」

雄二「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛けろ。教科は何でもいい。」

明久「皆のフォローは？」

雄二「ない。しかも、Bクラス入口は今の状態のままだ。」

明久「……難しい事を言ってくれるね。」

恭介「……なに、問題はない。」

明久「えっ!？」

雄二「……ほう、策でもあるのか？」

無理難題に近い雄二のリクエストに対する俺の発言に明久は驚き、雄二は悪戯な笑みを浮かべた。

恭介「要はBクラスの中で根本を親衛隊のいない丸裸な状態にして土屋に奇襲を掛けさせるんだろう？」

雄二「……気付いていたのか。」

恭介「ああ、折角の土屋をDクラス戦にも、このBクラス戦にも出してない時点で薄々な。」

雄二「……本当に鋭いなお前は。」

恭介「まあな。」

そう雄二が提案してきたのは根本の守りに隙を作るのと土屋の奇襲の準備の為の時間稼ぎだ。

明久「要するに時間稼ぎ？」

流石に明久も気づいたらしい。

雄二「ああ、そうだ。」

恭介「それを踏まえて雄二に聞きたい。」

雄二「……なんだ？」

恭介「奇襲の為に時間稼ぎをしろと言ったが……別に、根本を倒してしまっても構わないのだろうか？」

雄二「……ああ、倒せるならな。」

恭介「了解。明久行くぞ。」

明久「う、うん。」

雄二も俺が『本気』になっていることに気付いたのか冷や汗を掻きながら許可を出してくれた。おっとまた殺気が漏れていたか自重自重。

雄二（あゝ、根本も年貢の納め時だな。なんせあの『鬼刃』の怒りを買っちゃったんだからな。）

明久「でも流石に僕たち二人じゃ根本君までたどり着けないよ?」

恭介「まあ、そうなんだが……明久、今の総合得点は何点だ?」

明久「えっと……1800点くらいだけど。」

やっぱり指示通りCクラス上位ぐらいか……行けるな。

恭介「なら作戦は………」

明久「ほ、本当にやるの!?」

恭介「ああ、もちろんだ。負ける訳が無い。」

明久は俺の作戦を聞き、少しパニックになりながら聞き返してきた。

確かに少し不安が残る作戦なんだが……

恭介「…………俺達に今更『やらない』って選択肢は選べない。」

明久「！！……………そうだね。…………よし！！ やってやる！！」

明久は俺の言葉を聞き、さっきまでの弱気が嘘のようにヤル気に変わった。流石は明久だ、誰かの為になるとどこまでも『バカ』になれるからな、もちろん良い意味で。

恭介「よし、行く（秀吉）」「待つじゃ！！」……………どうした秀吉？」

俺が作戦を開始しようと明久とBクラスへ向かおうとした時、秀吉が息を切らしながらやって来た。

明久「どうしたの秀吉？ もしかしてまたBクラスが何か…………」

秀吉「違うのじゃ。戦線はなんとかこう着状態じゃ。」

恭介「……………ならなんの用だ？」

明久は分っていない様だが俺は秀吉が来た理由が大体わかった。

秀吉「…………おぬしらの作戦にワシも参加させてほしい！！」

Side 秀吉（回想）

秀吉「そろそろ不味いかのう!!」

先程から玲奈、姫路、椀の動きが悪くなってしまったせいか、戦線が少しずつ押され気味じゃ。このままでは押し返されてしまうのじゃ。

秀吉「……少し雄二に相談してみるかのう。」

状況を打開する為に雄二のもとへ向かっている途中に

Bモブ「根本も本当に外道だよな。」

Bモブ「ああ、全くだな。」

秀吉（なんじゃ?）

誰かがサボっておるのか、男子トイレの方から何やら話し声が聞こえる。どうやらBクラスの奴のようじゃ。

Bモブ「確かアレだろ、立花と姫路そして何よりあの水谷妹の弱みを握って動けなくさせたって。」

Bモブ「ああ、確か水谷妹はショックで泣いて保健室に行ったとか。」

秀吉（何じゃと!?!）

Bモブ「おかげでなんとか持ち直したが……」

Bモブ「ああ、何かな……」

なるほどのう、玲奈、姫路、椋の三人の動きがおかしかったのは根本のせいじゃったのか。

秀吉（ならば、こうしてはおれぬ。直ぐに雄二に相談を！！）

主戦力が動けなくなったことを一刻も早く雄二に伝えなければ、ワシ等Fクラスが負けてしまうのじゃ。

そしてFクラスの前まできた時

ガラガラガラ

恭介「了解。明久行くぞ。」

明久「う、うん。」

明久と恭介が出てきて職員室の方へと向かって行った。じゃが、今はそんなことはどうでもよい。

秀吉「雄二！！」

雄二「うん？　今度は秀吉か。どうした？」

秀吉「単刀直入に言うぞ、玲奈、姫路、椋の三人が動けなくなったのじゃ！！」

雄二「ああ、その話なら恭介と明久に聞いた。」

どうやらあの二人も知っておったのじゃな、だからFクラスに来て

たわけじゃな。

雄二「だから今、姫路たち3人を外して明久達に3人のやる予定だった役割をやってもらおう事になった。」

秀吉「……その役とは？」

雄二「フォロー無し状態で根本に攻撃を仕掛けるだ。」

秀吉「なっ!!！」

なんと無茶な作戦なのじゃ!!　まあ、玲奈たち3人なら可能だと思えてしまうのう。

秀吉「流石に無謀ではないか!？」

雄二「……俺もそう思ったがあいつ等は『やる』と言った。」

本当にあ奴らは無鉄砲もいいところなのじゃ、じゃがワシも……。

秀吉「……わしも行ってくるのじゃ!!！」

好きな人を泣かされて黙っておけるほど甘くは無いのじゃ!!

雄二「お、おい!!　……全くあいつ等は。」

S i d e 恭介

秀吉「……おぬしらの作戦にワシも参加させてほしい!!」

やっぱりか、秀吉が話しかけてきた時の雰囲気からこうなる事は読めていた。やっぱりこいつは玲奈のことが好きなんだな。いや、お兄さんは気付いてましたよ? 中学2年で初めて会った時から、ポーカーフェイスで誤魔化してるつもりでも微妙に隠しきれてないんだよね。

明久「僕としては戦力が増えてありがたいし、良いんだけど……」

恭介「……秀吉。」

秀吉「……なんじゃ?」

いつもなら直ぐOKを出すんだが今回は状況が状況だ、一応確認を取っておく。

恭介「覚悟はできてるのか?」

秀吉「もちろんじゃ!!」

ああ、本当に玲奈のことが好きなんだな。なら拒否をするわけにはいかない。

恭介「なら行くぞ。明久、秀吉。」

秀吉「うぬ!!」

明久「うん!!」

恭介「Fクラスの生徒は右側のドアに集中しろ!!」

Bクラス前に到着して直ぐにBクラスの中を見たとすると教室の左側の窓の近くに根本が立っているのが見えた。

Fモブ「え!?! それじゃ左側から敵が……」

恭介「……言い方を替える、邪魔だから左側に行け!!」

Fモブ「は、はいいい!!」

俺が殺気を放ちながら怒鳴るとFクラスの奴らが右側に寄った。

Bモブ「なんだかわからないがチャンスだ!!」

Bモブ「さっさとこいつを倒してF代表を倒しに行くぞ!!」

Bクラスの手の空いた数人が俺に向かってきたが……

恭介「……高橋先生お願いします。」

高橋先生「し、承認します。」

恭介「試獣召喚。」

Bモブ×5「試獣召ギアアアア！！」

『Fクラス 水谷恭介 VS Bクラス モブ×5
総合 3780点 VS DEAD』

集中力MAXの俺に敵うはずがない。

5人を倒したおかげで右側のドアに人は居なくなった。

根本「ちっ！！ 親衛隊来い！！」

危険を察知した根本が親衛隊10人に周りを囲ませた。

根本「残念だったな、流石の《代理教師》様もBクラス上位10人相手じゃ太刀打ちできないだろうよ！！」

根本が俺に向かって『俺の勝ちだ』と言わんばかりに声を上げるが。

恭介「残念なのはお前だ根本。」

根本「なんだ負け惜しみか？」

恭介「俺を教室にいれた時点でお前の勝ちは無いんだよ！！」

そう、俺が教室に入った時点でこの作戦は成功も等しい。

恭介「高橋先生、Bクラス親衛隊10人に総合科目で勝負を挑みます。」

高橋先生「承認します。」

根本「はぁ？　なに言ってるんだ此奴。」

恭介「試獣召喚。」

B親衛隊×10「試獣召喚！！」

『Fクラス　水谷恭介　VS　B親衛隊×10

総合　3780点　VS　平均2100点　』

B親衛隊「はっ！！　点数が良いからって調子乗ってんじゃねえぞ！！」

点数で圧倒的に勝っている為、全員で襲ってきたが……

恭介「七円環」

俺召喚獣の左腕の腕輪が光七枚の盾を生み出し相手の攻撃を止めた。

『Fクラス　水谷恭介　総合　3780点↓3480点』

根本・親衛隊「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

流石に攻撃を止められるとは思わなかったのか親衛隊と根本は驚きの声を上げる。

恭介「今の内だ明久、秀吉」

明久「わかった。Bクラス代表、根本恭二にFクラス吉井明久が…」

秀吉「同じく、Fクラス木下秀吉が」

明久・秀吉「総合科目で勝負を挑みます。試獣召喚!!」

根本「クソッ!! 試獣召喚!!」

『Fクラス 吉井明久・木下秀吉 VS 根本恭二

総合 1827点・1128点 VS 2325点』

B親衛隊「不味い!! さっさと倒して根本のフォローを……」

恭介「させると思うか?」

根本のもとへ行こうとした一人を盾で抑えながらも一つの腕輪を発動させる。

B親衛隊「不味い、奴のは確か弓矢を爆発させる腕輪だ!!」

親衛隊は螺旋矢を警戒してお互いの距離を離すが。

恭介「特殊腕輪発動『無限の製剣』!!」

腕輪を発動した途端、親衛隊を囲むように結界がはられ、結界の中は剣が大量に突き刺さった荒野と化した。

B親衛隊「な、なんだこの結界は!?!」

恭介「俺の腕輪の能力だよ。少し欠点があるがな。」

B親衛隊「おい点数を見ろ!!」

『 Fクラス 水谷恭介 VS B親衛隊×10
総合 3780点↓1点 VS 平均2100 』

B親衛隊「よくわからないがチャンスだ!! 全員で潰せ!!」

俺の点数が1点となったのをチャンスと思い全員で潰しにかかってくるが……

恭介「貴様らが挑むは無限の製剣、恐れずして掛かって来い!!
^{トレース}投影!!」

キーワードと同時に大量の剣が現れ

グサグサグサグサグサ……

相手の召喚獣全員を串刺しにした。

『 Fクラス 水谷恭介 VS B親衛隊×10
総合 1点 VS 平均0点 』

B親衛隊「ギャアア!!」

恭介「ふう、で根本の方は……」

Side 明久

『 Fクラス 吉井明久・木下秀吉 VS 根本恭二
総合 1827点・1128点 VS 2325点 』

根本「なに！！ 貴様ら本当にFクラスか！？」

明久「実は僕Bクラスレベルなんだ。」

秀吉「……まさか本当だったとはのう。」

僕の点数を見て根本君も秀吉も驚いている。でも秀吉には僕がBクラスレベルって教えておいたよね！？ なんで一緒に驚くの！？

根本「クソッ！！ Fクラスの癖に！！」

根本君が焦って攻撃してきたけどそんな単調な攻撃じゃ……

明久「当たらないよ。」

バシッ！！

『 Fクラス 吉井明久・木下秀吉 VS 根本恭二
総合 1827点・1128点 VS 2325点↓1
950点 』

根本「ならそっちの低い方から。」

そう言って秀吉めがけて攻撃するが……

秀吉「当たるものか!!」

『Fクラス 吉井明久・木下秀吉 VS 根本恭二

総合 1827点・1128点 VS 1950点↓1
750点 』

根本「クソォ!! なんで、なんで当たらないんだよ!!」

根本君は焦りに焦って突っ込んでくるが操作が雑すぎる。そんな攻撃じゃ僕たちは倒せないし何よりも……

秀吉「……よくも玲奈を……」

明久「……よくも姫路さんを……」

明久・秀吉「泣かせたな!! 許さない(許さんぞ)!!」

根本「ギャアアア!!」

『Fクラス 吉井明久・木下秀吉 VS 根本恭二

総合 1827点・1128点 VS 0点 』

こうして僕たちはBクラスに勝利した。

第十六問（後書き）

どうも作者です。

今回は期日どうりに行けた！……と思ったんですけどねえ……まさかの天辺越えorz

本当にスイマセンでした！！

今回はBクラス勝利のところまでになりました、最後少し無理があります（特に特殊腕輪なんか）多目に見てください。

作者はアー〇ヤーが大好きなんです！！

今回はこの辺で。

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからもよろしく願います。

次回は1週間後or2週間後です。

そして根本君が死にます（爆笑）《社会的に》

第十七問（前書き）

ide 恭介 （新校舎F4 とある教室）

（Bクラス決戦（恭介達の突撃） 30分前）

ガラガラガラ

恭介「失礼します。」

???「あら、いらっしやい。そして久しぶりね、恭介。」

恭介「はい、久しぶりですね先輩。それより授業うけずに『ここに居ていいんですか？』」

???「あら、あなたが試召戦争をしている間は全学年自習なのよ？ 知らなかった？ それに私が授業を受けなくても誰も文句を言わないわよ。」

恭介「あー、そうですか。」

???「それよりも仰々しく敬語なんて使わなくていいわよ。昔みたいに『由香里お姉ちゃん』って——」

恭介「いや、呼んだことないですからね!？」

由香里「うふふ、冗談よ。それで何か用があるんじゃないの？」

恭介「（あゝ、由香里さん相手だと調子狂うよな）実は先輩のコレクションを借りたいんですが、いいですか？」

由香里「あら、遂に目覚めたの？」

恭介「目覚めてません!!」

由香里「そう、残念……で何のために使うの？」

恭介「いや、一名の屑に社会的な死をプレゼントしてあげるんですよ。」

由香里「……却下よ。私のコレクションをそんなことに（恭介）「その屑のせいで玲奈が泣いたんですが？」構わないは好きなのを持つていきなさい。」

恭介「ありがとうございます。」

由香里「その代りその屑の名前を教えてください。」

恭介「2年Bクラス代表、根本恭二です。では失礼しました。（あゝ、これは流石の屑も再起不能になるかもな、まあ良いか）」

由香里「うふふ……根本恭二ね……どう料理してあげようかしら？」

第十七回

Side 恭介 (F3 Bクラス教室)

雄二「……まさか本当に根本を倒しちまうとわな……。」

Bクラス戦終結後、Bクラスにやって来た雄二が開口一番にそんなことを言った。まあ、たった3人で親衛隊10人と根本を倒せるとは思っただけならいい。その証拠に根本に攻撃を仕掛けて直ぐに部屋の空調が止まり根本を倒したと同時に土屋が大島先生を携えて窓から飛び込んできた。何とも手の込んだ奇襲をするもんだなと思ったよ、本当。ちなみに土屋は根本が戦死していることに驚き30秒ほど『ポカン……』と言う表情をした後「……………俺の順番が!!……………orz」と呟いていた。なんと言うかドンマイ!!

恭介「少し危険な賭けだったかな。」

秀吉「そうかのう??」

明久「確かに恭介のあの特殊腕輪が無かったら無理だったけど」

確かに俺の特殊腕輪を発動させれば一気に10人以上戦死させられるが……

恭介「発動条件が厳しいんだ。」

そうやって俺は説明を始めた。

恭介「大前提としてこの特殊腕輪はフィールドが総合科目限定で3

000点を超えてないと使えない。そしてあまりにも強すぎるから学園長が10人以上同時戦闘の時にしか使えなくしたんだ。」

そう、だから親衛隊が9人だったら腕輪を使うことが出来なかっただろう。

雄二「だが、多対一にはもってこいの腕輪だな。これなら……」

恭介「それともう一つの欠点は腕輪を使うと持ち点が1点になるとこ。一気に全員を相手して一人でも戦死しない奴がいると俺がピンチになる。」

そう例え4000点、5000点取ってようと腕輪をつかうと1点と中々リスクな腕輪である。

恭介「という訳で基本使うつもりはないからな雄二。」

雄二「ツチ わかったよ。」

さて腕輪の細かい説明が終わった所で……

雄二「さて、それじゃ嬉恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

恭介「ああ、楽しい、楽しいO☆HA☆NA☆SIの時間だぜ。屑野郎？」

根本（屑）「……………」

床に座り込んでいる屑はさっき俺に対して挑発してきた時の強気が

嘘のように大人しい。

雄二「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない。」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

雄二「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない。」

秀吉「うむ。確かに」

雄二「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうと思う。」

恭介「ああ、しかも殆どのBクラスの奴にデメリットは無い。」

雄二の言葉でうちのクラスはどこか納得したような表情になった。Dクラス戦でも言ったことだし、雄二の性格を理解し始めているのだろう。

根本（屑）「……………条件はなんだ。」

力なく屑が問う。

雄二「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん。」

根本（屑）「俺、だと？」

恭介「そうだ、お前だよ、屑野郎。」

雄二「ああ、お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな。」

恭介「ああ、うちのクラスの3人を脅迫しておいて、まさか唯で済むとは思ってないよな？」

凄い言い様だが、そう言われるだけのことをこの屑はやっている。だからこそ周りの人間は誰もフォローをしない。屑もそれはわかっているようだ。

雄二「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。」

すると雄二が取引を始めた。

雄二「Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意志と準備があるとだけ伝えるんだ。」

根本（屑）「……………それだけでいいのか？」

疑うような屑の視線。まさかそれだけで俺の怒りが静まる訳が無い。

雄二「ああ。Bクラス代表が（恭介）「ちょっと待て、雄二」ん？
なんだ、恭介？」

女子の制服を出そうとした雄二を止めて俺は衣装ケースからある服を取り出した。

恭介「屑がこいつを着て言った通り行動してくれたら見逃してやるよ。」

ハイレグ服に網タイツそしてウサミミ、バニースーツだ。これで根本の制服のポケットから目的の物を取り出せる。

根本（哀）「ば、馬鹿なことを言うな！ この俺がそんなふざけたことを……！！」

屑が慌てふためく。そりゃ嫌だよな。だから、やらせるんだよ。嫌がらないことやらせても意味ないじゃん。

Bモブ『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

Bモブ『任せて！ 必ずやらせるから！』

Bモブ『それだけで教室が守れるなら、やらない手はないな！！』

Bクラスの仲間たちからの暖かい声援。これを見るだけでこの屑が形だけの代表だったという事がわかってしまう。

雄二「んじゃ、決定だな。」

根本（哀）「くっ！ よ、寄るな！ 変態ぐふうっ！！」

Bモブ『とりあえず黙らせました。』

雄二「お、おう。ありがとう。」

一瞬で代表を見限って拳を打ち込んだBクラスの男子。流石の雄二

も変わり身の早さに驚いている。

雄二「では、着付けに移るとするか。明久、恭介、秀吉、任せたぞ。」

恭介・明久・秀吉「「了解（了解じゃ）」」

ぐったりと倒れている屑に近づき全裸にする。

男子、ましてや屑の服を脱がせ全裸にするなんてこの上ない苦痛だ、だが仕方がない。これが目的を達成するための手段だからな。

屑（哀）「う、うう……」

Bクラス男子の拳が浅かったようで屑が呻きだした。

恭介「オラァ!!」

ドスウ!!（ミシッ!!）

屑（哀）「がふっ!!」

念の為に本気の鳩尾をお見舞しておく。その後、屑を全裸にしバニースーツを着せていく。

恭介「よし。着せ終わった。後は化粧だが……」

B女子「私がやってあげるよ。」

Bクラスの女子の一人がそう提案してくれた。

明久「そう？　悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」

B女子「それは無理。土台が腐ってるから。」

なるほど確かにそうだな。

明久「じゃ、よろしく。」

恭介「あ、宣戦布告が終わったら、そこにある衣装ケースの中身をすべて屑に着させて写真撮っておいてくれ、もちろんそれを使って屑を脅すもよし、奴隷にするもよし。好きにやってくれて構わない、使い終わったら3回クリーニングに出して返してくれ、クリーニング代は屑の財布から出してくれ。もちろん残りの金は全部使って構わん。じゃ、改めてよろしく。」

因みに衣装ケースの中には他にメイド服を始め、チャイナドレス、婦警服、ナース服、女物の着物、ウエディングドレス、そして極め付きの白スク水が入っている（勿論、全部サイズ小さめ）。

Bモブ『sir!!　yes　sir!!』

後はBクラス連中に託し明久達と一緒にその場を離れた。

明久「……あった、あった。」

明久が屑の制服のポケットから2通の封筒と見覚えのあるお守りを取り出した。

恭介「……お守り壊れてないよな？」

明久「特に壊れてないみたいだよ。」

ふう、良かった。流石に死体を処理することになるのは面倒だもんな。

秀吉「それより、根本の服はどうするのじゃ？」

明久「ゴミ箱に捨てればいいんじゃない？」

恭介「甘いな明久、それじゃ屑が見つかるかもしれないだろ？ ゴミ収集車の中に直接ぶち込むんだよ。」

明久「なるほど、それだ!!」

秀吉「……お主ら容赦ないのう……まあ、それで良いが。」

俺達の意見に賛成している時点でお前も容赦ないよ、秀吉。

恭介「じゃ、落し物は持ち主に返さないとな……明久は姫路のを頼む。」

明久「うん。わかった。」

そう言って明久は先に姫路のところへ向かって行った。それにしても姫路のラブレターはどう考えても明久宛てだよな、このまま上手くいけばくっ付くかもな。

恭介「で、秀吉は玲奈の落し物を……」

恭介「そうか、柊は好きな人が居るのか……鬱だ……」

だって自分の好きな人に、好きな人が居るんだよ!! ヤバイよ、俺そいつ殺しちゃうよ!? えっ? そのラブレターが俺宛かもしれない? んな訳あるか!! 柊が俺に好意を寄せてるわけないだろ!! 第一いつ俺が柊に対してフラグをたてた!! (↑某、第一級フラグ建築士の不幸野郎ぐらい鈍感

柊「恭介君!!」

恭介「うおあ!?!」

いきなり大声で声を架けられ、不覚にも驚いてしまった。

恭介「な、なんだ、うお!?!」

振り向くとそこには涙目になって俺を見ている柊がいきなり抱き着いて来る光景があった。

恭介「えっ!?! ちょ!?!」

柊「ごめんなさい、私たちのために、恭介君達が無茶なくちゃいけないかったって……だから本当にごめんなさい。」

ちょ!! ヤバいって、マジで!! 普段は服であまり判らなかつたけど柊の結構大きめのdouble mountainが当たって理性がぶっ飛びそうなんですが!?!

恭介「も、柊、く、苦しい……」

柊「えっ？ あっ！！ ご、ごめんなさい！？」

柊は無意識の内に抱き着いてきたみたいで、顔を赤くしながら慌てて離れた。……………少し名残惜しいな……………ハッ！？ 危ない危ない。危うく変態の仲間入りをしてしまう所だった。

恭介「ま、まあ、根本^{クス}の件は気にするな。それと……………ほら。」

俺は多分、柊の物であるだろう封筒を取り出し渡した。

柊「あ！！ ありがとう……………（ど、どうしよう！？ 中身、見られちゃったかも！？）」

柊はさっきより少し顔を赤くして封筒を受け取った……………この反応はやっぱり……………

恭介「……………これってラブレターだよな？」

柊「な、中身、み、みみ見たの！？」

恭介「いや、それっぽい反応をするからつい……………」

クソッ！！ やっぱりラブレターだったか！！ ハアッ本当にどうするかな……………

柊「そ、そうなんだ……………（よかった……………流石にこんな形で思いが伝わっちゃうのは嫌だもんね。）」

恭介「で、その……………」

柊「う、うん、ラブレターだよ。」

うん。もう現実を受け入れよう。柊は好きな人に告白しようとラブレターを書いてました!!

恭介「……先輩か誰かに？」

柊「違うよ、クラスの人だよ。」

だ、誰だ!! こんな短期間に柊を落とした奴は!! 殺してくれ
る!! (↑自覚なし)

恭介「そ、そうか……いつ渡すんだ？」

柊「え、えっと……Aクラス戦が終わったら……」

よし、誰だか知らないがそいつの命日が決まったな……覚悟しろよ
…… (↑末期)

恭介「……そのラブレター、上手く行くと良いな。」

柊「!! う、うん!!」

そういった瞬間、柊は笑顔になった。本当にラブレターが成功して
ほしいんだな

恭介「じゃ、俺、帰るから。」

そう言い残しダッシュで家まで帰って枕を濡らして寝たのは言うま
でもない。

Side 玲奈

Bクラス戦終了後、私は重い足取りでFクラスへと向かっていた。
……私のせいでFクラス全員に迷惑をかけてしまった。しかも兄さん、秀吉君、明久君には無茶をさせてしまった……やっぱり私は『あの頃』と変わっていない、いつまでたっても兄さんのお荷物になっ
っている……

秀吉「大丈夫かの、玲奈？」

玲奈「あ、秀吉君ですか……」

いつの間にかFクラスの近くまで来たらしくドアの前に居た秀吉君が心配そうに私に声を掛けてきました。

秀吉「……本当に大丈夫かの？」

玲奈「大丈夫です。それより私のせいで無茶をさせて、しまっ
てすいませんでした。」

本当に私はどうしようもない人です。椀ちゃんと瑞希ちゃんを助けようとして、それが裏目に出て私自身も動けなくなって、兄さん達に無茶をさせて、挙句の果てに無茶をさせてしまったクラスメートに心配されるなんて……

秀吉「それは違うぞ、玲奈。」

玲奈「えっ!？」

秀吉君の言葉に顔を上げて見ると真剣な表情をした秀吉君が居ました。

秀吉「今回の事は相手が根本だと分かっていたにもかかわらず、きちんと対策が取れなかったワシらが悪いんじゃ。それに玲奈は被害者じゃ、自分を責めるでない。」

確かに私、瑞希ちゃん、椀ちゃんの三人は被害者で悪いのはBクラス代表の根本君です。だけど……

玲奈「で、でも私がもう少し注意しておけば……」

秀吉「それに、玲奈はよく頑張ったのじゃ。」

玲奈「えっ!？」

秀吉「姫路や椀を庇う為に一人で3人分の役割をしておって頑張っていないはずがなろう? だから……」

そう言って秀吉君は私に近づいてきて。

秀吉「これ以上、自分を責めないでほしいのじゃ。」

お守りを渡してくれました。

玲奈「こ、これ!!」

秀吉「根本のポケットから『たまたま』出てきたものじゃ、確か玲奈が持っていたものに似ていると思っての……のわあ!!」

玲奈「あ、ありがとうございます。秀吉君!」

秀吉「れ、玲奈、く、苦しいのじゃ（む、胸が当たってるのじゃ!?）」

玲奈「! ! ご、ごめんなさい! !」

お守りを取り返してくれたことが嬉しくてつい、秀吉君に抱き着いてしまいました。でもなんで秀吉君に抱き着いてしまったのでしょうか?

秀吉「だ、大丈夫なのじゃ。じ、じゃあワシは先に帰るのじゃ! !（や、柔らかかったのじゃ……ハッ! ! ワシは何を考えておるのじゃ! ?）」

玲奈「さ、さようなら（ドキドキドキ! !）」

そう言って秀吉君は帰ってしまいました。

秀吉君が言ってくれた通り、少し自分を責め過ぎていたのかもしれませんが。秀吉君が励ましてくれたおかげですね。

でもさっきから……

玲奈「秀吉君の事を考えるとなんでこんなにドキドキするのでしょうか?」

私はそんなことを考えながら一人家へと帰りました。

家に帰るとなぜか兄さんが枕を涙でぬらしながら寝ていました。

Side 根本(屑)

根本(屑) 「クソッ!! どうして俺がこんな目に!!」

俺は試召戦争に負けたせいでバニースーツでAクラスに戦争の準備があることを伝えに行かされ(その時は警察と呼ばれた)、その後なぜかBクラスの連中がノリノリで写真撮影が行われ(最終的に女物のスクール水着まで着させられた)挙句の果てに財布の自身は無くなり、制服もゴミ収集車に運ばれてしまった(今は唯一生き残ったトランク스와 シャツで誰にも見られない様に下校している)こうなったのも全て!!

根本(屑) 「水谷恭介!! アイツのせいだ!!」

絶対に後で復讐してやる!! 俺が受けた屈辱の3倍返しでな!!

??? 「あらあら、そこの変態さん。」

根本(哀) 「だ、誰だ!!」

誰にも見られず変えるためにわざわざ、暗くなってから下校を始めたためいきなり話しかけられたことに驚き、振り向くと。

由香里 「初めまして、柴田 由香里と申します。」

文月学園の制服を着た女子生徒が日傘をさしてこちらを向いていた。

根本（哀）「なんか用か？」

由香里「あら、先輩に向かって結構な口のきき方ね？　まあ、いいわ要件は一つ。」

そう言って俺に近づき

由香里「死になさい。」

根本（哀）「グハァ！！」

持っていた日傘で思いっきり殴られた。

根本（哀）「ま、まで！！　俺はアンタに何かした覚えはない！！」
身に覚えのあることならまだ判るが、初対面でいきなり殴られるようなことをした覚えはない。

由香里「ああ、理由？　それはね……」

すると女性の良い笑顔でこう言った。

由香里「私の可愛い妹分を泣かせたからよ。」

そして日傘でもう一発殴られ意識を失った。

由香里「あらあら、まだ終わらないわよ？　貴方の事は泣いて謝って許しを乞うても許さないわ。」

その後、根本は文月学園の大木の一つに吊るされている所を鉄人に発見され、病院に搬送後、全治1ヶ月との診断により1ヶ月入院したとか。

第十七問（後書き）

朝露 様、則次 火焰 様、D r. クロ様、感想ありがとうございます。

どうも作者です。

今回は根本君（哀）な回でしたww

予想より軽いなく、と思う方安心してください、彼には後2回は死んでもらいます（爆笑）

そして玲奈に完全なフラグが立ちましたどうもありがとうございます。

いや〜なんというか心理描写って難しいね。

そして新キャラの柴田 由香里！！（間違ってもBB…おっと誰か来たようだ…）

→に書いた通り某賢者様がモデルです。（一応この後某@マークモデルと某辻斬りの祖父モデルの人物を出す予定。）

では今回はこの辺で。

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからもよろしく願います

第十八問（前書き）

バカテストの珍解答が思いつきません（問題も） o r z

誰かアイディア下さい。

今回も少しggggです。

でわどうぞ。

第十八問

Side 恭介

学園のゴミ掃除（爆笑）の2日後の朝。点数補給も終わり、いよいよAクラス戦を残すのみとなった俺達は最後の作戦の説明を受けていた。

雄二「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったのことだ。感謝している。」

壇上にいる雄二が今まで見た事がないくらい素直に礼をした。なんだ、天変地異の前触れか？

明久「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

恭介「そうだ、なんか悪いものでも食ったのか？」

雄二「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ。」

確かに俺も『Fクラスがよくここまで来れたな』と思っていたりする。

雄二「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

Fモブ『おぉーっ!!』

Fモブ『そうだーっ!!』

Fモブ『勉強だけじゃねえんだーっ!!』

最後の勝負を前に、Fクラスは一つになった。

雄二「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着を付けたいと考えている。」

先日の昼休みに聞いていた俺は驚かなかったが、クラスの皆はかなり驚いていたようだ。

Fモブ『どういことだ?』

Fモブ『誰と誰が一騎討ちするんだ?』

Fモブ『それで本当に勝てるのか?』

雄二「落ち着いてくれ。それを今から説明する。」

雄二が机を叩いて皆を黙らせる。

雄二「やるのは当然、俺と翔子だ。」

Aクラス代表の霧島翔子とFクラス代表の坂本雄二。クラス間での戦争を代理で行うのだから、代表同士の一騎討ちは当然と言えば当然だ。

そこまでは本人から聞いた。

だが、雄二がどうやって霧島を倒そうとしているのかがイマイチ解らない。

相手は『現』学年主席であり、姫路や椋でもかなりの点数差をつけられている。玲奈を出さない限り勝率など皆無だ。

ハッキリ言ってしまうば――――

明久「馬鹿の雄二に勝てるわけなあっ!?（カンッ!）……ありがとう。恭介。」

明久の言葉に対して、雄二が投げつけたカッターナイフを木刀で弾き畳に突き刺した。

恭介「残念だが俺も雄二が勝てるとは思わない。あと、いい加減に明久に対しての暴力をやめろ。」

雄二「（チッ!）つまらん）まあ、二人の言うとうり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目もないかもしれない。」

認めるなら明久にカッターを投げる必要はないだろうが!! それに俺の注意はガン無視かこの野郎!!

雄二「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだろう? まともにもやりあえば俺達に勝ち目はなかったかもしれない。今回だっただけだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない。俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる。」

Fモブ全員『おおおーっ！！』

皆、雄二に全権を任せるようだが……どう考えてもうまく丸め込まれてるような気がする……まあいいか。負けたら雄二とO☆HA☆NA☆SIすればいいだけだし。

雄二「さて、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ。」

秀吉「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

雄二「日本史だ。」

ん？ 特に霧島が苦手な科目でもなく、雄二が得意な科目ではないな、なぜ日本史？

雄二「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣ではなく純粋な点数勝負とする。」

恭介「はぁ？ 小学生程度のレベルで満点あり？ それじゃあ同点になって延長戦で問題のランクを上げられて勝ち目が無くなるぞ？」

秀吉「恭介の言うとうりじゃ。」

雄二「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか。」

明久「？？？ それなら、霧島さんの集中力を乱す方法を知っているとか？」

雄二「いいや。アイツなら集中なんてしてなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう。」

まあ、小学生程度の問題を妨害を受けただけで満点を逃すような生徒はFクラスにもいないだろう。それより……

恭介「もったいぶってないで、さっさとタネ明かししろよ。雄二。」

クラスの皆も俺の言葉にうなずいた。

雄二「ああ、すまない。つい前置きが長くなった。」

かぶりを振って、雄二は改めて口を開いた。

雄二「その問題は——『大化の改新』」

明久「大化の改新？ 誰が何をしたのか説明しろ、とか？ そんなの小学生レベルで出てくるかな？」

簡単な説明なら中学受験で出てきそうだが普通の小学生レベルでは先ず出ないだろう。

雄二「いや、もっと単純な問題だ。」

秀吉「単純というと——何年に起きた、とかかのう？」

雄二「おっ。ビンゴだ秀吉。お前の言うとおり、その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ。」

……そんな基礎問題を霧島が間違えるのか？

雄二「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題、高校生なら誰も間違えない。」

……今、クラスの何人かが顔を背けたんだが……まあ、島田はしょうがないドイツ生まれの帰国子女だし、だが土屋と須川……！ お前らは解らなきゃダメだろ……！！

雄二「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室からおさらばって寸法だ。」

ん？ 待て、なぜ霧島のそんなピンポイントな弱点を雄二は知っているんだ？

瑞希「あの、坂本君。」

雄二「ん？ なんだ姫路。」

瑞希「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

雄二「ああ。アイツとは幼馴染だ。」

なるほど幼馴染か……と一人納得していると。

須川「総員、狙ええっ！」

俺、明久、土屋、秀吉以外の男子全員が一斉に戦闘態勢をとった。

雄二「なっ……？ なぜ須川の号令で皆が急に上履きを構える……？」

須川「黙れ、男の敵!! Aクラスの前にキサマを殺す!!」

雄二「俺が一体何をしたと!?!」

……多分、雄二が霧島と幼馴染なことにあらぬ妄想をして嫉妬が爆発したんだと思うよ、うん。最近こいつらの行動理由がわかってきた自分がとても悲しい。

須川「遺言はそれだけか? ……待つんだ君島。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込む。」

君島「了解です。須川会長。」

あゝ、殺すことは多分なさそうだから放っておくか……

瑞希「あの、吉井君。」

明久「ん? なに姫路さん?」

瑞希「吉井君は霧島さんみたいな人が好みなんですか?」

おっと、いつの間にやら姫路は核心じみた質問を明久にしたぞ。流石に明久も今度こそは——

明久「そりゃ、まあ。美人だし」

瑞希「……………」

明久「え? なんで泣きそうになって落ち込むの姫路さん!? 僕なにか気に障るようなこと言った!? それと美波、どうして君は

僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようとしているの!？
あわわ!？　そしてなんで姫路さんは教室の隅で体育座りして泣き
出してるの!？」

———気付いていないな、うん。明久に期待した俺が馬鹿だった
……。そして頑張れ姫路、超頑張れ。

柊「ねえ、恭介君。」

恭介「ん？　なんだ、柊？」

柊「恭介君はどうなの、翔子ちゃんみたいな人が好み？」

なぜ柊は俺にその質問をするんだ？　まあ答えるが……

恭介「うーん……タイプではないな、なんか話しかけづらい雰囲気
してるし。」

実は俺は霧島が苦手だったりする。なんか話かけづらいというか、
近寄りがたいというか……

柊「そ、そうなんだ……（よ、よかった）」

？？　なんで柊は安堵したような表情をするんだ？

秀吉「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆。」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉。流石冷静だな。まあ、本
人は玲奈しか興味ないんだろうがな。

玲奈「そうです。皆さん落ち着いてください。」

玲奈は秀吉が加わっていないことに安堵したような表情で秀吉に続いて皆を窘めた（勿論本人はなぜ自分が安堵したのか解っていない。）

秀吉「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？
男である雄二に興味があるとは思えんじやろう。むしろ、興味があるとすれば……」

玲奈「……秀吉君。なぜこっちを見るんですか？」

明久「……そうだね。」

瑞希「な、何ですか明久君？」

恭介「……あゝ、そう言えば……」

椛「ふえっ？　どうしたの恭介君？」

秀吉は玲奈を、明久は姫路を、俺は椛を、クラスの奴らは3人をまじまじと見つめた。

そういえば霧島が女子好きって噂が絶えない奴だったな。

雄二「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さいころ嘘を教えていたんだ。」

なるほど嘘をねえ……

雄二「アイツは一度教えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる。」

あゝ完全記憶ね、そりゃ頭も良いわけだよ。

雄二「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は――」

F全員『システムデスクだ!!』

優子「一騎打ち?」

雄二「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む。」

恒例の宣戦布告、今回は代表である雄二を筆頭に、明久、秀吉、土屋、俺、女子メンバーと首脳陣勢揃いでAクラスに乗り込んだ。

優子「うーん、何が狙いの?」

現在雄二と交渉しているのは秀吉の双子の姉である木下優子。本当に秀吉にそっくりだが本質が異なるみたいだな、言い表すなら彼女は『剛』、秀吉は『静』だな。そして今、猫被ってるな、うん。(↑恭介は人の本質を一目で見抜ける。

雄二「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ。」

木下優子が訝しむのも無理はない。下位クラスの俺達が一騎打ちで

学年トップの霧島に挑むこと自体不自然だ。当然裏があると考えら
だろう。

優子「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありが
たいけどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要も無いかな。」

雄二「賢明だな。」

良「そうどうりの返事、だが本番はこれからだ。」

雄二「ところでCクラス戦はどうだった？」

雄二が腕組みしながら訊く。

優子「時間は取られたけど、それだけだったよ？ 何の問題もなし。」

こちらの作戦に嵌り、昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。その勝
負は半日で決着がつき、Cクラスの設備が落とされた。

雄二「Bクラスとやりあう気はあるか？」

優子「Bクラスって……、昨日来ていたあの……」

雄二「ああ、アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はさ
れてないみたいだが、さてさてどうなることやら。」

優子「でもBクラスはFクラスに敗れて、三ヶ月間自ら宣戦布告は
できない筈よ？」

試召戦争の決まりの一つで三ヶ月間の準備期間というものがある。

戦争で負けたクラスは3ヶ月間宣戦布告が出来ない、そうでもしなきゃ1年間戦争が無い日が無い泥沼状態になるからな。

恭介「残念ながらアレ、表向きは『和平交渉にて終結』って事になってるんだよ。もちろんDクラスもね。」

実際物凄く反則じみたわざだが。

優子「……それって脅迫？」

雄二「人聞きが悪い。ただのお願いだよ。」

なんだか雄二が根本^{クラス}に見えてきた。

優子「うーん……わかったよ。その提案受けるよ。」

明久「え？ 本当？」

優子「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、『各クラス代表7人で一騎打ちをして4勝した方の勝ち』でどう？」

恭介「なるほど。こっちから姫路、椋、玲奈のいずれかの一人が出ることを警戒してるんだな？」

優子「うん。たぶん大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さん達が、特に貴方の妹さんが絶対調だったら勝ち目がないからね。」

……ほう、玲奈も軽く見られたもんだな。まあ、玲奈も俺と同じで『本気』でこの学校のテストを受けたことは無いからな。本気を出したら絶対調の霧島でも勝てないだろうな。

雄二「安心してくれ。うちからは俺が出る。」

優子「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないよ。」

まあ、これは競争じゃなくて戦争だしな。

雄二「そうか。それなら、その条件を吞んでも良い。ただし、勝負内容は7つ中4つこちらで決めさせてもらう。」

優子「うーん……まあ、4つなら……」

翔子「……………待って。」

明久「うわっ!!」

どうやら相手方の代表のご登場だ。

優子「代表、何か不満があるの？」

翔子「……違う。だけど一つ条件追加……負けた方は何でも一つ言うことを聞く。」

……なんて、えげつない条件を追加するんだこの学年主席は……

雄二「交渉成立だな。」

明久「ゆ、雄二！ 何を勝手に！ まだ姫路さん達が承諾してないのに！」

いや、流石に勝って姫路たちの中の誰かに『……私と付き合って。』
とはいわないだろ。

雄二「心配すんな。絶対に姫路達に迷惑はかけない。」

翔子「……勝負はいつ？」

雄二「そうだな。十時からでいいか？」

翔子「……わかった。」

そう言うのと霧島は木下姉を連れて教室の奥に戻って行った。

雄二「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ。」

明久「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね。」

交渉終了。ついにAクラス戦の幕が開けた。

第十八問（後書き）

どうも作者です。

ついにAクラス戦まで来ました!!

……長かったな……

そして前書きでも書いたようにバカテストの問題が中々思いつきませんorz

誰かアイディアを下さい。お願いします。

今回はこの辺で。

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからもよろしく願います。

第十九問（前書き）

今回からAクラス戦です!!

そしてオリキャラ登場。

今回は短め&ggggです。

ではどうぞ。

第十九問

Side 恭介

高橋先生「では、両名共準備は良いですか？」

一騎討ちではAクラス担任で学年主任でもある高橋先生が立会人を務める。

雄二「ああ。」

翔子「……………問題無い」

一騎討ちの会場は当然Aクラス。Fクラスじゃ狭いしボロボロなので何かの拍子に壊れるかもしれないからな。

高橋先生「それでは一人目の方、どうぞ。」

??? 「俺が行くぜ。」

そう言って向こうから現れたのは—————

恭介・玲奈 「「こ、孝介（君）！？」」

—————俺と玲奈の従兄弟である寺島孝介てらじま こうすけが出てきた。

孝介「お、恭介に玲奈！！ 久しぶりだな！！ てっきりお前らはAクラスに居ると思ったんだが……………まあ、これはこれで戦争で戦えるから良いな。」

頭脳明晰で運動神経も抜群、普通なら孝介がAクラスから出てきた事に驚かないんだが――――

恭介「皐月高校に行ってる筈のお前がなんでいるんだよ!？」

こいつは俺の親父の実家から、近くの皐月高校（進学校）に進学して一学年、学年次席の成績を修めたって春休みに自慢してきたばかりだったりする。

孝介「あっち（皐月高校）はガリ勉君ばかりでつまんないんだよね、だからこっちに転入してきたんだよ。ついこの前。」

恭介「何と言うかまあ……」

玲奈「孝介君らしいと言えば孝介君らしいですね。」

俺と玲奈が孝介の破天荒ぶりに苦笑する。

孝介「まあな!!」

エッヘンと胸を張りドヤ顔をしている孝介には悪いが、褒めてない。ハッキリ言って呆れてるんだよ。

恭介「ん？ 孝介が居るという事は……」

????「俺も居るよ。」

玲奈「あ、孝明君。……何と言うかご愁傷様です。」

恭介「相変わらず大変だな孝明。」

孝明「……もう慣れたよ。いつもの事だし。それに俺がいないと孝介（愚弟）は何をしでかすかわからないしな。」

孝介「酷い言いようだなおい！！」

そんな孝介の叫びにジト目を向けているのは寺島孝明^{てらじまたかあき}。孝介の双子の兄で同じく俺と玲奈の従兄弟。孝介とは反対の性格で苦勞人である。（主に孝介の尻拭いの為に）

高橋先生「あの、そろそろ始めたいんですけど。」

話し込んでしまったせいで高橋先生におこられてしまった。

恭介「ああ、すいません。後で色々聞くからな孝介。」

孝介「へいへい。んで俺の相手は誰だ？」

雄二「……恭介。寺島兄弟の実力はどんなもんだ？」

恭介「さっきも言ったが孝介は（あれでも）あの皐月高校で1年の学年次席だった。孝明に関しては学年主席だ。」

雄二「なっ！！ まずいな……」

雄二は予想外の相手に焦っているが。

恭介「大丈夫だ、孝明の方は俺が倒す。んで、孝介の方は……樫、頼んだぞ。」

椛「ふえ!! わ、私!？」

恭介「ああ。孝介はああ見えてバランス型で苦手科目もないが得意科目も無い。唯一英語が少しできるが椛の英語の点数と比べれば。」

玲奈「そうですね。それに孝介君は自分から英語を選択しますよ。絶対」

俺と玲奈が自信を持って言い切る。

雄二「……なんで言い切れるんだ?」

恭介「まあ、見てろって。こちらからは立花 椛が出ます。」

高橋先生「わかりました。科目はどうしましょう。」

孝介「えっと、立花だったっけ? お前の得意科目は?」

椛「えっと……英語です。」

孝介「よし。じゃあ英語で勝負だ!!」

A & F『えっ!!』

予想通り孝介が選択した。と言うか椛も素直に答えるなよ。これ一応『戦争』だぜ?

雄二「なんでアイツは自分から椛の得意科目を選んだんだ!？」

恭介「……アイツは根っからの戦闘狂で相手の得意分野で大暴れるのが好きなんだよ。」

そのせいで毎年3回はアイツと剣術の試合をする羽目になっている。

柊「あ、あの本当に良いんですか？」

孝介「ああ、俺も苦手な科目じゃないし、それにこっちの方が……展開的に燃える!!」

そして重度の廚二病だ、うん。

高橋先生「では、始めてください。」

孝介「確か……試獣召喚!!」

そう言う孝介を小さくし、ゴツイ西洋の鎧を着てデカイハンマーを持った召喚獣が出てきた。

柊「私も、試獣召喚!!」

柊も召喚獣を出し少し遅れて二人の点数が表示された。

『 Fクラス	立花	柊	V S	Aクラス	寺島孝介
英語 (W)	560点	V S	460点	』	

坂本「よし行ける!!」

恭介「まあ、勝てるかな。」

点数差は100点これなら間違いなく椛の方が有利だ。

孝介「560点って……スゲーな。でも、負けが決まった訳では無い!!」

そう言うとき孝介の召喚獣が椛の召喚獣に向けてハンマーを振るった。

椛「そんなゆっくりな攻撃じゃ当たらないよ? それ!!」

対する椛の召喚獣は余裕で孝介の召喚獣の攻撃を避け片手剣で一太刀を浴びせる。

孝介「くっ!! 意外と操作が難しいなっ!!」

『Fクラス 立花 椛 VS Aクラス 寺島孝介
英語(W) 560点 VS 440点』

椛「まだまだ行くよ、えいっ!! やあっ!! とりゃっ!!」

孝介「なっ!! よっ!! うおらっ!! せいっ!!」

孝介の召喚獣は椛の召喚獣の怒涛の攻撃を危なげによけ反撃のチャンスをつかっている。

孝介「!! そこだ!!」

椛「きゃ!?!」

『Fクラス 立花 椛 VS Aクラス 寺島孝介』

英語(W) 540点 VS 440点』

孝介「やっと慣れてきたぜ。ここからが本番だ!!」

椛「うう、それなら『斬撃』!!」

椛がキーワードを唱えると椛の召喚獣の腕輪が光り、幅の広い斬撃が孝介の召喚獣に向かって放たれた。

孝介「なっ!?! うおあ!!」

『Fクラス 立花 椛 VS Aクラス 寺島孝介
英語(W) 490点 VS 370点』

しかしあまり速くない斬撃の為ギリギリ避けられてしまった。

恭介「やっぱり、速度が無いから当たらないな。」

玲奈「そうですね。何人かまとめて相手する場合は有効な腕輪ですが、1対1の場合はあまり効果が出ません。」

椛「うう、もう少し速さがあれば……」

孝介「あ、あぶねえ……直撃してたら危なかったかもしれないな。
(しかし掠っただけで70点近く持っていかれたな)」

孝介も少しずつ慣れてきたみたいだが、流石にこの点差はひっくりかえせないだろう。

孝介「……こうなったら俺も腕輪を使ってみるか……行くぞ『鉄槌』

「!!」

孝介がキーワードを唱えると召喚獣が持っているハンマーを振り上げた、そしてそのハンマーがみるみる大きくなり召喚獣の10〜15倍近くの大きさになった。

椀「ええ!! お、大きすぎだよ!?!」

恭介「マズイ、椀!! 距離を取れ!!」

孝介「今更遅いぜ!! 行け!! 『ゴルディオンハンマー』!!」

うおおおい!! そのネタ止めろ!!

椀「きゃっ!?!」

『Fクラス 立花 椀 VS Aクラス 寺島孝介
英語(W) 0点 VS 20点』

椀「う、うそ……」

孝介「ふう、危なかった。いい勝負だったぜ、立花!!」

高橋先生「勝者 Aクラス 寺島孝介。」

孝介のまさかの一撃で一回戦目はAクラスの勝利となった。

第十九問（後書き）

どうも作者です。

実はこのまま2回戦目を書いてもよかったのですが、2回戦目は少し長くなるのと個人的にしっかり書きたかったため急遽、第十九問を短くしました。

そして書いてみたらgdgd過ぎてちよつとまずいかもですorz

ここで次回予告と注意警報。

先に謝っておきます優子ファンの方々……誠に申し訳ございません！！

実は秀×玲フラグを純金製↓オリハルコン製にする為に犧S（訂正）悪役になってもらいます。

なので「優子がボコボコにされるのは許せない！！」な方や「こんな優子は俺の知っている優子じゃない！！」になるかもしれない方は閲覧注意です。

今回はこの辺で。

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからよろしく願います。

第二十問（前書き）

投稿が遅れまして誠に申し訳ございません。

納得いくまで何度も書き直していたら2週間たってしまいました。

r z

それでも多少gdgdです。

そして何より優子好きのみなさん……誠に申し訳ございません!!

本作品の優子は原作より性格がきつくなっております。さらに今回は秀吉×玲奈フラグオリハルコン化の為に犠牲（訂正）悪役になっ
てもらいます

なので不快に思う方は閲覧を注意してください。

ではどうぞ。

第二十問

Side 恭介

高橋先生「では、次の方どうぞ」

優子「アタシが行くよっ。」

Aクラスからは秀吉の姉、木下優子。

対するこちらは

秀吉「ワシがやろう。」

その弟の木下秀吉だ。

姉弟だから木下優子の苦手科目や集中力の乱し方、弱点を知っているはずだ。という雄二の作戦なのだが……それは木下優子にも言えることだよな。

優子「ところでさ、秀吉」

秀吉「なんじゃ？ 姉上。」

優子「Cクラスの小山さんって知ってる？」

……おっと、尋常じゃない殺気を感じるぞ。

秀吉「はて、誰じゃ？」

木下優子の『イイ』笑顔にすまし顔で返している秀吉だが、脚がガクガク震えているのは気のせいかな？

優子「じゃーいいや、その代り、ちょっとこっちに来てくれる？」

秀吉「うん？　ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃない姉上？」

秀吉は木下優子に半ば強引に腕をつかまれ廊下に連れて行かれた、その秀吉の顔はなにかとてつもない諦めの表情と哀愁が漂っていた。

恭介（……………BGMはド○ドナだな……………）

俺は連れて行かれる秀吉が仔牛がトラックに乗せられ精肉工場まで運ばれていく姿と重なった。

秀吉『姉上、勝負は———どうしてワシの腕を掴む？』

優子『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？　どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなあ？』

秀吉『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して———あ、姉上っ！　ちがっ……………！　その関節はそっちには曲がらなっ……………！』

玲奈「……………Cクラスを抑える作戦は秀吉君にAクラスの姉を装わせてAクラスに敵意を向けさせる作戦だったんですか？　雄二君？」

雄二「いや、そ、それわだな……」

あゝ、そう言えば秀吉のいきなりの罵倒が衝撃過ぎて玲奈に話してなかったなゝ

好きな人（無意識だが）を他人になりすまして罵倒させた挙句ばれた時の対策を考えず結果、秀吉が木下優子に折檻されている事態に玲奈様はお怒りの様で、雄二の胸倉を掴み最高に『イイ』笑顔で問い詰めています。

優子『全くアンタは、演劇部なんて『くだらない』部活にばかりうつつを抜かしているから勉強もまともにできずにFクラスに入るのよ!!』

—————プツン—————

教室の外なので聞きづらい言葉だったが間違いなく俺、孝明、孝介の顔色が変わり恐る恐る玲奈を見た。すると

雄二「お、おい、どうした玲奈いきなり黙っ（玲奈）」「木下さんの相手を秀吉君の代わりに私がしてもいいですか?」「いやそれじゃあ作戦に支障が（玲奈）」「イ イ デ ス ヨ ネ ?」「……どうぞ戦ってください。」

どうやらちゃんと聞こえてしまったようだ。残念だなゝ玲奈が聞き逃していたら俺がブチノメシタノニ。

孝明「落ち着け、恭介。お前までブチ切れたら収拾が付かなくなる。」

孝介「兄貴も落ち着け爪が手のひらに食い込んで血が出てるぞ？」

どうやら孝介以外の3人、特に玲奈は今の言葉でブチ切れ寸前までいったようだ。そりゃそうだ秀吉の夢をバカにすることは『アイツ』と孝明の好きな人の夢をバカにすることになる。

扉が開き木下優子が戻ってくる。

優子「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」

玲奈「私が出ます。」

木下優子の要求に二つ返事で玲奈が返し木下優子の方へ向かって行く。

恭介「……玲奈。」

玲奈「なんですか兄さん？」

戦いに行く前の玲奈を呼び止める。人の夢をバカにするやつが嫌いだがそれと同じくらい

恭介「……あの勘違い野郎をプライドもろともブチノメシテ来い。」

『勉強出来る奴が偉い』『勉強できない奴はクズ』と思っている奴も大っ嫌いなんだ。

玲奈「言われなくてもそのつもりです。」

玲奈は俺にそういうと颯爽と木下優子の前に行った。

優子「あら、アタシの相手は水谷さんになったのね。よろしくね、元学年主席さん。」

玲奈「ええ。よろしくお願いします。」

木下優子は明らかに玲奈を小馬鹿にしたように話し出した。

優子「それにしても残念ね、途中退室で0点扱いにならないければFクラスなんかに行かなくて済んだのに、あなたなら調子が悪くてもAクラスから落ちることなかったでしょ？」

玲奈「確かにそうかもしれませんが、その話この試召戦争に何か関係あるんですか？」

優子「ええ、関係ないわよ。ただあなたもFクラスの一員となって戦争に参加しているのが不思議でね。」

どうやら言葉を濁しているが木下優子の言っていることを簡単に訳すと『学年主席も落ちるところまで落ちたのね。本当はそんなに頭良くないんじゃないの?』ってところかな。

玲奈「私はFクラスの生徒ですよ? 戦争に参加するのは当たり前前です。」

優子「……そう。」

どうやら俺の考えは正しかったようで木下優子の態度が、さっきの小馬鹿にした態度から見下すような態度へと変わった。

優子「ならいいわ、さっさと終わらせましょう。」

玲奈「そうですね。すぐに終わらせましょう。」

玲奈の言葉に木下優子は眉を潜ませて少しイライラした様子で

優子「あら、随分余裕ね。あなたは知らないかもしれないけどアタシは今回の振り分けテストでは学年5位よ？ Fクラスに行ったあなたが勝てると思ってるの？」

玲奈「勝てるものにも、私は振り分け試験を途中退室して0点になっただけで私の成績が落ちた訳ではないんですよ？」

玲奈は木下優子の言葉をもろともせず言い返すと木下優子は顔を歪ませた。

優子「……ふん。じゃあ、アタシがあなたの苦手分野でアタシの得意分野の生物のフィールドを選んでもいいのね？」

玲奈「問題ありません。……それと一つ賭けをしませんか？」

優子「……なにかしら。」

玲奈「簡単な賭けです。『勝った方が負けた方の言うことを聞く』というシンプルな賭け。」

優子「いいわよ。でも、アタシが勝ったらあなたはとても恥ずかしい目に遭うことになるわよ？」

玲奈「別にいいですよ。私が負けることなんてありえませんか。」

玲奈のこのひと言が相当頭にきたのか木下優子が声を荒げて

優子「そこまで言うなら二度と学園に来れなくなる様な恥ずかしいセリフを全校生徒の前で言わせてあげるわ！！ 高橋先生、Fクラス水谷玲奈に生物で勝負を挑みます。」

高橋先生「承認します。」

玲奈・優子「「試獣召喚！！」」

高橋先生がフィールドを展開するとそこには玲奈のお馴染みの召喚獣と木下優子をデフォルメし、デカイランスを持った召喚獣が現れた。

『Fクラス 水谷玲奈 VS Aクラス 木下優子
生物 283点 VS 378点』

優子「残念、もうちょっと高い点数を期待してたんだけど、流石にこれじゃ圧勝かな？」

玲奈と木下優子の点差は約100点、確かに玲奈に勝ち目が無いように見える、だが――――

優子「じゃ、さっさと勝って恥ずかしいセリフを言ってもらおうか
s（玲奈）「遅い！！」 なっ！！」

点数差に油断した一瞬の隙を突き玲奈の召喚獣は木下優子の召喚獣の片腕を切り落とした。

『 Fクラス 水谷玲奈 VS Aクラス 木下優子
生物 283点 VS 324点 』

玲奈「まだです!!」

優子「くっ!!」

玲奈の召喚獣は腕を切り落とされ完全に出遅れた木下優子の召喚獣の首を刎ねようとするがギリギリのところまで避けられてしまった。

優子「このっ!!」

玲奈「……っ!!」

木下優子の召喚獣はすかさず距離を取り、ランスで攻撃を仕掛けてくるが片腕で満足に操れないのか玲奈の召喚獣にあたることは無く、ジワジワと点数を減らされていった。

『 Fクラス 水谷玲奈 VS Aクラス 木下優子
生物 283点 VS 107点 』

優子「なんで!! なんで当たらないのよ!!」

玲奈「……あなたの攻撃には無駄が多すぎます、一つ一つの動作が大きすぎて攻撃パターンも丸解りです。それに相手を過小評価し過ぎです。もう少し頭の切れる相手だと思ったんですが……残念ながらチェックメイトです。」

玲奈が木下優子にそう言うのと今度こそ木下優子の召喚獣の首を刎た。

『 Fクラス 水谷玲奈 VS Aクラス 木下優子
生物 283点 VS 0点 』

高橋先生「勝者Fクラス。」

その瞬間木下優子はヘタリとその場に座り込み信じられないという顔をして呟いた

優子「う、嘘……アタシの負け！？……」

玲奈「ハイ。あなたの負けです。約束通り言うことを聞いてもらいます。」

玲奈は木下優子を見下ろしながら敗者への命令を下した。

玲奈「秀吉君に謝って下さい、演劇を……彼の夢を『くだらない』と言った事を……」

玲奈が命令を言った瞬間、木下優子だけではなくこの場に居た全員
の体がビクツと震え驚いたように玲奈の方を見た、それもそうだ玲
奈は人前でこんなに感情を露わにして怒鳴ったことは一度もなかつ
たからだ。

優子「い、嫌よ！！ 第一、秀吉がアタシのフリをしてCクラスを
罵倒したのが悪いんじゃない！！ それに部活ばかりやって勉強
が疎かになっているのは事実よ。」

玲奈「そんな秀吉君の自由じゃないですか、彼にとって演劇は勉
強よりも重要で自分が進みたい道なんですから。それに罵倒したの

は秀吉君の意志ではなくFクラス代表が秀吉君にそうさてたんです。彼の責任ではないです。」

優子「それだと、アタシまで馬鹿だと思われちゃうのよ。残念ながらアタシと秀吉は双子で二卵性なのに瓜二つだからね、秀吉のせいでアタシの評判に傷がついちゃうの解る？」

木下優子が吐き捨てるように言ったこの一言に玲奈は我慢の限界が来たようだ。

玲奈「……ざ……な。」

優子「なによ。」

玲奈「ふざけるな!!」

パァーン!!

優子「えっ……」

玲奈は木下優子に対して怒鳴りつけ彼女の頬をビンタし胸倉を掴んだ。

玲奈「そんなつまらない理由で人の夢を『くだらない』なんて言わないで!! 貴方にはわかるでしょ!! 秀吉君は自分の夢を決して生半可な気持ちで目指しているわけじゃないって!!」

優子「知らないわよ!! 第一あなたに何が解るのよ!??」

玲奈「解るわよ!! 秀吉君が本気で夢を目指していて必死に努力

をしていることも!!」

玲奈は更に胸倉を掴む手に力を入れた。

玲奈「私は秀吉君みたいに本気で夢を叶えようと必死で努力をしていた人を知ってる。でもその人は夢を掴むまさにその直前にすべてを諦めなければいけなくなった。だけどその人は諦めなかった。

必死に足掻いて夢を掴もうとした!! だから私は許せない、貴方みたいに自分の欲の為に他人の夢を『くだらない』という人を……彼女を……私の大切な親友の努力を無駄という人を!!」

玲奈は完全に切れて暴走状態になっている、早く止めないと!!

恭介「落ち着け玲奈!!」

俺は木下優子の胸倉を掴んでいる玲奈の腕を掴み羽交い絞めにした。

玲奈「離してください!! 兄さん!! こいつは!! こいつは!!」

恭介「お前が木下優子を責めたい気持ちにはわかる。だけどそんなことをしても誰も喜ばない!! 秀吉も!! ……………未来も……………」

……………!!」

玲奈「……………っ!! ………………そう……………ですよ……………」

俺の言葉に玲奈は冷静さを取り戻し、木下優子に向けて頭を下げた。

玲奈「木下さん、いきなり叩いたりしてすみませんでした。ですが私はこの事をそう簡単に許せそうにありません。」

そう言った玲奈は雄二の方へ向かい

玲奈「少し気分が悪くなったので保健室に行きます。」

雄二「あ、ああ。わかった。」

そう言って保健室へと向かった。

恭介「木下優子、玲奈がいきなり取り乱して悪かった。だが秀吉の夢をバカにしたことは俺も許せない、ちゃんと秀吉に謝れ。いいな。」

優子「……………わかったわ。」

こうして第二戦は何とも言えない空気で幕を閉じた。

第二十問（後書き）

朝露様、感想どうもありがとうございました。

どうも作者です。

今回は納得がいくまで何度も書いたせいで気付けば2週間過ぎていました。本当文才が欲しいです。

さてさて今回は玲奈が大暴走しました、彼女は一種のトラウマを抱えています。なので周りの人の『夢』に対する思いが尋常じゃありません。

……って思い返すと結構伏線を盛り込んでいるんですね。全部回収できなくなるような気が……………（^| ^;）

次回は恭介vs孝明です。

できるだけ早く書き上げたいと思います。

今回はこの辺で。

質問、感想、意見、誤字、脱字、評価、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからもよろしく願います。

第二十二問（前書き）

土曜日授業↓日曜模試↓月曜代休だけど用事で一日中外出の為、投稿が遅れてしまいました。

……戦闘シーンって本当に難しいですね（・ω・）

ではどうぞ。

第二十二問

Side 恭介

高橋先生「では三人目の方、どうぞ。」

玲奈の行動により何とも言えない重い空気になってしまった教室に高橋先生の声が響いた。

……高橋先生は一応、立会人なんだからさっきの玲奈の行動を止める義務があったような気がするが……しかも、何事もなかったように三戦目を行おうとしてるしさ……。

孝明「……えっと、Aクラスからは俺が行きます。」

若干、『これ、再開して良いの?』と困惑しながら孝明がAクラスの軍団の中から出てきた。

うん、俺は再開しちゃダメなような気がする。

雄二「あゝ、恭介。行ってこい。」

恭介「あ、ああ。俺が相手だ孝明!!」

この空気を壊そうと、少し大きめの声で名乗りを上げてみましたが

孝明「あ、ああ。よろしく。」

A & F 『――シーン――』

――もう負けでいいや……。

高橋先生「では、勝負する科目を決めてください。」

もうこうなったら自棄だ!! テンションマックスで戦ってやる。

恭介「総合科目で!!」

孝明「……恭介。とりあえず落ち着け。勝負にならなくなるから。」

恭介「……あ……うん。そうだね。なんかゴメン。」

孝明の言葉でなんとか冷静に戻れた。

……で、さっきの行動を振り返ると……

恭介（うわあああああ!!!! 凄く恥ずかしいいいいい!!!!）

完全に黒歴史です。ハイ。

高橋先生「総合科目ですね。わかりました、承認します。」

孝明・恭介『試獣召喚!!』

俺と孝明が宣言すると幾何学的な模様が足元に現れ、俺のいつもの召喚獣と青いジーパンに白いポロシャツ、そして手には召喚獣の2倍の大きさはあるであろう大剣を持った孝明の召喚獣が現れた。

『 Fクラス 水谷恭介 VS Aクラス 寺島 孝明
総合 4580点 VS 総合4882点 』

A&F 『な、なに〜!!!』

おっと、ようやく周りのテンションも戻ったようだ。まあ、この点数を見れば誰だって驚くよね。それよりも……

恭介「孝明。その点数、霧島より高いよな？」

孝明「あゝ、まあそうだな。」

恭介「じゃあなんで学年第三位なんだよ!!!」

孝明と孝介の登場により学内新聞号外「振り分け試験結果」を読み直したんだが寺島兄弟は3位と4位だった。勿論、1位は霧島で2位は久保だ。

しかし霧島の点数は4700〜4800点の間なので孝明の方が点数が上になる計算だ。

孝明「……学年主席になると色々仕事があって孝介の後始末に手が回りそうになくてさ……」

恭介「……そうだな。手が回らないよな……」

孝介「お前ら!!! どういう意味だ!!! ゴラァ!!!」

片手間に孝介の面倒は見れない。その位、奴の行動は凄まじいこと

がある。

高橋先生「……あの。早く始めてくれませんか？」

孝明・恭介『あ、すいません。』

高橋先生から本日二度目の注意を受けて俺と孝明は勝負を始めた。

恭介「先手必勝!!」

孝明「甘い!!」

俺の召喚獣が孝明の召喚獣に駆け寄りの確に首を刎ねようとする。
しかしギリギリで交わされ大剣の腹で追撃をガードされた。

恭介「なら!!」

一旦距離を取り投げナイフを投げガードしたところに一気に駆け込んだ。

孝明「単調だぞ……っ!？」

しかし孝明は予測していたようでバックステップで攻撃をかわし、
大剣を振るった。

恭介「お前がな!!」

俺は大剣の攻撃をかわし、召喚獣の心臓めがけて剣を振るった。

孝明「クッ!!」

Fクラス 水谷恭介 VS Aクラス 寺島 孝明
総合 4580点 VS 総合4792点
』

恭介「浅かったか……」

どうやら寸前のところで回避されたようでダメージは予想より遥かに低い。

恭介「なら今度は……」

一旦十分な距離を取り弓矢を構え召喚獣の心臓めがけて射る

孝明「ズルくない、かッ!!」

それを危なげなく避けながら距離を詰めてくる孝明。

恭介「（掛かった!!）」

孝明「なっ!!」

すかさず弓をしまい、双剣で心臓と首を的確に狙ったが

孝明「……………んてな!!」

あっさり避けられ、振り下ろされる大剣をかわすが

恭介「っ!!」

『Fクラス 水谷恭介 VS Aクラス 寺島 孝明

総合 4530点 VS 総合4792点 』

孝明の召喚獣は俺の召喚獣の放った矢を『掴み』隠し持っていたようでもなんと自分の矢を召喚獣の体に突き刺されてしまった。(※戦闘開始からここまでの戦闘時間、約30秒)

恭介「全く反則的な操作技術だな……」

孝明「恭介も似たようなものだろ??」

いや、俺の場合は明久と一緒に雑用をこなしてたからだけど、お前は召喚獣の操作はまだ初心者の筈だろーが!! Cクラスとの一戦だけでここまでの操作技術は取得できないだろ!?

Fモブ「お、おい!? 何がおこってるんだ!??」

Fモブ「は、早すぎて何が何だか………」

Fモブ「あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ! 寺島の召喚獣が 水谷の召喚獣に 一撃を与えた と思ったら 寺島の召喚獣の 点数が下がっていて、水谷の召喚獣が 寺島の召喚獣を 攻撃したと思ったら 水谷の召喚獣の 点数が下がっていた。な… 何を言っているのか わからねーと思うが おれも 何がおこったのかわからなかった… 操作技術だとか腕輪の能力だとか そんな次元じゃない もっと恐ろしいものの鱗片を 味わったぜ。」

Aモブ「……………召喚獣ってこんなに早く動けたか?」

Aモブ「俺の召喚獣にそんなスペックは無いぞ!??」

Aモブ「ば、化物だ……………」

……まあ、親父の実家の道場で武術を学べば、実際のケンカでもこのくらいの速さで戦うからな……………実際、召喚獣同士だから少し動きは鈍ってるけど……………後……………

恭介・孝明「俺達はまだ化け物のレベルじゃない!!」

化物はうちのクソジジイだ!!

それより弱ったな……………予想以上に孝明が戦い慣れてる。ここは少し……………

恭介「全力で行く!!」

孝明「っ!!」

双剣を片方だけに持ち替え、孝明の召喚獣に一気に近づく。そして咄嗟にカウンターを決めようとしてきた孝明の召喚獣の大剣を短剣でギリギリ捌き、空いている右手を孝明の召喚獣の鳩尾に叩き込んだ。

『Fクラス 水谷恭介 VS Aクラス 寺島 孝明
総合 4530点 VS 総合4612点 』

恭介「よしっ!!」

孝明「甘い!!」

不覚にも一撃を入れた事に油断をしてしまい隙を作ってしまった。

そこにすかさず孝明の召喚獣は大剣を振り下ろす、その攻撃をギリギリで避けたがフェイクだったようで召喚獣を背後から思いっきり蹴られてしまった。

恭介「グハァ!?!」

『Fクラス 水谷恭介 VS Aクラス 寺島 孝明
総合 4430点 VS 総合4792点 』

あまり攻撃に当たらないし、ここ最近は掠ることも滅多にないので忘れかけていたフィードバックの痛みが体を襲う。

孝明「え!?! どうして恭介が……?」

恭介「……後で説明する。」

孝明に話すのはいいが他のAクラスのメンツも居るから色々聞かれそうなので後で孝明と孝介にだけ言うことにしよう。

孝介「まあ。恭介だし大丈夫だろう兄貴。」

孝明「……そうだな。」

恭介「……お前ら、今の発言はどういう意味か後でタップリ、ボツキリ、O☆HAN☆SIしようか。」

特に孝介は特別verでゴアンナ〜イ★

孝明「ま、まあ。気を取り直して……ここからはお遊び無しだ。」

恭介「っ!!」

孝明がそう宣言すると俺の召喚獣との差を一気に縮めて大剣を振るう、それを俺は避けて双剣で急所を狙うが綺麗にかわされ、大剣で俺の召喚獣を薙ぎ払った。

恭介「いっ!!」

ヤバいかなり痛い。

『Fクラス 水谷恭介 VS Aクラス 寺島 孝明
総合 4010点 VS 総合4792点
』

孝明「まだまだ!!」

更に追撃とばかりに斬り上げようとしてきたところを躲し、ワンス
テップで背中に回り込み双剣を振るった。

恭介「仕返しだ!!」

孝介「なっ!!」

『Fクラス 水谷恭介 VS Aクラス 寺島 孝明
総合 4010点 VS 総合4117点
』

予想以上に一撃がデカく600点近くを削れた。

孝介「……なら一気に決める!! 『操水!!』」

孝介がそう宣言し、召喚獣の腕に着いている腕輪が光る。そしてど

ここらともなく大量の水が出現した。

恭介「……………って、ヤバー!!」

慌てて孝介の召喚獣と距離を取った。しかし水が津波の様に押し寄せてきた。

孝明「呑み込め!!」

恭介「くっ!!」

『Fクラス 水谷恭介 VS Aクラス 寺島 孝明
総合 3009点 VS 総合3317点 』

どうやら孝明の腕輪は点数に応じた量の水を出現させて操る量に比例して点数が減っていくみたいだ。

恭介「…………反則だろその腕輪。」

孝明「いや、結構燃費が悪い。」

だが一撃で1000点削られたんだ、あんなのを連発されたら勝てるわけがない。

恭介「ならこっちも…………『螺旋矢!!』」

孝明「なんの!!」

しかし結構な距離から撃ったため孝明は難なく躲したしかし……

恭介「今だ!!」

ドーン!!

『Fクラス 水谷恭介 VS Aクラス 寺島 孝明
総合 2909点 VS 総合2817点 』

爆発までは読めなかったようだ。

孝明「っ!! だからあんなに解りやすく!! こうなったら!!」

次の瞬間、孝明の召喚獣の腕輪が光り俺の召喚獣の周りを水で囲んだ。

恭介「んなのありかよ!!」

孝明「押しつぶせ!!」

そして水に飲みこまれ、呑み込まれた時の衝撃＋流動による追加攻撃によって

『Fクラス 水谷恭介 VS Aクラス 寺島 孝明
総合 509点 VS 総合1807点 』

かなりのダメージを受けてしまった。

恭介「……吐き気がする……」

更にフィードバックにより感覚だけ『嵐の中を航海する船』に乗り込んだかのように船酔いを起こしてしまった。

孝明「……勝負はついたか」

そう言って止めを刺そうと近づいてきた孝明の召喚獣を――

恭介「オラァ!!」

『Fクラス 水谷恭介 VS Aクラス 寺島 孝明

総合 509点 VS 総合1407点 』

思いつきり斬りつけた。

孝明「……やはり全力で!!」

孝明はまた腕輪を使い津波を引きを越した。

孝明「これで終わりだ!!」

恭介「まだだ!! 『七円環!!』」

『Fクラス 水谷恭介 VS Aクラス 寺島 孝明

総合 207点 VS 総合907点 』

俺は孝明の召喚獣が作り出した波を防ぐために盾の腕輪を使い津波を防いだ。そして一気に駆け寄り。

恭介「『螺旋矢!!』――ダブル!!」

200点を消費し螺旋矢を二本至近距離から放った。

孝明「うおおおおお!!」

しかし着弾と同時に孝明の召喚獣の攻撃が俺の召喚獣を掠った。

ドォーン!!

孝明「どっちが——」

恭介「勝った——」

『Fクラス	水谷恭介	V S	Aクラス	寺島	孝明
総合	0点	V S	総合0点	』	

孝明・恭介「————え？」

高橋先生「両者戦死です。よって3回戦は引き分けとします。」

A & F『ええええええ!!』

第三回戦は爆発の煙による判定不可で引き分けと終った。

第二十二問（後書き）

どうも作者です。

先週末は忙しすぎて書けませんでした。本当スイマセンorz

さて今回は孝明vs恭介のほぼ人外対決です（笑）

孝明、孝介、恭介の3人の運動スペックは化け物の並みです。

孝介はまだ完全に召喚獣の扱いに慣れていないので柵と互角ぐらいですが慣れれば人外の動きをします。

どのぐらい人外かと言うとムッツリーニの『加速』を難なく躲せるレベルです。

今回は今週末の予定ですが、来週末は更新できません。

理由は簡単です。期末テストで作者の点数が＼（＾o＾）／ならな
いためにテスト勉強をしなければなりません。

ちなみに3教科ぐらい赤点になる可能性がある科目があり相当ヤヴァ
イんです。

なので今週末の後は再来週に更新します。

では今回はこの辺で。

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからもよろしくお願いします。

第三十二問（前書き）

どうも作者です。

今回でAクラス戦の戦闘は終了です。

ではどうぞ。

第二十二問

Side 恭介

恭介「スマン。雄二、勝てなかった。」

雄二「い、いや。事実上の学年主席を引き分けにもって行けただけで十分だ。」

恭介「そ、そうか。」

珍しいな雄二が素直に感謝するなんて……変な物でも食べたのか？

雄二（あんな人外バトルを繰り広げた奴に文句なんて言えるか!!）

第三戦を終えて一勝一敗一分のイーブン、少し想定外な事態も起ったが……このまま行けばFクラスが勝つ可能性もあるな。

高橋先生「では、次の方どうぞ。」

佐藤「私が出ます。教科は物理でお願いします。」

Aクラスからは佐藤美穂、確か振り分け試験では学年第六位だった生徒だ。

恭介「ここは姫路g（雄二）「よし。頼んだぞ、明久」ちょっ!!！
おま!!！」

明久「え!?! 僕!?!」

俺が姫路を推薦しようとする声を無視して雄二は明久を指名した。

恭介「なんでここで明久なんだよ!! 実力的に姫路だろ!! それに相手は科目選択をこれで使い果たすんだぞ!? ここで姫路を使って勝てば後は楽勝だろ!!」

雄二「明久、大丈夫だ。俺はお前を信じている。」

……こいつ、玲奈が居なくなった途端この態度かよ!!

明久「……………わかった。やれるだけやってみるよ。」

雄二「ああ、お前の本気も見せてやれ。」

そしてちゃっかり明久に対するハードルも上げやがった。確かに明久はBクラス並みの実力があるが…………

Aモブ『うん? 吉井ってそんなに強いのか?』

Aモブ『そんな筈ないだろ、観察処分者だぞ?』

Aモブ『ああ。Fクラス代表のハッターだろ。』

…………お前らの言うとうりそこまで強くは無いと思うぞ俺も。だけど明久はな…………

佐藤「吉井君、でしたか? あなた、まさか…………」

明久「あ、うん。確かに今までそんなに本気で戦ってなかったよ。」

佐藤「それじゃ、あなたは……!!」

明久「……ちよつと君の想像と違うと思うけど、実は僕——」

お前らが思ってるほど弱くは無いんだよ。

明久「——Bクラス並みの点数は取れるんだ。」

『Fクラス 吉井明久 VS Aクラス 佐藤美穂
物理 216点 VS 物理 389点』

Aモブ『えっ!?!』

佐藤「……なるほど。確かにBクラス並みは取れるようですね。」

明久「うん。恭介のおかげでね……じゃ、行くよ!!」

こうして佐藤VS明久の戦闘が始まった。最初は観察処分者の利点を生かし半分まで点数を削った明久だったが、コツを掴んできた佐藤に反撃されてしまい結果。

『Fクラス 吉井明久 VS Aクラス 佐藤美穂
物理 0点 VS 物理 16点』

高橋先生「勝者Aクラス。」

僅差で負けてしまった。

明久「負けちゃったか……」

恭介「仕方ないさ。相手の得意科目だったし、第一ここで明久を出した雄二に責任がある。」

雄二「うん？ なんの話だ？」

………こいつとはもう一回、今度は本気のO★H★A★N★A★S★Iが必要そうだな。

明久「やっぱり！！ アンタ僕を全然信頼してなかったでしょう！！」

雄二「信頼？ 何ソレ？ 食えんの？」

恭介「押さえろゝ明久。まだ試召戦争の途中だから押さえろゝ」

明久「離して恭介！！ こいつの腸を引きずり出さなきゃ気が済まない！！」

今にも雄二に襲い掛かりそうな明久を羽交い絞めにしながら宥める。
『まだ』ダメだぞ、『まだ』戦争が終わってないからな。

高橋先生「では五人目の方どうぞ」

康太「……………（スック）」

土屋が立ち上がった。

勿論これは予想どおり、保健体育学年一位の実績を持つ土屋がAクラスのガリ勉野郎に負ける訳が無い。

??? 「じゃ、ボクが行こうかな。」

Aクラスからは色の薄い髪をショートにした、ボーイッシュな女の子が出てきた。誰だ？ 見たことないぞ？

愛子「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね。」

ああ、孝介達と同じ転入生か。

高橋先生「教科は何にしますか？」

高橋先生が土屋に尋ねる。

康太「……………保健体育」

勿論土屋のリーサルウェポンが選択される。

愛子「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤が土屋に話しかける。土屋の保健体育の実力を知らないからか随分余裕だな。

愛子「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？……………キミとは違って、実技で、ね♪」

ふうん。運動が得意なのか、確かに結構スポーツをやってる奴、独特の体つきをしてるな。多分工藤は水泳部かな？

愛子「そっちのキミ、吉井君と水谷君だっけ？ キミ達とも戦って

みたいな………勿論実技で」

明久「フツ。望むところ——」

恭介「ああ、勝負したいならいいぞ？ 種目は水泳か？」

俺も結構水泳得意なんだよね、まあ素人だけどって、アレ？ なんか明久と島田が顔を赤くしてるし、柗は何かホッとしてるし、工藤はハトが豆鉄砲喰らった様な顔してるぞ。どういうことだ？

玲奈「気にしないでください。そして兄さんはずっとそのままの感性でいてください。」

恭介「うわっ！？ 玲奈！？ 何時の間に？？」

玲奈「秀吉君が戻ると言ったので一緒に保健室から戻ってきました。ちなみに工藤さんの『土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？』の件から聞いてましたよ？」

秀吉「現状は柗から聞いたのじゃ。」

恭介「そうか………もう大丈夫か？」

玲奈「はい。もう大丈夫です……秀吉君のおかげで／／／／／／（ゴニョゴニョ）」

………おっと保健室で何があったんだ？ ついに秀吉が男を見せたのか？ ……後で根掘り葉掘り聞かせてもらおうぞ秀吉君？

秀吉「き、恭介。か、顔が怖いんじゃないか……」

おっと。どうやら心情が顔ににじみ出てたようだ。自重自重……

恭介「……………で、あそこで顔を赤くしてクネクネしている姫路は何なんだ？」

玲奈「……………ああ。そつとしておいてあげて下さい。」

なんか『あ、明久君がの、望むならど、どんなプレイだって……………
…キャッ!』って呟いているが……………どうにかしなくていいのか
アレ。

秀吉「……………あれは重症じゃのう。医者では無く病院を持ってこな
くては……………」

恭介「ダメだ秀吉。アレはきっと病院も素足で逃げ出すぞ。」

玲奈「……………なんとかしてきます。」

そう言って玲奈が姫路に近づき揺さ振り始めた。これでもダメなら
ガーデルマンが必要だな。

恭介「そう言えば勝負は……………」

柊「康太君の勝ちみたいだよ。」

『 Fクラス 土屋康太 VS Aクラス 工藤愛子

保健体育 572点 VS 保健体育 446点↓0点

』

愛子「そ、そんな………！ この、ボクが………！」

工藤が床に膝をつく。相当ショックみたいだな。まあ、相手が悪かった。

高橋先生「これで二勝二敗一分けですね。次の方は？」

高橋先生は淡々と作業を進める。Fクラス相手にこんなに接戦なのに自分のクラスが気にならないのか？

瑞希「あ、は、はいっ。私ですっ。」

どうやら玲奈により復活に成功した姫路が出る。まあ、相手がだれであれ姫路なら余裕だろ。

???「それなら僕が相手をしよう。」

Aクラスから歩みだしたのは久保利光。こいつか……

雄二「やはり来たか、学年次席。」

彼は椛に次ぐ学年五位だったのだが、今回の振り分け試験の結果は玲奈たち3人が途中退室で0点の為、学年次席の位置に居る。

雄二「ここが一番心配なところだ。」

雄二が心配するのも無理はない、椛、姫路、久保の三人の実力はほぼ互角で総合科目での差は30〜40点前後。連戦で疲れている姫路には少し辛いかもしれない。だから……

恭介「……お前があそこで俺の言葉に従って姫路を出しておけば絶対にこいつを抑えられたんだぞ？」

雄二「はあ？　どういう事だ？」

恭介「これを見てしろ。」

そう言って俺は雄二に文月新聞号外『振り分け試験結果、2年生編』を渡した。

恭介「姫路の物理の点数は390点、接戦だが佐藤の点数を上回ってる。」

雄二「確かにそうだが、負ける可能性があっただろ？　確かにあそこで姫路を出して勝てたら万々歳だったが教科選択があっても久保に勝てる奴なんて他に……」

恭介「……明久だよ。」

雄二「ハァ！？　明久！？　なに馬鹿なことやってんだよ。Bクラスレベルの明久が勝てるはずないだろ。」

恭介「……そこに乗っている久保の世界史の点数は？」

雄二「302点と結構な点数だが？」

恭介「……明久の世界史の点数は427点だ」

雄二「なっ!？」

そう俺と玲奈が明久に勉強を教えた時に先ずやらせたのが日本史と世界史。理由は簡単、今のゲームは結構歴史をベースにしたものが多く明久がやっているゲームにそう言うゲームが多かったので覚え易いと踏んだのだ、結果はご覧の通り。

恭介「まあ、まだ勝機があるから良いが負けたら………覚悟しとけよ？」

雄二「な、何を言うか負ける訳ないだろう!？」

高橋先生「教科はどうします?」

久保「総合科目でお願いします。」

高橋先生の間に答えたのは姫路ではなく久保。おい! Aクラスの科目選択回数は3回でもう使い果たしたよな!?

雄二「ちょっと待った! 何を勝手に————」

瑞希「構いません。」

明久「姫路さん?」

久保の要求にYesと答えてしまった姫路。まあ、姫路がそれでいいならいいけど。

高橋先生「それでは……」

『 Fクラス 姫路瑞希 VS Aクラス 久保利光
総合 4409点 VS 総合3997点 』

Aモブ『マ、マジか!?!』

Aモブ『400点差だと!?!』

Aモブ『いつの間にこんな実力を!?!』

……まさかここまでの差が出るとは……

久保「ぐっ……………! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……………」

瑞希「…………私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる。Fクラスが。」

久保「Fクラスが好き?」

瑞希「はい。だから、頑張れるんです。」

勝負は一瞬でつき姫路の勝ち。まあ、『Fクラスが好き』と言うより『明久が好きだから明久のいるFクラスが好き』だよな。

高橋先生「これで三勝二敗一分けです。」

高橋先生の表情が一瞬驚愕の表情となった。よほど姫路の急成長に驚いたようだ。

高橋先生「最後の一人、どうぞ」

翔子「…………はい。」

Aクラスからは勿論学年主席、霧島翔子。

そしてFクラスからは当然、

雄二「俺の出番だな。」

坂本雄二。コイツしかない。

高橋先生「教科はどうしますか？」

雄二「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわざわ……！！

雄二の宣言でAクラスがざわつく。

Aモブ『上限ありだと？』

Aモブ『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか。』

Aモブ『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

これなら頭の良し悪しではなく集中力と注意力で勝負が決まる。無論Fクラスにも勝てる確率が出てきたわけだ。

高橋先生「わかりました。問題を用意するので霧島さんと坂本君は不正防止の為、視聴覚室向かって下さい。」

翔子「……はい。」

霧島は短く返事をして教室から出て行った。

雄二「じゃ、行ってくる。」

恭介「おう、行ってこい。（マケルナヨ。）」

柊「頑張ってね。」

玲奈「頑張ってください。（マケタラシヨウチシマセン）」

瑞希「行ってらっしゃい。坂本君」

雄二「ああ。（なんか、寒気を感じたんだが……気のせいかな？）」

これで決着だ。勝てばシステムデスク。負ければ引き分けで多分延長戦。延長戦になれば俺達が勝てる確率はほとんどなくなる。

高橋先生「皆さんはここでモニターを見てください。」

高橋先生が機会を操作すると霧島と雄二が映し出された。

高橋『では問題を配ります。試験時間は五十分。百点満点です。不正行為は即失格になります。よろしいですね。』

翔子『……はい。』

雄二『わかっているさ。』

高橋先生『では、始めてください。』

二人の手によって問題用紙が表にされる。

椀「いよいよだね。恭介君。」

恭介「……………ああ。」

明久「？　どうしたの恭介？」

恭介「いや、ちょっと……………な。」

美波「なによ。何か問題あるの？」

瑞希「あの問題が出れば私たちの勝ちなんですよ？」

秀吉「皆！！　見るのじゃ！！」

秀吉の声でディスプレイを見るとそこには――――

（　　）年　大化の改新

康太「……………出た。」

瑞希「よ、吉井君」

明久「うん。」

美波「これでウチ等……………！！」

椛「うん!!　これで私達の卓袱台が」

F全員『システムデスクに!!』

Fクラス全員の雄叫び……だが……。

玲奈「でも皆さん。坂本君が……」

恭介「ああ、雄二が……」

玲奈・恭介「「本当に満点取れると思うか（思いますか）？」」

F全員『……あ……』

『日本史勝負　限定テスト　100点満点
Fクラス　坂本雄二　VS　Aクラス　霧島翔子
53点　VS　97点
』

高橋先生「三勝三敗一分けで引き分けです。延長戦をどうするかをクラスどうしで話し合ってください。」

雄二の失策でFクラスは勝利への希望から敗北への絶望に叩き落とされてしまった。

第二十二問（後書き）

どうも作者です。

無事Aクラス戦の戦闘シーンは終了です。

少しggg&端折りましたが……

今回は来週の週末（16日or17日です）原作1巻完結です。

その後はラブレター編と一応コラボを予定しています。

しかし、コラボは結構前に取り決めたことなのでどうなることやら……

一応あとでコラボ予定の作者さんともう一度連絡を取ってみます。

他にもコラボを募集しています。

コラボしていただける方がいたら嬉しいです。

今回はこの辺で

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからもよろしく願います。

第二十三問（前書き）

期末を乗り切ったぞー！！

赤点回避かどうかはまだわからないんですけどねー

二教科ほど不安材料が……（――；）（両方英語科目）

今回で原作一巻終了です。

ではどうぞ。

第二十三問

Side 恭介

高橋先生「三勝三敗一分けで引き分けです。延長戦をどうするかをクラスどうしで話し合ってください。」

視聴覚室になだれこんだ俺達に対する高橋先生の締めめの台詞。

うん。高橋先生の言うとおりだ、早く延長戦をどうするか決めないとな。

……………だがその前に……………

翔子「……雄二、私の勝ち。」

床に膝をつき絶望的な表情をしている雄二（能無し）に霧島が近づく。

雄二「……殺せ。」

明久「良い覚悟だ、殺してやる！ 歯を食い縛れ！」

恭介「待て、明久。殺すのはまだ早い。」

明久「なんで止めるんだ！！ 恭介！！」

恭介「ちゃんとイタブツテカラジャナイト。」

明久「そうだね、恭介!! 楽には死なせないね!!」

瑞希「吉井君、落ち着いてください!」

椛「そうだよ! 恭介君も落ち着いて!」

玲奈「そうです。兄さんも明久君も落ち着いてください。……殺すのは精神的に虐めて徹底的に追い詰めてからです。」

秀吉「玲奈も落ち着くのじゃ!!」

俺を椛が、玲奈を秀吉が、明久を姫路が後ろから抱き着いて止める。

明久「だいたい、53点ってなんだよ!!」

恭介「ああ、0点なら名前の書き忘れとか考えたが、この点数だと……」

玲奈「……………まさか、坂本君……………」

雄二「いかにも、俺の全力だ。」

明久「この阿呆があーっ!」

恭介「……………玲奈、ペンチ。」

玲奈「……………はい、兄さん。」

とりあえず、この馬鹿の生爪を一枚一枚剥いでいかなければ。

美波「3人とも落ち着きなさい!! アキは自分も負けてるでしょうが!! 水谷(兄)も引き分けだったでしょう!!」

椀「そうだよ!! それに私も負けちゃったんだよ恭介君。」

瑞希「そうです!! 坂本君を責めちゃダメです!!」

明久「ううっ!!確かに.....」

恭介「.....そうだな。」

玲奈「なら、私が罰を下すのは正当な行為になりますね。」

秀吉「だから止めるのじゃ玲奈!! その考えじゃと椀や明久にも罰を与えなければいけないのじゃ!!」

玲奈「.....そうですね。」

ちっ!! 椀と姫路、秀吉の情けに救われたな。

翔子「.....でも危なかった。雄二が所詮小学生の問題だと油断してなければ負けてた。」

雄二「言い訳はしねえ。」

恭介「.....凶星かよ。」

優子「それより、延長戦はどうするつもり? Fクラス代表さん。降伏? それとも続行?」

雄二「そ、それは……………」

木下優子が延長戦の話を切り出した途端、雄二の顔が見る見る青くなっていた。コイツまさか……………」

恭介（まさか何も考えてなかったって訳じゃねえよな？）

雄二（……………スマン、負けるとは思ってなかった。）

……………コイツ後で本気で殺す。

玲奈「私達Fクラスは和平交渉を提案します。」

雄二が悩んでる間に玲奈が『やれやれ』と言った顔で和平交渉を提案した。

雄二「お、おい！！ 何を勝手に（玲奈）「坂本クン、ナニカモンクデモ？」……………イイエ、アリマセン。」

優子「和平交渉？ そんなの受けられないわ、こっちが譲歩する必要なんて……………」

恭介「本当にそうか？ 良く考えた方が良いと思うぞ？」

優子「何を馬鹿なことを（翔子）「……………待って優子。」代表!？」

木下優子が完全にNOと言う前に霧島が止めた。

翔子「……………何故、和平交渉を？」

恭介「このまま戦争を続けてもお互い損をするだけだからだ。」

優子「損するのはあなた達だけでしょ？」

玲奈「いいえ。あなた達も確実に損をします。まず、私たちは一騎打ちをこれ以上続けるわけにはいきませんので一騎打ちは却下です。一騎打ちならAクラスが勝ってもFクラスが万が一勝っても勝者に損はありませんが私たちは勝つ確率が一番低い一騎打ちは選びません。次にこのまま通常の試召戦争にもって行った場合、AクラスもFクラスにも勝機があります。むしろFクラスの方が勝てる確率は高いです。」

優子「Fクラスが勝つ確率が高い？ 一騎打ちなら兎も角、通常の試召戦争で私たちが負ける訳ないじゃない。」

恭介「それはどうかな？ そっちは工藤に木下、久保、それに孝明が居ない状況で孝介と佐藤に関しては得意科目の点数がかなり減っている状況だ、こっちは俺と椋、明久が居ないが姫路と玲奈は無傷で土屋の保健体育の点数と腕輪の能力を考えると十分勝機がある。それに今の霧島の日本史の点数じゃ玲奈と姫路には勝てない、それどころか日本史の点数が比較的高いFクラスの生徒にも勝てない。」

優子「…………馬鹿にしてるの？ 水谷さんや姫路さんになら解るけど、他のFクラスの生徒に代表が負けるわけ（翔子）「…………確かに勝てない。」えっ？」

玲奈「木下優子さん、霧島さんの日本史の点数は？」

優子「そんなの396…………あっ」

翔子「…………私の日本史の点数は97点」

玲奈「そうです。坂本君との勝負を受けた霧島さんの日本史の点数は97点、各クラスの代表は試召戦争中回復試験が受けられませんか、戦争が終わるまで霧島さんは日本史が弱点となります。例えばこちらが代表の坂本君と土屋君を大島先生（保健体育）と一緒にクラスに残しこし、残りの全員が上代先生（日本史）を携えて特攻をかければ勝てる可能性が高いです。」

例え点数の低いFクラスの生徒でも一瞬の時間稼ぎぐらいはできる。その間に霧島に玲奈と姫路が日本史で勝負を挑めばFクラスの勝ちだ。

因みに代表が回復試験を受けられない理由は、過去に追い詰められたとしても回復試験に逃げて時間を稼ぐという方法で戦った代表が居たためである。

玲奈「しかし、これだとFクラスが勝ってもAクラスが勝っても全体的に点数の低い状態のところをBクラスやDクラスに攻められて負けてしまう可能性があります。」

特にBクラスに連戦を申し込まればAクラスは体力的にも点数的にも厳しくて、Fクラスは圧倒的に点数が足りなくて負ける可能性が高い。

優子「それなら日本史以外の先生で代表を固めれば――」

翔子「……………わかった。和平交渉を受ける。」

優子「だ、代表！？　どうして!?!」

霧島からの承諾にAクラスの一部を除いた生徒がざわつき始める。

翔子「……………水谷兄妹の言うとうり、BクラスやDクラスに連続して試召戦争を挑まれて絶対に『負けない』保証は無い。なにより、たった1ヶ月で敗北してしまったらAクラスの威厳が失われる。」

優子「で、でも!!」

愛子「優子!!」

中々納得しない木下優子に工藤が怒鳴った。

優子「あ、愛子!？」

愛子「代表の…………霧島翔子のAクラス代表としての立場を考えて!!」

優子「…………っ!!」

孝明「差し出がましいかもしれないけど、俺も代表の意見に賛成だ。」

孝介「…………俺もだ。」

優子「あなた達まで…………」

寺島兄弟たちも賛成を表明した。

孝介「恭介の言うとうり例え勝ったとしても後が厳しいからな。」

孝明「ああ、危険な賭けに乗る程の勝負でもないし、何より……」

そこで二人して玲奈を見て

寺島兄弟「本気を出した玲奈に勝てるわけがない。」

声を綺麗にそろえて言い放った。

優子「……分ったわ。」

翔子「……ごめんなさい、優子。Aクラス代表としてこれ以上危険な賭けには乗れない。」

優子「私の方こそ、代表の立場を無視して勝手なことを言ってしまったわ。ごめんなさい。」

恭介「じゃあ、この試召戦争は和平交渉による終戦でいいな？ お前らもいいな？」

そう言ってFクラスの仲間にも確認を取る。

柊「私は賛成だよ」

瑞希「私もそれでいいです。」

美波「設備が今より悪くなるよりはましね。」

康太「……仕方がない。」

秀吉「ワシも賛成じゃ。」

明久「……………悔しいけど仕方ないよね。」

雄二「……………俺のせいでこうなったんだ、俺はなにも言わねえ。」

雄二の言葉を聞いて他のFクラスの連中も納得したのか承諾した。

玲奈「では、試召戦争終結で（翔子）「……………待つて。」なんです
か？」

これで終わりと思ったら霧島が待ったをかけた。

翔子「……………約束。」

恭介「約束？」

翔子「……………負けた方が何でも言うことを聞く」

あゝ、確かそんな約束してたな。でも引き分けたんだから……………

雄二「しょ、翔子、引き分けなんだからその話は無しに！！」

霧島の発言に雄二が慌てだした。

翔子「……………私はクラス全体がとは一言も言ってない。雄二は私に
負けた。」

……………うん？　ちょっと待て、あれは雄二との約束だったのか？
じゃあ霧島の狙いは！！

雄二「な、そんなの聞いてな（霧島）」「……………負けた雄二に拒否権は無い。」くっ！！」

わーお、霧島が玲奈（怒り）に近いオーラを纏ってるぞ、桑原桑原。で土屋は何でカメラの準備を念入りにしてるんだ？

翔子「……………雄二、私と付き合って。」

その瞬間、教室内の時間が止まった。

雄二「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか。」

翔子「……………私は諦めない。ずっと雄二の事が好き。」

雄二「その話は何度も断っただろ？ 他の男と付き合う気は無いのか？」

翔子「……………私には雄二しかない。他のひとなんて、興味ない。」
なんと健気で一途な思いなんだ、お兄さん感動しちゃうな（予想外の展開に少々パニックってます。）

雄二「もう一度聞くが拒否権は？」

翔子「……………無い。約束だから。今からデートに行く。」

雄二「ぐあっ！！ 放せ！！ やっぱりこの約束は無かったことに——」

ぐいっ　つかつかつか

霧島は雄二の首根っこを掴み教室から出て行った。あ、O★H A★
NA★SIし忘れた。

「……………」

「……………」

「……………」

あまりの出来事にA、F両クラスの全員が呆然としている。

西村先生「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

すると突如教室の扉が開き西村さんが立っていた

明久「あれ？西村先生どうしたんですか？」

西村先生「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようかと思ってな」

恭介「我がFクラス？」

西村先生「ああ、今度から福原先生に変わって俺に担任が変わるぞうだ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

Fモブ『何iiiiiiiiiiii!?!?』

クラスの男子生徒全員から悲鳴があがる。

西村先生「いいか。確かにお前等はよくやった。Fクラスがここま
でくるとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではな
い』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の1つなんだ。
だからないがしろにしてもいいものじゃない」

うん、全く正論だな。まあ俺はある程度学力があるから関係ないが。

西村先生「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、
開港以来初の《観察処分者》とA級戦犯だからな。」

明久「そうはいきませんよ!! 何としても監視の目をかいくぐつ
て、今まで通り楽しい学園生活を過ごして見せます!!」

西村先生「……お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

全く明久は……

恭介「明久は俺と玲奈でしっかり面倒見るから、雄二の監視を強化
してくれ。」

そんなことしたら西村さんが雄二を牽制してくれないだろ? アイ
ツの馬鹿みたいな行動はもうたくさんだからな。

西村先生「本当か? じゃあ吉井の事は任せるぞ?」

恭介「ああ、その代りねっちより雄二の事を絞ってくれ。」

明久「恭介!! 恭介は味方だと思ったのに!!」

明久がなんか言ってるが無視だ、とりあえず明久は俺か玲奈が『止める』と言えば素直に止めるから問題ない事を西村さんも知ってるからだろう。

西村先生「とりあえず、明日から授業とは別に補習の時間を2時間、設けてやろう。」

まあ、二時間ぐらいの補習なら全然楽勝だな。

美波「さあ、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープでも食べに行きましょうか？」

明久「え？ 美波、それは週末の話じゃ……」

瑞希「だ、ダメです！！ 吉井君はこれから私と映画を見に行くんです！！」

明久「ええっ！？ 姫路さん、それは話題にすら上がってないよ！？」

多分霧島に触発されたのか姫路と島田が明久の取り合いを始めた。姫路はまだ腕を掴んでるだけだが島田のは関節技がかかってる、早く何とかしないと……

玲奈「そうですよ島田さん、今日は私と椛ちゃんと瑞希ちゃんと兄さんと秀吉君と明久君でえいがを見に行く予定だったんですから。」

椛「ふ、ふえっ！？」

美波「う、嘘！？」

玲奈「本当です。ねえ？　兄さん？（話を合わせてください。）」

恭介「あ、ああそうだったな（秀吉も話を合わせろ）」

秀吉「そうじゃったのう。」

明久「え、そんな約（恭介）」「（映画代はおごってやるから話を合わせろ）」そうだったすっかり忘れてたよ。」

玲奈（椛ちゃんも話を合わせてください。兄さんにアピールするチャンスですよ。）

椛「うん。これからみんなで映画に行くんだったよね。」

美波「……………わ、わかったわ（ううう、なんで瑞希ばかりい……………！）」

そう言うのと島田はトボトボとFクラスの教室に戻って行った。

明久「玲奈。とりあえず助けてくれてありがとう。」

玲奈「どういたしまして。（関節技さえきめてなければ手出ししなかったんですがね……………）」

椛「玲奈ちゃん、本当に行くの映画？」

玲奈「行きますよ、そう宣言しちゃったんですから。」

恭介「それなら、荷物を持って校門集合だな。」

秀吉「お主は切り替えが早いのう。」

明久「秀吉も十分早いよ。」

瑞希「じゃあ準備しに教室に戻りましょう。」

そう言って教室に戻って行った。その途中。

恭介「玲奈、なんで俺と秀吉も誘ったんだ？ 二人で行かせるなら俺達は要らなかっただろ？」

玲奈「簡単に諦めそうにない島田さんを諦めさせるためにはトリプルデートの約束をしたという事にすれば良いと思ったので人数合わせで兄さんと秀吉君と椀ちゃんを入れました。（まあ、兄さんと椀ちゃんは態となんですけどね。）」

恭介「なるほどねえ」（秀吉の名前を呼ぶときに若干顔がにやけたぞ、少し自分の気持ちに気付き始めたか？）

玲奈「どうしたんですか？ そんなにニヤニヤして？」

恭介「そうか？ いつも通りだけど。」

玲奈「そうですか、何はともあれ急ぎましょう。」

恭介「そうだな。」

こうして2年生最初の試召戦争は幕を下ろした。

第二十三問（後書き）

どうも作者です。

前書きにも書いたように今回で原作一巻終了です！！

やっと一巻分が終わりました。

いや〜長かった〜。

さてさて今回はただ単に戦争を終結するために水谷兄妹が雄二の代わりに頑張るお話でした。

和平交渉と最後のくだり以外はほぼ原作引用！！

玲奈、柊は姫路を応援していて、恭介は明久を応援している設定なので美波×明久ファンの方は涙目な作風にこれからもなりますのであしからず。

マジで美波の相手はどうしよう……（^―^；）（アイディアがあったら感想に書いてくださいね！！）

さて次回からの流れを一応書きますと。

- 1、Aクラス戦後のトリプルデートの話（多分1話分）
- 2、3、5巻のラブレター騒動（1話、もしくは2話、長くて3話）
- 3、コラボ作品（1話分、場合によれば無し＋随時募集中）

こんな流れです。

年内にどこまで行けるかな？

冬休みに入れば多少投稿頻度が上がると思います。（出来る限り頑張ります！！）

では今回はこの辺で。

質問、感想、意見、コラボ希望、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからもよろしく願いします。

閑話 トリプルデート（笑）編（前書き）

遅れてすみません。

冬休み入って4日連続塾のせいでなかなか筆が進みませんでした。

ではどうぞ。

閑話 トリプルデート（笑）編

Side 恭介

恭介「……で、映画館に来たわけだが……」

椀「な、なんだか人が多いね。」

秀吉「しかもカップルが多い気がするのじゃが気のせいかな？」

明久「うん。しかもなんか本当に胸焼けしそうなくらいにイチャイチャしてるカップルが……」

瑞希「あ、あははははは……」

玲奈「……すみません。これは予想外でした。」

Aクラス戦後、ひょんなことから決まったトリプルデート（笑）の為に映画館に来た。だが予想以上に混んでいてしかもカップル（激甘）が多い。

曰く、たまたま人気純愛小説の実写映画の公開日であり。

曰く、この映画館が本日『カップル割』の日らしく恋人同士で映画を見ると通常の5割の値段で見ることが出来るらしい。

そしてこの駅前の映画館はこの地域の学生御用達の映画館であり本日は金曜日、私立校でない限り明日から土日で休みだ。

したがって、『人気映画の公開日』＋『カップル割の日』＋『週末で授業終わりの学生カップル&仕事終わりのカップル』＝『映画館激混み』になることは確定的に明らかであり、どうやら俺達は選択ミスをしてしまったようだ。

恭介「まあ、仕方ない折角来たんだ何か見て行こうぜ？」

椀「そうだね。少し恥ずかしいけど………」

秀吉「うむ。丁度見たい映画があったしのう」

玲奈「この前、言っていた映画ですか？」

秀吉「うむ、あれを見れば演技の幅が広がりそうじゃからのう。」

瑞希「よ、吉井君。あ、あの映画を一緒に見ましょう!!」

明久「ひ、姫路さん!? そんなに腕を締め付けられると痛いんだけど!? (姫路さんの twin soft mountain が当たって僕の理性が!!)」

瑞希「あ!! ご、ごめんなさい、吉井君。だ、大丈夫ですか!？」

明久「うん。大丈夫だよ。(危ない!! もう少して理性が飛ぶところだった……)」

カップルばかりの映画館内に少し居心地の悪い俺と椀、映画館の雰囲気など物ともしない玲奈と秀吉、映画館の雰囲気毒されつつある姫路にその被害者の明久。

うゝむ……何ともカオスな空間だ。特に明久と姫路の二人はな。

恭介「さて、どの映画を見るんだ玲奈？」

玲奈「それについてですが……」

俺が玲奈に尋ねると少し溜めて。

玲奈「瑞希ちゃんと秀吉君の見たい映画は違うようですし、折角男女3人ずつ居るんですから3ペアに別れて映画を見ましょう。」

と近年稀に見る悪戯な笑みを浮かべていた。

玲奈さん、あなたがその笑い方をすると正直言ってかなり怖いです
(色々な意味で)

恭介「そうだな。元々は姫路が明久と映画を見たいって言い出したんだもんな、とりあえず明久と姫路のペアは決定だな(ニマニマ)」

明久「恭介!？」

瑞希「(ボソ)わ、私とあ、吉井君が暗闇でふ、二人きり……………」
(ボンッ)」

俺の発言を聞き二人とも顔を赤くし、姫路に関しては頭から煙を出し体をクネクネさせ始めた。

…………俺の発言からいったい何を妄s (訂正) 想像したんだか……
……

玲奈「で、椛ちゃんは兄さんとペアでいいですね。」

椛「ふえっ!?!? れ、玲奈ちゃん!?!?」

玲奈がもう一組のペアを言うのと椛が顔を赤くしあたふたし始めた。

うん、確かにこの雰囲気の中、別に好きでもない人と二人っきりで映画を見るのが嫌なのはわかるけどさ、そこまで拒絶されるとは思ってなかったわ、椛の拒絶で俺は深い悲しみに包まれた。(↑どうしようもない鈍感野郎である。)

玲奈「えっと………椛ちゃん(ボソ) 兄さんにアタックするチャンスですよ?」

椛「よ、よろしくね、恭介君!」

恭介「……………ああ。」

玲奈「……………兄さん? なんで目が虚ろなんですか?」

恭介「……………ああ。気にするな、気にしたら負けだ。」

玲奈「(これは何か壮大な勘違いをしていますね。)……………兄さんちょっといいですか?」

玲奈が手招きをして(耳を貸してください)というジェスチャーをしてきたので耳を傾けると。

玲奈「(こそこそ) そんな態度をしてると椛ちゃんが悲しみますよ?」

恭介「……………（ブツブツ）なんでそうなるんだよ。第一、椛は前がなんか言うまで嫌がってただろ？」

玲奈「……………はい？」

いや、そんな『なに言ってるんだこのアホ兄は』みたいな顔されてもこっちの方が『はい？』なんだけど。

玲奈「……………えっと……………椛ちゃんは全然嫌がってませんよ？」

恭介「嘘だー！！ あんなにあたふたして拒絶してたじゃん！！」

玲奈「（ダメだこの鈍感兄…早く何とかしないと…）あれはただ単に男性と二人きりで映画を見るのが初めてで緊張してただけですよ。それに普通、嫌だからあたふたする人間はいませんよ？」

恭介「いやでも…………」

玲奈とそんな口論をしていると…………

椛「あ、あの恭介君。」

恭介「…………なんだ？」

椛が話しかけてきた。うん、今は（俺の心の）傷がさらに広がるからそっとしておいて欲しいんだけどな～

椛「…………恭介君は私と映画を見るのが嫌なの？」

恭介「……はい？」

……えっと、これはどういうことだ？　なんで椛がそんな泣きそうな顔してそんなこと聞くんだ？　えっ！？　じゃあ椛は俺と映画見るが嫌じゃなかったの！？　（恭介自身が）なんなの！？　バカなの！？　死ぬの！？

恭介「……えっと、椛は俺と映画を見るのが嫌なんじゃ……」

椛「そんなことないよ！！　（ゴニョゴニョ）む、むしろ、恭介君と二人きりで……（ボンッ！！）」

最後の方は声が小さくて全然聞き取れなかったが全然嫌ではないらしい。

恭介「じ、じゃあ、一緒に映画みる??」

椛「!!　う、うん!!」

さっきまで泣きそうな顔をしていたのが嘘のように笑顔になった。
ヤバイ可愛い!!

玲奈「じゃあ、兄さんも椛ちゃんもペアでいいですね？」

椛「うん!!」

恭介「ヴぁgf sいうyf qおk rはh..p（勿論だ、玲奈!!
何の問題もない!!）」

秀吉「落ち着くのじゃ恭介よ、ここは日本じゃぞ。」

おっと、取り乱したようだ。落ち着け俺、落ち着くんだ。

玲奈「最後は私と秀吉君でいいですね？」

秀吉「う、うむ。よ、よろしく頼むのじゃ。」

おっと、こんなに緊張している秀吉はレアだ。いつものポーカーフ
エイスが完全に崩れている。

恭介「じゃあ、各自好きな映画を……ってあれは雄二と霧島？」

一同「「「「えっ!?!」」」」

俺がチケット売り場の方を向くとそこにはかなり上機嫌に見える霧
島と————鎖で繋がれ何かを悟ったような顔をした雄二を発
見した。

明久「……………雄二何やってんの？」

雄二「……………ああ。明久かどうか俺も今回ばかりは、負けを認めざ
るを得ないぜ。」

恭介「スマン雄二話が見えない。」

霧島の告白で付き合うことになったのも解るし、デートの為に連れ
出されたのも解るがなぜ鎖で繋がれてるんだコイツは？

翔子「……………雄二、どれがみたい？」

雄二「早く自由になりたい」

翔子「じゃあ、これ」

霧島は雄二の言い分を無視して、映画の紹介表示を指差した。

雄二「おい待て！ それ3時間24分もあるぞ！？」

翔子「2回見る」

雄二「1日の授業より長いじゃねえか！！」

翔子「授業の間、雄二に会えない分の、う・め・あ・わ・せ」

なんとか逃げようとする雄二に霧島は

翔子「今日は、帰さない」

鞆からスタンガンを取りだし雄二に放った。そして悲鳴を上げ気絶した雄二を引きずり入場口へと消えて行った。

つーかどこでスタンガンなんか手に入れたんだよ！？
お！？
霧島さんよ

恭介「……あれはなんだったんだ？」

柊「……なんだったんだろうね？」

秀吉「………思いは人をあそこまで動かすんじゃない。」

明久「……………秀吉、それはなにかが違う気がする。」

瑞希「……………きつと今まで霧島さんの中に積もった、坂本君への思いが一気にあふれた結果だと思います。……………少し強すぎると思いますが……………」

姫路、それが正解だ多分。うん、ヤンデレって怖いね本当に。

玲奈「それではチケットを買って映画を見ましょう。」

5人が啞然としている中、何事もなかったように玲奈は受付の人に話しかけようとしている。おい玲奈よ、それでいいのか？

玲奈「皆さん？　どうかしましたか？」

恭介「……………いや、さっき雄二がきr（玲奈）「サカモトクンガナニカ？」……………何でもない。」

……………どうやら玲奈はまだ雄二のせいでAクラスに負けたことを許してないらしい。無論、俺も許した覚えはないが……………それでも玲奈、その満面の笑みはとても怖いです。

玲奈「ミナサンモ、ナニカミエタンデスカ？」

椀「な、何も見てないよ？（玲奈ちゃんが怖い）」

瑞希「な、何も有りませんでしたよ？（玲奈ちゃん怖いです）」

明久「う、うん、僕も見えてないよ？（ガクガクブルブル）」

秀吉「ワシのログには何もなかったのじゃ。」

全員が玲奈の笑みに冷汗をかきながら答える、秀吉は平静を装うとしているがブ○語で答えているのでどう考えても内心焦ってる。

玲奈「デワ、イキマシヨウミナサン。」

一同「「「「い、yes, mam!」「」「」」

あ、秀吉はこの状態の玲奈と二人きりか……頑張れ秀吉!! 超頑張れ!! 何かあったら骨だけは拾っというてやる。

因みに各々が買ったチケットは、

恭介・椀ペア ラブコメディー

明久・瑞希ペア 人気純愛小説の実写映画

秀吉・玲奈 推理サスペンス

Side 引き続き、恭介

ラブコメ映画を選んだ俺と椀は指定されたシアターに入って上映を待っていた。

恭介「もう直ぐ始まるな。」

柊「う、うん。そ、そうだね」

柊はさっきからこの調子だ、俺が話しかけてもキャッチするだけで投げ返してこないなので会話は途切れ途切れ、そのせいか少し居心地の悪い空気になっている。

恭介「……なあ、本当は俺と二人きりが嫌なn（柊）」「絶対、そんなことないよ!!」判ったから!! 声大きい!!」

柊「ご、ごめんなさい。」

幸いそこまで客が入って居なかったため数人俺達の方を振り向いただけだった。

柊「私、男の人と二人きりで映画を見るの初めてだから………その………き、緊張しちゃって。」

そんなことを言って恥ずかしそうに俯く、そんな柊も本当に可wゲフンゲフン

恭介「そんなに緊張するもんなのか？」

確かに俺は柊と二人きりという事には若干緊張しているが、女子と二人きりという事ではそこまで緊張しない。

柊「多分、恭介君は身近に玲奈ちゃんが居るからだよ。」

恭介「あゝ確かに。」

椛の言うとうりだ。中学時代は自宅で玲奈とその友達3人と俺と言う構図が日常茶飯事だったし（殆ど空気だったが）ここ一年は玲奈と二人暮らしで家の中では殆ど玲奈と二人きりだった。なるほど俺には女子への耐性がかなり有りそうだ。

恭介「まあ、そんなに緊張しないで、いつも道理で大丈夫だ。」

椛「うん、少し和らいだよ。ありがとうね恭介君。あ、始まるみたいだよ!!」

椛に（笑顔で）お礼を言われ若干テンションが上がった所でシアターが暗くなり上映が始まった。

この映画はCMで見て面白そうだなと少し期待していた作品で椛も見たい作品だったらしい、序盤はいかにも王道な展開だったがネタの内容が……

不良? 『ヒヤッハー!! 汚物は消毒だ!!』

生徒会長? 『俺様は天才だー!!』

ライバル
恋敵（男）『あゝあ出会っちゃったな』

先輩『筋肉革命だー!!』

ヒロイン（ツン）『うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい!!』

ヒロイン（ヤン）『嘘だ!!』

主人公『あゝもう!! 不幸だーーーーーー!!』

カオスすぎる、なんだよこの世紀末×2に厨二の星に筋肉馬鹿にくぎゅうに崇りに一級フラグ建築士ってどんだけだよ!!

椀「アハハハハ、恭介君これ面白いね!!」

恭介「あ、ああ」

そしてなんだか椀はツボに入っただのかずっと笑っているし、俺は笑ったら負けな気がしてきたし……

恭介（もう嫌だこの映画………）

結局最後は主人公とヒロイン（ツン）が結ばれてハッピーエンド? となった。

椀「面白かったね恭介君!! もし続編出たら一緒に見に行こう?」

恭介「ああ（続編出ても絶対見に行かねえ!!）」

椀さん私にはあなたの笑いのツボがおかしく思えるんだが……いや、元ネタを知っている俺の方がおかしいんだな うん。

そんなことを考えながら集合場所へと向かった。

Side 秀吉

恭介達と別れて玲奈と二人で目的のシアターにたどり着いたのじゃが…………

玲奈「……………（ゴゴゴゴゴゴゴゴ）」

未だに玲奈の怒りが収まってないのじゃ。周りのカップル達も玲奈の雰囲気気付いたのか半径3メートル位のスペースがあるのじゃ。

秀吉「れ、玲奈よ。」

玲奈「ナンデスカ？ ヒデヨシクン？」

秀吉「そろそろ怒るのを止めたらどうじゃ？ 今の玲奈では映画を楽しむことは出来ぬし、周りの皆まで居心地が悪くなってしまいうのじゃ。」

玲奈「……………そうですね、秀吉君。勝手に怒って気分を害してしまつて……………迷惑でしたよね……………ごめんなさい。」

今度はワシの言葉にすっかり落ち込んでしまったのじゃ。

秀吉「そう落ち込むでない、ワシは迷惑だとは思っておらぬ。あれはAクラスに負けた謝罪もなく勝手に霧島と帰ってしまった雄二への怒りじゃろうし、ワシも少し腹が立っているのう、後で恭介達と一緒に雄二をどうするか決めようと思っていたのじゃ。」

Aクラスに負けたことは別にいいのじゃが、玲奈を怒らせるような

ことをしたのなら幾ら雄二とて許せぬのじゃ!! (↑まさか自分が玲奈が雄二に対して怒っている理由とは夢にも思っていない)

秀吉「じゃから、今はそのような事は忘れて楽しく映画を見るのじゃ。」

玲奈「!! そうですね。ありがとうございます、秀吉君^{ニユ}」

そんなやり取りをして席に着くと、ちょうど映画が始まったのじゃ。

内容はある孤島に伝わる伝説を記事にするために夫婦旅行を兼ねて取材に向かった主人公がその島のホテルで不可解な殺人事件に巻き込まれてしまうというストーリーだったのじゃ。

こんど演劇部で推理ものをやるという事でこの映画を選んだのじゃが、女の子と二人で見るようなものでは無いのう。

すると玲奈はグロテスクなシーンが嫌なのか目を閉じてしまったのじゃ。

秀吉「(ヒソヒソ) すまぬ玲奈、グロテスクなのは苦手じゃったか。」

玲奈「(ヒソヒソ) 確かに少し苦手ですが実は……………」

玲奈は少し戸惑ってから複雑な顔をして

玲奈「(ヒソヒソ) 多分この物語の結末が解ってしまって、それが自分の苦手な結末だと思うので寝てしまおうと……………」

秀吉「（ヒソヒソ）そ、そうなのか、それなら仕方あるまい、終わったら起こすから安心して寝ていて大丈夫じゃ。」

玲奈「（ヒソヒソ）すみません、では失礼して。」

そう言って玲奈は眼を閉じ5分ほどで寝てしまったのじゃ。しかし、開始45分で結末が解ってしまうとは凄いのじゃ。

その後、結末としては犯人は主人公の妻で最終的には妻を止めようとした主人公も殺され、最後に自分も自殺するという後味の悪い作品じゃた。

玲奈を起こし（とても寝顔が可愛かったのじゃ）集合場所に向かっておると。

玲奈「結末は妻が犯人で主人公が殺され、妻は自殺でしたか？」

秀吉「うむ。すまぬのう、玲奈よ。このような後味の悪い映画を選んでしまい。」

玲奈「いえ、秀吉君は演技の勉強の為にこの映画を見たんでしょう？ 私は秀吉君の夢を応援しています、だから秀吉君の演技の幅が広がるのなら構いません。」

秀吉「あ、ありがとうなのじゃ玲奈。」

好きな人に自分の夢を応援されているなんて、ワシは幸せ袋のかもしれぬのじゃ。

そんな雑談をしながら集合場所へと向かって行ったのじゃ。

Side 明久

僕は今、姫路さんと映画を見てる真っ最中なんだけど……

主人公『○○……いくよ』

ヒロイン『……来て!!』

瑞希「……………／／／／／（カァ）」

明久「……………／／／／／（ツー）」↑（鼻血）

えっ!？ これR18な映画じゃないよね!？ 確かに布団でうまく見えない様にしてるけど間違いなくR18が付く作品だよね!？

明久「（ヒソヒソ）ま、まさか、こ、こんなシーンがあるなんてね?」

瑞希「（ヒソヒソ）は、はい、予想してませんでした。」

流石に姫路さんも顔を真っ赤にして恥ずかしそうに俯いている、そしてさっきからブツブツ呟いているけど何なんだろう？

瑞希（わ、私もよ、吉井君とこ、こんなことを……………キャッ!）

結局このシーンのせいでまともに映画も見れず姫路さんとの間に微妙な雰囲気が残ったまま僕たちは集合場所へと向かって行った。

Side 恭介

玲奈「さて、皆さんそろいましたね。」

映画が終わり10分後、待ち合わせ場所に全員が揃い玲奈が話し出した。

玲奈「本当はこの後、全員で遊ぼうと思っていたんですがもう遅いですし今日は解散としましょう。」

恭介「そうだな、外食できるほどのお金も無いし。」

俺は実質、俺、椛、姫路、明久の分の映画代を払っているので残りは野口×3枚。これ以上使うと今月の小遣いが0となってしまう。

俺や玲奈の言葉に皆納得したようで映画館の外まで出て解散となった。

玲奈「兄さん。」

恭介「なんだ?」

玲奈「(ニマニマ)楽しかったですか?」

恭介「……まあな。」

帰り道、妙にニヤニヤしながら聞いてくる、玲奈に若干（椀を好きなことが）バレたか？ と思いながら自宅へと向かって行った。

閑話 トリプルデート（笑）編（後書き）

どうも作者です。

遅れた理由は前書きの通りです。

17..00~22..00×4日は流石にきつかったです（^| ^;）

今回はAクラス戦後すぐの映画デート（笑）です。

いつもよりネタ多目で書きました。

ですが最後の明久と瑞希の場面が少なかったのは時間の都合と作者の体力の限界でした。許して下さい。

さて次回はラブレター編、ここで一組カップルを作ります！！（※明久×瑞希は10巻の内容と11巻の内容次第ではカップルにしない可能性が出てきました、ご了承ください。）

今回はこの辺で。

質問、感想、意見、コラボ希望、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

これからもよろしく願います。

ラブレターと暴徒編（前編）（前書き）

どうも作者です。

今日は大晦日、今年最後の投稿です!!

ではどうぞ!!

ラブレターと暴徒編（前編）

Side 恭介

明久「うーん……ありえない登校時間だ。」

恭介「ああ。早起きし過ぎたな。」

俺と明久は何時もより1時間早く、登校していた。

明久「早起きは三文の得って言うし、何かイイコトがあるといいなあ〜」

恭介「そうだな、帰りに宝くじでも買ってみるか!!」

明久「はは、恭介らしいね。」

昨日学校から帰ってすぐに寝てしまい、気付いたら朝の4時だった。二度寝しようとしたが全く眠れないので1時間ランニングをしてシャワーを浴び、朝ご飯とお弁当を作り玲奈が起きる前に食卓に『先に行く』とメモを残し家を出た所にばったりと明久とあって今に至る。

明久「さてさて、こんな時間から何をしようかな——ん？」

恭介「お、西村さんだ。相変わらず早いな。」

いつの間にか校門までやって来ていたようで、刈り揃えられた髪に鍛え抜かれた体の傭兵スネークもとい征服王ではなく、教師の西村さんが校

門に立っていた。

明久「先生、おはようございまーす。」

恭介「おぞまーす」

いつも通り挨拶をすると。

西村先生「おう、おはよう！ 部活の朝練か？ 感心だ——」

西村さんの動きが止まった。

明久「先生？」

恭介「どうかしたか、西村さん？」

西村先生「——すまん。間違えた。」

恭介「あー、確かに『部活の朝練か？』って言ったな、けど謝る程の事じゃ無いぜ？」

明久「そうですよ、別に謝る必要なんて。」

西村先生「吉井、こんな朝早くに学校に来て、今度は何を企んでいる。水谷（兄）お前は珍しく早いな、今日は雪か？」

そう言って爽やかな笑顔から一転、明久には警戒心をあらわにして俺には驚きをあらわにした。

明久「あの……間違えたのは接する態度ですか？」

恭介「昨日は家帰ってすぐ寝て、気付いたら4時だった。」

西村先生「吉井。落ち着いてきたとはいえ、お前を警戒するのは教師として当たり前だ。水谷（兄）お前は本当に極端な奴だな、遅刻で昼過ぎに来た時もあっただろ。」

……まあ、うん、なんだ。あの時は徹夜するつもりだったんだが珍しく玲奈が風邪で休むことになって、朝ご飯にお粥作って部屋で着替えようとしたら力尽きて気が付いたら12時30分だったんだよな。懐かしいぜ、確か去年の11月だったな。

西村先生「まあ、丁度よかった。《観察処分者》とバグで物理干渉のできる召喚獣を持つお前らが居るなら手間が省ける。」

明久「げ。《観察処分者》ってことは、また力仕事ですか？」

恭介「まあ、そうだろうな。で、西村さん仕事は何だ？」

西村先生「古くなったサッカーゴールを撤去してくれ。」

明久「やれやれ。早起きなんてするんじゃないかなかったなあ……」

恭介「別にいいじゃんか明久、召喚獣の操作の練習になると思えば。」

明久は溜息をついているがゴールを運ぶことで召喚獣操作の微妙な力加減とバランス能力の技術がUPする。いや、早起きして良かった。

西村先生「吉井、後悔するのは早起きではなく、観察処分を受けたお前の生活態度だ。水谷（兄）お前はこれ以上、召喚獣操作を上手くしてどうするつもりだ？」

西村さんはそれぞれ別の理由で呆れたように溜息をつく。

明久「うう……。僕はそんなに悪い事なんてしてないのに……。」

西村先生「……どの口でそんなことが言えるんだ。」

恭介「うーん。とりあえずAクラスを一人で殲滅できるぐらいの技術が欲しいかな？」

西村先生「……止めてくれ。お前だと本当に出来るようになりそうで怖い。」

恭介「冗談、冗談。流石に無理だろ。」

西村さん「……質の悪い冗談は止めてくれ。二人ともグラウンドに来い。」

明久「へーいへい」

恭介「わかった。」

西村さんに連れられ陸上部が朝練しているグラウンドまでやって来た。朝からご苦労様だな。

西村先生「吉井、水谷（兄）、頼んだ。」

明久・恭介「「試獣召喚!!」」

俺と明久が宣言するとそれぞれがデフォルメされた召喚獣が姿を現した。

西村先生「それじゃ、そのゴールを持たせて。」

明久「はいよ。」

恭介「よいしょ。」

俺と明久の指示を受けて召喚獣が背丈の何倍もあるサッカーゴールを持ち上げた。本当に凄いよな召喚獣って。

恭介「で、どこまで運ぶんですか？ 西村さん？」

西村先生「街外れの産廃場まで行ってこい。」

明久「何kmあると思ってんですか!？」

恭介「……………投げれば行けるか？」

西村さんの言葉を受けて明久は抗議を俺は総合科目4600点ある召喚獣が全力でこのゴールを投げたら何km飛ぶか計算し始めた。

西村先生「二人とも冗談だ。ゴールネットを外して校門前に邪魔にならないように置いておけばいい。」

明久「なんだ、ビックリした〜。」

恭介「流石に冗談きついで、西村さん。」

西村先生「五月蠅いさっきの仕返しだ。外したネットは別口で処分するから、とりあえずは体育用具室にでも置いといてくれ。」

明久「はあ……。今日も一日イイコトなんてなさそうだなあ……」

恭介「まあ、いい運動になったと思えばな？」

俺はガツクリしている明久を励ましながら、西村さんの指示通りゴールを運び始めた。

ゴールを運び終えた頃には朝のSHR前になっていた、これじゃ何時もと大差無いな。ゴールネットを体育用具室に運んでいる時間は無いし、一旦教室へ持って行くことにした。

そして教室へ向かう俺達を迎えたのは、靴箱に置かれていたラブレターのようなナニカだった。

明久「な、なんじゃこりゃあぁっ!？」

恭介「落ち着け明久。」

とりあえず叫びだした明久を宥める。驚くのは解るが流石に動揺し過ぎだ。

雄二「どうした、明久? ……と恭介?」

恭介「待て、なんで俺の時だけ間がある?」

明久「あ、ああ。雄二か。おはよう。」

雄二「おう。」

片手を上げて明久の挨拶に応えたのは、クラスメイトの雄二（と書いてアホゴリラと読む）だ。

恭介「……俺の質問は無視かよコノヤロウ。」

雄二「うるせえ!! それより明久は何で動揺している？」

恭介「……不足の事態に陥って脳の処理が間に合っていないだけだ。直に元に戻るから気にせず先に教室にでも行ってる。」

雄二「……ほう？ で、お前の持っているその手紙は？」

恭介「多分ラブレター、もしくは不幸の手紙か脅迫の手紙。」

雄二「……そうか。お、そろそろHRの時間だ校内に居て遅刻するのは癪だな、さっさと教室に行くか（これは面白い暇つぶしが出来たな。）」

そう言って雄二は教室へと向かって行った。俺も流石に遅刻するのは嫌なので明久の頭の処理を通常に戻し教室へと向かった。……………何か嫌な予感がしてきたぞ……………

西村先生「工藤」

工藤「はい」

西村先生「久保」

久保「はい」

西村先生「狩谷」

狩谷「はい」

教室に入ると、ちょうどチャイムが鳴り、西村さんも間髪を入れずに入室する。教壇に立つと、すぐさま出席を取り始めた。

西村先生「近藤」

近藤「はい」

西村先生「斉藤」

斉藤「はい」

いつも通り覇気の無い挨拶をしていくクラスメート、暖かい日差しが差し込む中、平穏な日常が――――

西村先生「坂本」

雄二「……明久と恭介がラブレターをもらったようだ」

F男子一同『殺せええっ!!!』

雄二の一言でぶち壊れた、このクソ野郎!! このFクラスのと真ん中でなんてことを……

モブ『ありえん！？　吉井と水谷（兄）がそんな物を貰うなんて！』

モブ『それなら俺たちが貰っていてもおかしくないはずだ！』

モブ『きつと、奥ゆかしい美少女が恥ずかしがって隠したに違いない！』

モブ『なるほど！　探せ！　自分の席の周りを探すんだ！』

モブ『ダメだ！　腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！』

恭介「お前らは何を探してるんだ？」

怒号飛び交う教室内は、嫉妬と狂気に支配されつつあった。

西村先生「静かにせんか！　バカ者ども！」

と西村さんが声で一喝、ただの一言で静寂が戻る。

西村先生「それでは出欠確認を続ける。手塚」

手塚「吉井と水谷（兄）　クロス」

ピクピク

西村先生「藤堂」

須藤「吉井と水谷（兄）　クロス」

ピクピク

西村先生「戸沢」

戸沢「吉井と水谷（兄）コロス」
ピクピク

明久「皆落ち着くんだ！　なぜか返事が『吉井コロス』と『水谷（兄）コロス』に変わってるよ！？」

西村先生「吉井、静かにしろ！！」

明久「先生、ここで注意すべき相手は僕じゃないでしょう！？このままだとクラスの皆は僕と恭介に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！！　恭介から何か言つてよ！！」

明久が抗議しても俺も西村さんも無視、それもそうだなんせさつきから……

西村先生「新田」

新田「吉井と水谷（兄）コロス」

ピキピキ

西村先生「布田」

布田「吉井と水谷（兄）マジ殺す」

ピキピキ

西村先生「根岸」

根岸「吉井と水谷（兄）ブチ殺す」

プツン

西村先生「水谷（兄）」

恭介「殺れるもんなら殺ってみろ！！」

西村先生「水谷（妹）」

玲奈「ニイサンヲコロスナンテヨクイエマスネ、カクゴハイイデスカミナサン？」

だって玲奈様がお怒りになられているのだものbyみ〇を。

F一同（わ、忘れてたー！！！）

玲奈の怒りにすっかり血の気の引いた男子どもは焦り始めた。

西村先生「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように」

F一同『待って先生！ 行かないで！ 可愛い生徒達を見殺しにしないで！！』

西村先生「お前ら間違えるな！！」

西村さんが扉に手をかけたまま告げる。

西村先生「自業自得だ。」

F一同「イ、イエエエヤアアアアアアアア！！」

男子どもの懇願も虚しく西村さんは教室を出て行った。つくづく思うがこいつ等は本物の馬鹿どもだ！！

美波「アキ、ちよーっと話を聞かせてもらえる」

気付くと島田はいつの間にか明久に近づき真っ先に肩を掴んだ。早っ！！ さてはこいつ忍者だな！！

明久「あ、あはは……。美波、顔が怖いよ」

美波「手紙を貰ったの？誰からなの？どんな手紙なの？」

島田は明久を質問攻めにしている、まるでポニーテールが角のようだ。

明久「あー、えっと、そのー」

美波「いいからおとなしく指の骨をーじゃなくて、手紙を見せなさい」

断れば明久の指はありえない曲がり方をするだろーな。流石に助けに入るか。

恭介「島田いい加減にしろよ？」

美波「なによ！！ あんたには関係ないでしょ！！」

まあ、確かに俺には関係ないが……

恭介「いや、お前にも関係ないだろ？ 第一、明久が誰からラブレターを貰おうとどんな返事を出そうと明久の自由だろ？ ならお前に明久がラブレターらしき手紙を見せる必要はないだろ？ Do you understand？」

これ以上メンドクサイのはごめんなので冷静に淡々と正論を述べる。

美波「う、うう……で、でも！！」

恭介「でもなんだよ。これ以上はプライバシーの侵害と暴行罪になるぞ？ 大人しく座ってろ。」

そう言うのと大人しく自分の席に戻って行った。

明久「はあ、ありがとう恭介。」

恭介「気にするな、さてじゃあ今のうちに手紙の中身を見ちまうkモブ
「させるか！！」うおっと！？」

明久と今のうちに手紙を見ようとするのとクラスの男子の一人がいきなり殴りかかってきた。ば、馬鹿な！！ 奴らは玲奈に捕まっていたはずじゃ……

そう思い玲奈の居た方を見ると。

椛「れ、れれれれれ玲奈ちゃん。ど、どどどどどどどどどどどうしよう！？ 恭介君がららららららららラブレターを……………」

瑞希「れ、い、な、ぢ、ゃ、ん、よ、じ、い、ぐ、ん、が、ら、ぶ、れ、だ、ー、を……………（玲奈ちゃん、吉井君がラブレターを……………）」

玲奈「え、えっと。と、とりあえず、お、落ち着いて下さい。ふ、二人とも！！」

そこには泣き崩れた姫路と半端ない位、動揺をしている椛の二人が玲奈に泣きついていていた。ええい！！こんなにめんどくさい時に！！

雄二「皆、ちょっと落ち着け」

そんな中、雄二が教卓を叩く。

雄二「今問題なのは明久と恭介の手紙を見ることがじゃない」

雄二がクラスの連中に言い聞かせるように言葉を紡ぐ、いや全ての原因はお前だから！！

雄二「問題は、明久と恭介をどうグロテスクに殺すかだ」

恭介「この外道が！！ 逃げるぞ明久！！」

流石に33人相手にする気力は無いので明久と一緒に荷物をまとめて教室からescapeした。

モブ「逃がすなあっ！ 追撃退を組織しろ！」

モブ「手紙を奪え！吉井を殺せ！」

モブ「サーチ&デス！」

明久「そこはせめてデストロイで！」

恭介「無駄口叩いてないで走れ！！」

ほんと嫌な結束力を持ったクラスだよ。本当。あゝもうなんて言うか……

恭介「不幸だあああゝ！！！」

某一級フラグ建築士の捨て台詞を吐きながら命がけの鬼ごっこに勝つために爆走するのだった。

ラブレターと暴徒編（前編）（後書き）

どうも作者です。

今年はあるという間の一年でした。

さて今回は3・5巻のラブレター編の逃げ出すまでのシーンです。

流石に一回の投稿で書ききれるものでは無かったので2もしくは3分割にします。

年をまたいで後編、もしくは中編を書きたかった。ただそれだけです（キリッ

今回はこの辺で。

質問、感想、意見、誤字、脱字、批判、指摘等、絶賛受付中です。

来年もバカとテストと召喚獣と水谷兄妹とFクラスとをよろしく
お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9417v/>

バカとテストと召喚獣～水谷兄妹とFクラスと～

2011年12月31日22時52分発行